

鹿兒島県史料

旧記雑録後編

二

題
字

鎌田 要人
鹿兒島県知事

例言

一 本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）「後編 舊記雜錄」を底本とし、卷十六から卷三十五までを収めて、「鹿兒島県史料旧記雜錄後編 二」として刊行するものである。本書に収載した文書の年代は、天正十三年から文祿四年までの十一年間である。

一 底本に欠脱した一部の文書・記録・記事を、鹿兒島県立図書館所蔵本から採録増補した。

一 底本に省略されている連歌は、「島津氏世録正統系図」などより補充し、上井覚兼日記の省略部分は、「伊勢守日記」より補充し、補充部分は ▽ △ で示した。

一 収載された文書について、原文書や影写本がある場合にはそれにより修正したが、いちいちそのか所は示さなかつた。

一 文書・記録・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一 文書・記録・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一 卷末に文書目録をかかげた。

一 刊行にあたって文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

イ 文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、「」（墨書）、「」（朱書）で囲んだ。

ロ 合点は、頭または右肩に「　」(墨)、「　」(朱)で示した。

ハ 文書の年月日・差出・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

ニ 書状の封じ目は、底本にあわせて「ノ／＼」や「フ／＼」を併用した。

ホ 花押は(花押)とし、適宜に人名を傍注した。また底本に「在御判」とある場合でも、原文書や「島津氏世録

正統系図」などに花押があれば、(花押)と改めた。

ヘ 端裏書・付紙などは、「　」で囲み、右肩にその旨を注記した。

ト 文書・記録・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一 原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は▭を以て示し、解説困難な字は▨又は▩にして(ヨメズ)と注を付した。

一 原文の抹消は、その文字の左側に「と」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一 頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連か所の文末にまとめた。

一 人名・地名には適宜に傍注を付したが、原注と区別するために()で囲んだ。

一 原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一 欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一 漢字は原則として底本の用字に従い、改める場合はなるべく正字を使用するが、底本の文意をそこなわないものは、一部当用漢字新字体を使用した。

- 一 異・略・俗体文字は、大部分を普通の字に改めたが、一部底本の用字に従い、併用したものもある。
- 一 変体仮名などは、現行の平假名に改めた。
- 一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。
 - 陳(陣) 蜜(密) 諏方(訪) 覺(鹿兒) 飛彈(驛) 太輔(大) 狼籍(藉) 百性(姓)
 - 玄番(蕃) 愛岩(宕)

旧記雜錄後編二目次

例言	一	
目次	四	
卷一六	天正一三(一五八五)年	(義久公・義弘公).....一	
卷一七	天正一四(一五八六)年	(義久公・義弘公).....一三八	
卷一八	天正一四(一五八六)年	八月——十二月	(義久公・義弘公).....二一三
卷一九	天正一五(一五八七)年	正月——三月	(義久公・義弘公).....二六九
卷二〇	天正一五(一五八七)年	四月——五月	(義久公・義弘公).....三一五
卷二一	天正一五(一五八七)年	六月——十二月	(義久公・義弘公).....三四一
卷二二	天正一六(一五八八)年	正月——七月	(義久公・義弘公).....三七六
卷二三	天正一六(一五八八)年	八月——十二月	(義久公・義弘公).....四〇五
卷二四	天正一七(一五八九)年		(義久公・義弘公・久保公).....四二七
卷二五	天正一八(一五九〇)年		(義久公・義弘公・久保公).....四五七
卷二六	天正一九(一五九一)年		(義久公・義弘公・久保公).....四九四
卷二七	天正二〇(一五九二)年		(義久公・義弘公・久保公).....五二七
卷二八	文祿元(一九九二)年	七月——十二月	(義久公・義弘公・久保公).....五七八

卷二九	文祿 二(一五九三)年	(義久公・義弘公)……………	六二二
卷三〇	文祿 二(一五九三)年	(義久公・義弘公・久保公・家久公)……………	六六〇
卷三一	文祿 二(一五九三)年	(義久公・義弘公・家久公)……………	七一三
卷三二	文祿 三(一五九四)年 正月——七月	(義久公・義弘公・家久公)……………	七六〇
卷三三	文祿 三(一五九四)年 八月——十二月	(義久公・義弘公・家久公)……………	八〇三
卷三四	文祿 四(一五九五)年 正月——六月	(義久公・義弘公・家久公)……………	八五八
卷三五	文祿 四(一五九五)年 七月——十二月	(義久公・義弘公・家久公)……………	八九八
文書目録……………			九三七

〔表紙〕

義久公
義弘公
天正十三年

後
編 舊記雜錄 卷十六

〔原寸縦二四・三センチ 横一六・七センチ〕

1 天正十三年乙酉

花山陣之事、

擊隈庄之凶徒、攻落甲佐・堅志田等事、

阿蘇降參之事、

2

〔忠將一流系圖〕

守右衛門尉彰久子

久信

初忠仍 又四郎 相模守

天正十三年乙酉誕生、母 太守義久公第二女也、

3

〔御文庫廿二番箱四卷中〕

今歲御慶重疊、仍去冬高瀨表乘陳之刻、豊州衆開陣之儀申理候、即雖有承引、于今高良山へ滞在候哉、慮外至極候、然者高良山座主蒲池方・黒木方、連日内通之儀共候喜、寔肝心之儀、聊無忘却候、自然之時者、彼三家之事茂旁一致於被仰組者、倍向後無疎懷可申談之旨、本望之事候、恐、

秋月殿へ

〔外ニ同文アリ、末ニ

龍造寺之儀ニヨリ、秋月への御書、同老中狀ハ諸所への草案也〕

4

〔全卷中〕

今年御吉兆多幸々、仍遙不申通、非本意候、然者豊州衆歸陣之儀、去冬從高瀨境申理候之処、于今高良山へ滞留候哉、不可然儀候、僞者其表之事茂、龍・秋同懷於被仰合者、永く別而可申承覚悟候、猶巨細者期後便之時候、恐、

二通

兩津江殿へ

〔上書〕

兩津江方へ

5 「御文庫廿二番箱四卷中」 「義久公御譜中ニ在リ」

如芳翰、龍造寺之事、可爲幕下之由、度々懇望之処、以御入魂一着、珍重之儀候、抑爲這般コレヲ之祝詞、甲冑到來、満足候、弥向後連綿之段、不可有別儀候、仍馬一疋毛進之候、酬礼計候、恐々、

「朱カキ」
「天正十三年」正月十九日

御

秋月殿

6 「全卷中」 「義久公御譜中ニ在リ」

今歲御吉兆多幸々々、仍厥后遙申絶、寔非本意候、然者豊州衆歸陣肝要之儀、去冬從高瀨境堅申理候之処、于今高良山へ滞在候哉、不可然儀候、備者其表之事茂、龍・秋同懷ニ於被仰合者、永々別而可申承覚悟候、余者期後便之時候、恐々、

「朱カキ」
「天正十三年」

老

兩津江殿へ

二通

7 「御文庫廿二番箱四卷中」 「義久公御譜中ニ在リ」

今春御嘉祥不易幸甚々々、抑去冬高瀨乘陳之節、至忠平

御懇札、于今珍重候、然者豊州衆開陳之儀、申通候之処、

此涯迄高良山へ居在候之哉、覚外之儀候、其表之事茂、爲兼諸候辻、無疎遠可申談事、所庶幾候、旁期來喜候、恐々、

「御譜中朱カキ」
「天正十三年正月歟」

宮成殿

「朱カキ」
老

時枝殿

二通

8 「全卷中」

「限本三人へ 御書案」

就元服之儀、此度懇勸之使節、尤欣悅候、則任其旨候、仍馬一疋進之候、寔表祝詞計候、恐々、

四月十日

賀惠九郎殿

9 「御文庫廿二番箱四卷中」

追而令申候、龍造寺多年至當邦純熟候之処、相良逆意之刻、龍同懷候、爲散其鬱憤、高來表軍衆打渡遂一戰、隆信討果候、已來秋月頼向後、薩可爲幕下之由、懇望候、雖被相支候、強而依致侘、難黙止赦免候、然間神名血判

互取替、改先非、自今已後、當家下知次第相定候之處、

今度又々變易慮外千万候、如此之表裏者候之条、定而種々申登儀可有之候、何篇可爲偽之間、右以御覚悟可被仰放事所希候、畢竟彼仁於致成敗者、貴國御用等、不寄何条可相調候、猶追而使節可被差登候之間、令省略候、恐惶謹言、

「此書宛無之」

10 「義久公御譜中」

「案又有之」^{「朱カキ」}「龍造寺之儀ニヨリ、秋月江之御書、同老中狀者譜所江

之草案也」

當春御慶重疊、仍去冬高瀨表乘陳之刻、豊州衆開陣專用之儀申理候、即雖有承引、于今高良山へ滞在候之哉、慮外至極候、然者高良山座主蒲池方・黒木方連日内通之儀共候喜、寔肝心之段、聊無忘却候、自然之時者、彼三家之事茂旁一致ニ於被仰組者、向後倍無疎懷可申談之旨、本望候、恐々、

「朱カキ」
「天正十三年正月欽」

老

秋月殿へ

11 「御文庫拾六番箱六卷中」^{「義弘公御譜中ニ在リ」}

猶々申上候、彼儀者本野州・拙子只兩人までニ被仰聞せ候、野州被申事ニハ、忠平様御名代之御事ハ、御くしまても不入事候、別ニ誰人にてあらそひ申候する方無之候間、御神慮と被仰事ハ得心不申候由、本刑ニ物語にて候つる由、本刑拙子ニ被申候キ、御耳ニ何分ニ入申候哉、不存候、御神慮事成申さす候共、菟角八城ニハ移御申有へく之由聞得候間、其御分別可入候、伊作御八幡ハ、御前も御うふ神にて候、又忠平様も御うふ神にて御座候間、彼於□候ハ、神前ミくしと被思召候由、被仰聞せ候、能く御祈念共可入かと存事候、ケ様之事申上候身上おそろしく存候へ共、申上す候てハ如何存候条、如此候、御おんミつ奉頼候、彼飛却上申候も、此方にてハ馬之くすり申請候と内之者ニ申聞せ申候、あやつり候て飛却上申候、そはニ召仕候者共も心を不存候間申事候、於御方も其御分別可目出候、只馬之くすり所望申上候由可被仰候、拙子も來十四日迄ハ此方ニ逗留申へく候、自然御用候ハ、其内ニ可承候、かこしまにてハ世上おそろしく候間、此節ハ御使なども被下間

敷候、爲御存知候、此文も御覽し分ましく候へ共、

態拙子仕候、御察之前たるへく候、乍重言御慮之時

分ハいつとも候ハす候、定而今月中たるへく候、能

く伊作八幡へ御立願可被成候、目出度候、恐く、

御慶萬幸とく、仍昨日爰元罷渡候、然者其朝於鹿兒嶋本

田刑部少輔方以被仰聞せ候趣、忠平様を御名代ニ頼

御申有度候、さてハ伊作八幡被成御社參、御くし御申候

て、御神慮事成候ハ、如其被仰定、八城ニ移御申候て、

肥州表惣別之御見廻頼御申候する、萬一御くし事成申候

ハす共、忠平様八城ニ移御申可有候、六ヶ國之事、自

鹿兒嶋御校量者難届被思召候、然間、彼是以八城ニ移御

申有へく候、御名代之御くし事ならず候ハ、八城表一

圓御參候て、眞幸之事ハ少く自八城御かくこ候様にと被

思召候、馬越などハ自元御上可有かと被仰候、菟角八城

御移ハはつれ申間敷由聞得候、就此儀御分別可入事可有

候間、即時申上候、寔雖不淺儀候、連く被懸御目候条、

如此候、乍不申、此文火中、万吉、恐惶謹言、

〔御禮ノ朱カキ〕
天正十三年二月六日

忠棟(花押)

伊右衛門太夫

武庫様

參御近業中

忠棟

〔此一書ヲ按スルニ、天正十三年乙酉四月、忠平公守護代ト爲ラセラレ、

既ニシテ、肥後八代ニ御在城云とアレハ、豫メ御内評ハ十三年ノ二

月比ニ當ルカ、上井日記ニ十三年三月朔日、太守様伊作江御光儀被成、

八幡宮江爲御社參之也トアリ、又同日記中、同年卯月廿四日云と、武

庫様八城江御移被成、御名代ニ御座候間、國家之儀等可裁判之由、被

仰出候云と、參照スヘシ

12
〔義久公御譜中〕

天正十三年乙酉二月六日、宇都氏使中間贈賀札、故俾中

間爲奏者、見之於舞臺、又土持彈正忠贈使書、去年依懇

望、昇諱字、由是稱久綱也、

天正十三年二月九日、毛利殿使僧五戒房下着曰、有上使、

我今慮之、兩三日之間、殆乎可到著歟、

同月十日、城入道一要使川原氏述慶賀、贈以太刀・織筋

二、大野氏亦有使者、贈以鎧冑、兩使共見焉、

天正十三年二月十二日、上使柳澤新右衛門尉元政、發

於伊集院、到於覽島、上下廿五六人也、定宿舍於入來院

假屋、使平田豊前守迎豎野之邊、爲宿所指南、恣致休息、

及晚來、使吉田美作守往 上使之旅館、遠經海陸、所以

到陋邦之演說辛苦者也、

同月十三日、北郷彈正忠遂參謁述慶賀、任恆例進三獻、

又田之浦某來謁、獻太刀・織筋二也、

天正十三年二月十五日、義久獻 上使旅館、 上使下庭

上、禮讓移刻、以故我先入座、次以 上使、而後禮詞互

終、則 上使添刀於太刀、將授本田下野守、我見之、則

去席下座、而自受之、即以退出矣、 上使送門外、敬屈

殊以厚矣、

天正十三年二月十八日、 上使將到私宅、令吉田美作守

差客舍爲指南、已 上使將入宅中之際、義久出緣端請座

席、自他共偕頓首再拜、而後座其席、爲一禮去席下座、

帶文箱以再進其席、出御教書於箱中、去上包入懷中、唯

畀御教書於我、我受之頂戴再三之後、置 御書於床上、

去年九月四日 於堂上授太刀、影片傍不動尊形、片傍之御教書也、又上使去席、

於町田出羽守、出羽守受之以進對面所、立床上矣、

美麗、於町田出羽守、出羽守受之以進對面所、立床上矣、次授鞍

其後 上使座前席矣、於茲吉田美作守受元政之太刀・馬

所以披露也、其後進三獻、次召橋隱軒、及雜話、此間附

與眞木島玄番頭昭光・一色駿河守昭秀之奉書、去年九月十日書也、

各披露狀也、少焉上使歸宿也、

「歸洛之儀云々、天正十二年嶋津修理太夫殿宛前年ニ載テ此ニ略ス、參

照スヘシ、昭光・昭秀ノ書モ前年ニ載置也」

13 「義久公御譜中」

天正十三年二月廿日、對面毛利殿使僧五戒房、贈縮羅甘

端、使僧亦進松原十帖・轡一个、彼僧爲 上使指南、先

上使、去九日到覺島矣、匪啻 上使指南、所與龍造寺肥

前守政家和平之述祝詞也、又有馬氏來謁矣、得太刀治工

馬疋、甲冑於我、即進三獻、又大村氏差使節述禮詞、贈

以太刀・段子二端也、

天正十三年二月廿四日、有馬氏官途及諱字所望也、義久

曰、有馬殿代代賜 將軍家諱字被定名字、與當家諱字何

之如、辭退再三、然而有馬殿云、賜義字爲名字者、先代

既去、今也因當家扶助、保身立家、宜連綿屬旗下抽忠功、

然則不可氏族之不得恩免、以不得已而畀久字、任左衛門

太夫也、

同日請待 上使進饗、毛利殿使僧五戒房亦招其席、終日

進和調開酒宴也、

天正十三年二月廿七日、爲有馬氏所畀諱字許任官之述祝

禮、來私宅矣、得稱畀諱久字之祝物、太刀一腰・黃金廿

兩・鈍金二端、稱任官祝物、太刀一腰・白絲五十斤・南蠻頭巾與蓑衣・珍肴折肴・白鳥・鮓酒三十荷矣、于時備盛膳勸美酒、已迄三獻、則欲飲持參之酒、有馬氏自酌義久飲焉、即自酌酬左衛門大夫、而後左衛門大夫下座持寶刀治工實、來、授吉田美作守、而歸元座、美作守持來授我、

我領焉、即昇所帶之刀於左衛門大夫、不可嘉賓合會無其與、催醮安爲歌舞、於茲左衛門大夫之弟新八郎參進、以爲一獻之配酌、安富左兵衛尉・大村兵部大輔及洛陽醫師竹田法印見矣、各獻太刀・馬也、醫師獻織筋一・杉原・

扇子、自未時至黃昏佳興未止而退出也、
天正十三年二月廿九日、義久扣有馬氏之旅宿、述不遠海陸來懇志之不淺、有馬氏出途中而躊躇以拜伏、由是速所以歸也、于時左衛門大夫來、匪翹今之述禮詞、獻太刀、

張翰也、今日使吉田美作守昇甲冑・馬川原、於左衛門大夫、是亦聊所以寸志之伸屈曲也、

14 「羽月郷大島村若宮棟札」

若宮八幡板正躰梵字認在之由
堂四敷三間茅草

右此御神者、西原八幡宮之若宮、西原者前三州大守久豐公之第四御子出羽守有久公御嫡子島津羽州忠明也、

号大口殿、然所享祿三庚寅七月廿七日夜半ニ、菱刈大和守重續押寄、奉討彼忠明公云々、然間、其靈社西原

八幡是也、亦此若宮者、忠明公御嫡男島津次郎四郎明久也、生年十六歲之御時、享祿二己丑九月二日、大島ニテ打死給也、西原与同社ニ奉崇、其以後、依有奇瑞、

三州太守 義久公、從西原奉分移給也、從戰死五十六年ニ相當、時此島奉勸請給云々、
(マツ)

大檀那修理太夫義久
天正十三年乙酉三月二日

新納武藏守 忠元
大願主當地頭
大宮司 大島出羽守 忠富

15 「御文庫四拾九番箱中」
「義久公御譜中正文在高岡衆春田主馬重昌トアリ」

毛利・小早川事茂、尔來絕音問疎遠之樣候由、自然致下國候者、可相達之由申聞候、必當春夏之間、可被申入候、かしこ、

雖未申通候令啓達、仍愚拙事、毛利備依之儀候、然者近年羽筑・藝州和陸之儀相調、上下仕候故、筑州被相雇候之条、至豊州爲使令下向候、就其對貴家御鷹爲所望、以

一札被申入候、尤雖可致持參候、遠境候条、至休庵飛脚申請、令進覽候、羽筑書狀楚末之樣候、當時被任公家候条、如斯候欵、被成御分別、御報可爲欣悅候、至京都御用等可被仰上候、猶期後音候、恐惶謹言、
〔御禮中朱力キ〕
〔天正十三年〕三月十五日 惠瓊〔花押〕

嶋津殿

參御宿所

〔上包〕

嶋津殿

參人々御中

安國寺

惠瓊

16

〔上井日記〕
▽天十三

正月

一朔日、如恆例、雨降候間社參者不仕候、鎧着始候、着等如舊例、衆中各札被成候、城内之衆廿人計ニ三獻參會候、各酒着等預候、銘々賞翫仕候、衆中悉皆ニ、拙者酌申候て御酒參せ候、終日酒宴共也、慶賀など如例年、今日毎年祝言迄ニ發句申候、然者當年者立春遅候間、

越てたに春のまたる、今年かな

一二日、任舊式吉書仕候、此日鎌田源左衛門尉殿〔兼政〕、其外城内衆中へ礼申候、何れへも御酒持せ候、各勝例年馳走之會尺共也、恭安様〔上井兼政〕へ如恆例賀札并使者・御酒等進上申候、礼儀衆など繁多之条、不及記候、海江田よりも少く御酒など持來候、

一三日、奈古八幡へ社參申候、參錢百足持せ候、宮之樣式如例、大宮司泉境坊へ礼申候、種々會尺共也、從夫寄く衆中ニ礼申候也、罷歸候て毘沙門へ參候、其後節供之躰如旧例、海江田之衆各來候、酒着など持來候、從佐土原二三人御酒被持來候、即見參申候也、此晚滿願寺へ御礼ニ參候、種々御會尺也、御酒持せ候、御酌など申候、

一四日、滿願寺・本坊・西方院・金剛寺、此外諸出家衆御出候、如恆例三獻參會候、各御酒御持せ候間、左様之賞翫共申候て、心靜ニ酒宴也、又山臥衆各被來候、是も同前ニ會尺申候、御酒各預候也、社家衆も各來候、酒着など持來候、從海江田も來候也、町衆も各差出候、見參申候、百性各來候、是も見參仕候也、

一五日、善哉坊被來候、如旧例三獻寄合候、御酒預候、賞翫申候、加江田諸出家被來候、是も三獻寄合候、銘

くニ御酒持せられ候、賞翫申候、野村丹後守・井野彦(友綱)六左衛門尉など御酒被持來候、參會申候、廣原・跡江などより出家衆あまた礼ニ被來候、新納縫殿助(久時)殿より高崎備後守を以、年頭之礼承候、參會候、高備御酒持せられ候、同衆中池袋新介是も御酒持せられ候、同座に而寄合候也、此日中書公(家公)へ改年之御祝言自身參候て可申候へ共、養性氣候間、先く爲名代鎌源進上申候也、衆中二三町衆通御酒持せ參られ候て可然之由申付、鎌源同道ニ各被參候、御祝着之御返事也、此晚神九郎來候、三献如例、御酒持せ候、寄合候て賞翫申候也、一六日、神九郎歸候、恭安様へ御返事共申候、從會井肝付源八郎殿越候、御酒預候、加治木但馬拯処へ礼ニ行候て居候間、彼所にて參會申候、此日竹筥本坊・西方院・大門・金剛寺などへ礼申候、銘くニ御酒如恆例進之候、種く御會尺共也、雜紙各より祝儀ニ預候、金剛主盟翁試筆之詩見せなされ候、一樣春風兩様吹、花添紅色鬢添絲、老性羞被黑頭咲、又祝新年題惡詩、難默止候て即席ニ和韻仕候、璨然句法副花吹、筆勢帶風似柳絲、案上一行舒又卷、沈吟未了袖芳詩、如此共申候て、漸及薄暮罷歸候、

一七日、如恆例蘇民など懸候、岩戸へ參詣仕候、從夫堀四郎左衛門尉殿・敷祢越中守殿へ礼申候、種く會尺共也、拙者も御酒持せ候、敷越へ罷居候内ニ鎌田左京亮殿越にて候、雲州之代(鎌田政近)と候て礼也、城へ御出候つれ共、拙者留守にて候間、見參候ハてハとおほされ、爰元へ尋之由也、即見參申候、御酒など寄合候也、城へ御酒持せられたるよし也、躡而罷歸候也、此日福永藤六殿御酒持せ被來候由也、從佐土原出家衆少く禮儀之由也、是も銘くニ御酒預候也、野村安房守処よりも、御酒持せ使者也、

一八日、祈禱始、大般若也、滿願寺・本坊・西方院・大門・沙汰寺、此外經衆者滿願寺御同宿衆也、御會尺ニ衆中なと少く呼申候、種く酒宴共也、此日倉岡地頭吉利山城守殿(久金忠憲)父子祝礼とて御座候、并衆中兩三人同心被成、銘くニ御酒共預候、三献如常、其後湯漬參會候、持せ之御酒など賞翫申候、互ニ酌也、從清武伊集院(久)州使に而祝言承候、春成殿也、御酒預候、即賞翫仕候、從中書公長倉名字之人にて御祝言蒙仰候、三献寄合申候、相應ニ御返事申上候也、富田大官司・廣原佐司、爰かしこより酒肴など持來年頭之禮儀也、不及記、

一九日、新名爪長福寺礼ニ越候、即三献參會候、持せの

御酒酌被成候、賞翫申候也、山田新介殿礼ニ越候、衆

中四五人同心也、即三献參會候、麩而茶湯之座にて會

尺申候て茶共也、其後おもての座にて持せの御酒賞翫

申候、悉皆衆中よりと候て、樽一荷もたせなされ候、

同賞翫仕候刻、從財部鎌田筑州代として、同名新介殿

越候、衆中四五人同心也、銘々ニ御酒もたせ也、何れ

も賞翫仕候也、從佐土原弓削宗案被來候、御酒預候、

即參會申候也、

一十日、野村大煩兵衛尉殿茶湯之由候間、行候、衆中一

兩人座ニ被來候、種々珍肴にて会尺也、夜前夢想ニ、

梅か枝を待えてうたふ宮居かな

此日從本庄河上又八郎殿礼ニ越候、御酒預候、即三献

參會候、衆中一兩人同心也、是も一々御酒預候、同前

ニ賞翫申候、此晚鎌田源左衛門尉殿・上井右衛門尉処

へ内々礼ニゆかれ候、種々會尺之由物語也、野大今朝

來候礼儀とて被來候、安立德利と申候て、備前物にて

候、今朝面白由申候つれハ預由候て、御酒を入候て持

せられ候、賞翫之、因戲申候、

御用にも安く立ぬと見えつるか今ハこなたのとくり

成けり など申候て沈醉候、

一十一日、今日恭安齋御越有へき様ニ申候条、早朝より

立花など申候、木花寺年頭之礼ニ被來候、三献寄合申

候、御酒預候、賞翫仕候、恭安齋今日御越之事者、依

御腹中氣指延候由、使にて承候也、從穗北平田新左衛

門尉殿祝礼之爲越被成候、即參會申、三献如常、花園

山臥同心也、めし參會候、吉利殿使木原常陸介同座に

て寄合候、穗北衆中も一兩人同心也、同座にて会尺申

候、各御酒預候、互ニ酌共仕候、心靜ニ酒宴共也、此

日諸方へ年頭之使者遣候、高城・財部へ寺田壹岐守、

穗北・富田へ勝目但馬守、都於郡へ中村内藏助・吉利

殿、綾へ和田刑部左衛門尉、穆佐・藏岡へ和田江左衛

門尉、曾井・細江へ高城雅樂助、清武・田野へ関治部

少輔、長峯・富吉へ山下弓介、飯田・内山へ前田勘解

由左衛門尉、木脇・本庄へ江田源七兵衛尉、下別府へ

唐仁原藤七兵衛尉也、

一十二日、諸方へ年始之祝言ニ指越候使、皆々被來候、

恆例之祝悦之由也、此朝関右京亮殿可來之由承候間、

其分候、種々珍肴などにて會尺也、衆中十人計、会尺

ニ座ニ被居候、心靜ニ酒宴共也、此晚鎌源誘引候間、

手火矢驛ニ出候、水鳥一番一箭ニ射候而歸候、然処報恩寺より可參由候て種々會尺也、近隣之衆御酒なとくれられ候、閑談共候て夜深罷歸候、

一十三日、此曉くさ振付候て散々之式候、今福寺被來候、

御酒持せ被れ候、從藏岡・本庄衆中十人計被來候、各御酒持せられ候、都於郡永明院被來候、是も御酒預候、觀千代差出會尺申、歸申候、

一十四日、此日も氣分散々にて、ふせり居候、福永宮内少輔殿被來候、御酒・猪卷など預候、相應之會尺申候、

此日衆中指揃、御千句之調儀・年頭御雜掌之用意等談合共也、此晚祝言等如恆例、

一十五日、規式如舊例、衆中各被來候、觀千代指出御酒申候也、各揃候、次番普請無閉目被成候、笑止之由申理候、各尤候、自今堅固ニ可閉目之返事也、此日番盛共申候、此晚長野談路守・関右京亮・野村大炊兵衛尉

・同名右衛門尉茶湯会尺仕候、夜深まで閑談共也、

一十六日、山田新介殿へ書狀を以、來廿二日御前へ罷出候する様ニ鹿へ參上之由兼約申候つれ共、頃痔病再發候て散々候間、指延候由申候、從三城衆中兩人御酒もたせ被來候、觀千代指出会尺申歸候也、此日長野談路

守可來之由候間、腫物散々にて候へ共、白衣にて不苦之通類被申候間、任其分候、種々會尺共也、茶湯也、伊集院作州、上野伴介を以承候、氣分頃も一向惡候、

然ハ鹿へ參上之事、此節者成間敷候間、清武衆中拙者參候する砌同心申候へ、憑之由也、來廿六日二鹿へ參着候て、廿七八日之間、御仕合次第可罷出候、其校量可被成之返答申候也、伴介見參申、御酒寄合候、從夫談路守種々會尺共候、酒宴にて閑談也、終日有暮候、

一十七日、弥右衛門尉御酒飲せ候、城内之衆中各會尺ニとて呼申候、種々之儀共也、此日ハ愚句共撰拔候て、

紹巴へ登せ候するかと存候て、拔句仕候、其隙く、庭ニかゝりの松など植させ候、并茶湯之座見越ニ常盤木など種々栽させ候て見申候也、此夜も深行まで拔句

共仕候、

一十八日、腫物散々候間、觀音へ讀經など不申候、むさくと爐邊ニ眠居候、猿渡大炊助殿昨日鹿より歸宅

之由候て被來候、御返事如申上候、今年之御祝言、諸方角靜謐ニ勝例年候、此等之儀早々敷申上候、御祝着被成候由也、寄合中よりも御同前也、此日も拔句など仕候、懸之木栽させ候て見申候而慰候、從三城伊地知

(重改) 丹後守・逆瀬川豊前丞來候、猪・狸など持來候、めし振舞、御酒寄合候也、此晚鎌源二人・同名右衛門尉二人此方へ呼申候、種々酒宴共也、深行ニ各被歸候、

一十九日、海江田へ越候、年頭礼儀衆など爰かしこより被來、隙入候て未之刻計打立候、夜入候て木花寺へ着候、種々會尺共也、從夫吉日にて候間、御諏方へ社參申候、座主參被成候て、社頭之様子如恆例、此夜ハ内山之山舎へ留候、何れも本郷まで打迎ニ共來候也、

一廿日、恭安様へ可參之覚悟候処、神九郎を以被仰候、尤早々可參之由可被仰候へ共、餘々惡日にて候間、明日御伊勢へ參詣申候て、直ニ城へ罷登候て可目出之由也、臙而神九郎へめし寄合候、さて御返事ハ菟角御意也、次第明朝祇候可申之通申候也、いづれも越候由申候て、酒肴など持來候、從平佐桂神祇(忠體)少副殿年始之御礼として使者預候、女中より御酒其外種々送給候、圓福寺より使僧并御酒預候、此日も抜句共仕候、又ハ植木などさせ候て見申慰候也、

一廿一日、早朝御伊勢へ參詣申候、大宮司処にて如舊例三献、それ過候てめし振舞候、種々會尺也、直ニ城へ罷登候、恭安様にて先御三献、其後節供御寄合也、持

參之御酒御酌申候、種々御会尺共也、此日從清武使也、趣者、清武衆中鹿兒嶋參上并御雜掌等、宮崎同前にと先日承候、然者拙者參上日限聞候する由也、尤先刻如申候、來廿六日彼方へ參着之様打立可申覚悟にて候へ共、腫物未然候条、朔日比漸參上可被成候欤、左候てハ餘々遅々たるへく候間、御校量次第先々各被參候て肝要之由返答申候也、此晚中城へ參候、如恆例之規式也、持參之御酒など御酌仕候、

一廿二日、早旦日之御崎觀世音へ參候、從夫寺へ礼申候、舊例之会尺共也、拙者も御酒もたせ候、此歸るさ中城ニ被召寄候、節供御寄合也、種々御会尺共也、加治木駿河守・同名伊与介処へ礼ニ行候、いづれにても種々舊例之会尺共也、

一廿三日、蘇山寺被來候、御酒寄合候、谷山越中守酒持來候、宗球・源左衛門尉御酒持來候、即見候て賞翫申候、此日ハ植木などさせ候、種々普請等させ候て見申慰候也、此晚圓福寺へ御礼申候、如恆例御酒持候也、御会尺如舊例、今夜月待候之由被聞せ、寺にて可待申之由類ニ承候之条、衆寮にて月待候、蘇山寺其外僧達餘多被來候て雜話共也、住持者俄ニくさ氣出合候て無

指出候、誠と終夜酒宴など也、

一廿四日、早朝より地藏菩薩へ看經等申候、圓福寺くさ
醒候て指出被成、御時御振舞也、種々着にて御酒也、

閑談也、魯陵之米之物語となされ候、驚耳、即青原

ニ對談之様ニ覚候、左共候て罷歸候、追酒など也、同

名玄番助中途ニ被出候而、いつも礼共申候間、可來之

由被申候、然者彼処へ行候、種々會尺也、昨日鹿兒嶋

へ進上可申ため犬山へ登せ候、大なる猪執候、行司之

処へ丸猪にて召置たる由申候間、重信兵部左衛門尉所

へ立寄候て見申候、誠と近年にハ是程之猪見申さす候、

七八人にて持上見せ申候、昨日猪二犬之くひ候、此晚

長野にて猪各へ振舞候、今日者腫物ニ蛭飼候て居候、

一廿五日、天神へ讀經等申候、此日内山之河路狩させ候、

天氣惡候て二鹿藏からせ候、猪・鹿五取候、

一廿六日、安樂阿波介いつも礼儀共申候間、可來之由申

候、就夫彼所へ行候、種々會尺也、從宮崎加治木但馬

逐來候、鹿兒嶋へ行之様躰等伺候て、馳而罷歸候、衆

中なとへ必く明日打立可申候、各も其覚悟被成候て、

打立油断有間敷之由共申候、阿波介所にて終日酒宴也、
蘇山寺へ餘無沙汰申候間、歸さに參候、三献如常、あ

まりく沈醉候俣、暫彼寺へ休居候、さて夜入候て半
醉半醒之躰候、種雜話共にて候、小僧達ニ句感など謂
せられ、閑談にて慰候、其隙くハ又酒宴などにて

候て、深更ニ歸候、△

一廿七日、鹿兒嶋爲參上打立候、▽山之口までと志候へ

とも、宮崎之衆遅候て△田野へ留候、▽長藏坊へ一宿

仕候、亭主御酒など被振舞候、從宮崎柏原左近將監殿

・長野談路守殿・鎌田源左衛門尉殿・上井右衛門尉殿

など被來候間、彼衆寄合候て閑談共申候、隣所寺主被

來候て良久物語共也、御酒寄合候、

一廿八日、早朝打立候、右之衆同道申候也、天氣惡候て

難儀千万、山路之躰無申計候、山之口にて破籠など受

用申候、從夫漸かうのむれへ着候、桑幡殿家景へ宿申

候、桑幡殿より紫波洲崎へ年頭之使者被越候、於中途

行合候、佳札など披見候、桑幡殿役人高之牟礼へ在合

候て種々馳走也、

一廿九日、弘曉ニ打立候、餘々寒風荒候て、路次難成候

之処、同道衆之中愛酒など候て被戲候条、荒神山と云

所にて、紅葉ならねと萬木など折燒、暖酒候て餘寒を
忘却候、椎葉にもりたる物なども候キ、左共候て數祢

へ着候、敷祢殿^(賴賢)へ御礼可申之由案内申て候へハ、少指合事候由、同名寒松齋にて被仰述候、從夫休世齋^(賴賢)へ參候処、瑞奇庵門外罷通候、折節風呂焼せられ候、寒松齋類ニ入申候て可然之由候間、乍楚忽其分に候而述旅懷候、さて休世齋へ參候、三献如舊式、其後種々御會尺也、持せ之御酒など酌申候、酒宴共也、此夜ハ誹諧などにて深行まで慰候也、^(敷裕賴元)三郎五郎殿よりも同名縫殿助にて、前々儀共又々被仰述候、御酒持せ預候也、△一卅日、▽早朝從向嶋迎船來候間、乗船之校量候、又々休世齋種々御會尺也、十八官御酒持來候、賞翫共申候、廳而出船候、白濱へ着船候て暫憩候、種々會尺共申候、從夫△鹿兒嶋へ着船候、▽即鎌田刑部左衛門尉殿へ、只今參着候、明朝取成頼存候通、同名右衛門尉にて申候、さてハ罷着候哉、日出候、廳而拙宿^(増志)へ御入候て、様躰可被聞せ之儀也、平田新四郎殿御出也、御酒御もたせ也、三献參會候、并もたせ之御酒賞翫申候刻、鎌刑御入候、是も御酒預候、同賞翫仕候、良久物語共也、八城邊御格護之儀、又者爰元出合之御談合等、爲存知之とて物語被成候、巨細書載候すれ共、内儀之条無其儀候、

貳月

一朔日、早朝出仕申候、如舊例御太刀・百疋進上候、致持參候也、從夫打續吉利山城守殿・新納縫殿助殿太刀進上候也、拙者へ御三献御寄合被成、如旧規、其後宮崎衆中進上之御酒懸御目候、樽五荷・水鳥・魚・臺にて上候、拙者犬之留候猪丸進上申候也、拙者御酌申候、從夫山城守殿・縫殿助殿、其外御前ニ在合之衆、召出之御酒被給候、此日忠棟^(伊集院)へ御礼ニ參候へハ、御留守之由候間、空罷歸候、さて平田殿^(光宗)へ參候、三献如常、拙者も御酒もたせ候也、同新四郎殿^(備志)へも參候、同前本田野州^(親貞)へ參候、樽一荷もたせ候、三献寄合被成、女中指出也、衆中同心申候、召出之御酒也、福昌寺へ參候、中紙二十帖進入申候、如恆例扇子被下候、種々御會尺也、談儀所へ參候、瓶子進覽候、舊例之御會尺共也、白濱次郎左衛門尉殿^(重治)へ行候、御酒進之候也、色々會尺共也、子息大鞆など被打候て酒宴共也、此日留守中宿へ礼被成候衆、淨光明寺・遊行二之寮・福昌寺・伊集院野州^(久治)・本田紀州^(重親)・同名信州、此外當所衆多々也、各御酒預候也、此夜幸若來候て舞候、深行まで慰候也、△一二日、▽出仕如常、御料様へ御酒進上申候、奥へ被

召候て御見參被成候、御三献御寄合也、持參之御酒御酌如旧例申候、即又御酌被成候て御酒被下候、麴而退出申候也、此日△談儀所へいつも正月十日御光儀候へ共、今年者御虫氣故無其儀候て、今日御光臨也、御供仕候、▽百疋御もたせ也、從談儀所も百疋進上被成候、御座跡客居(義入) 太守様、御次橘隱軒・賀雲齋也、主居談儀所法印・拙者也、▽種々御會尺御閑談被成、乱舞なと也、衆徒など各被罷出、御酒被下候也、此留守中にも當所衆中各礼承候、酒肴など預候也、此晚若衆中多々被來候、御酒など預候て酒宴共也、一王(河野通貞)雅樂助唄なと申候、△

一三日、▽毘沙門へ看經等如常、△御假屋へ祇候申候、▽樽一荷進覽候、御三献御寄合也、持參之御酒御酌申候、即又△御酌にて御酒被下候、鮫島(宗昌)備後守取成也、其後殿中へ出仕申候、新納縫殿助殿子息元服也、▽忠棟へ參候、樽一荷持せ候、即出合被成、三献寄合也、明日御夢想御連歌たるへく候、御連衆之由候間、玄佐(禰山善入)御宿にて一順と候条參候、御酒進入申候、不断光院・珠長、其外連衆指揃一順なされ候也、此晚淨光明寺へ參候、御酒進入申候、種々舊式之御會尺共也、此日珠

長など礼ニ被來候、其外礼衆多々候条、不及書載候、一四日、於殿中 御夢想之御連歌也、夜中ニ出仕申候、御座跡 太守様、御次淨光明寺・珠長・拙者・可丹(光永)、客居不断光院・玄佐・智善・宗蓮(兼明)、調儀ハ御料所柀之衆分別也、御夢想之御句、鐘のこゑりしやうの上に石ありて

脇 太守様あそはされ候、酉之刻計御連歌成就候、此晚御舊例之年頭之御護广始候、乍勿論當所談儀所御執行也、此朝談儀所拙宿へ御礼也、

一五日、平田(宗位)豊前守殿新地へ被移候祝言、祈禱之百韻興行候、可來之由候間參し候、發句珠長被仕候、

植添て待間も花のやとりかな 珠長
春をみきりの青柳の陰 亭主
驚の羽風より先おさまりて 宗位
寛兼

連衆主居珠長・平田新四郎殿・木脇大炊助殿・亭主、客居拙者・可丹・三原下(重徳)總守殿・高城左京亮殿・和田玄番助殿・宅万与八左衛門尉殿也、連歌終候て種々会尺、酒宴共也、

一六日、出仕如常、護广之道場へ御指出被成、暫 御聽聞也、從宇都殿賀札進上候、中間持參候、常住舞臺よ

り懸御目候、御中間奏者仕候、從土持殿年頭御祝言之使者并賀札進上候、去年御侘被申候とて披露狀也、

御字をも舊冬被下候とて久綱と被名乗候也、來十六日拙宿へ御光儀定候、就其瀬戸口(重治)安房介被來、御膳部

共被仕候諸様躰共、談合申候、當所衆多、礼ニ被來候、各御酒預候、不及書載候、本田野州御出也、御酒預候、

拙者留守也、上使(有叔壽永)蔭涼軒拙宿へ御礼ニ入御候、京之封紙過分ニ被下候、并衣鉢侍者總藏主(龍伯集總)扇子五本預候、拙

者留守にて參會不申候、從城一要年頭之使者、川原名字ノ人にて候、礼ニ被來候、即參會仕候、從一要賀書

并中紙三十帖預候、使者より十帖くれられ候、從土持殿之使者礼ニ來候、樽一荷并肴預候、若衆中多、此方

へ被居合候て酒宴共也、八城來迎院被來候、木綿一預候也、此晚若衆中十人計寄合候、深行まで誹諧などに

て閑談候、

一七日、不断光院百韻興行候之間、合可申之由自身御座候て承候間、參し候、栴山玄佐發句被成候、

朝ほらけ霞ハ花のふもとかな 玄佐

かへるさおしき天津鴈かね 芳溪

春のよの月に小船をさしやらて 覚兼

座躰客居淨光明寺・玄佐・宗蓮・木藤和泉守也、主居芳溪・拙者・智善也、種と御会尺也、連歌成就候て酒宴共也、此日も礼衆多候つる由候、留守にて無是非候、

一八日、出仕如常、上使蔭涼軒へ參候、興國寺へ御宿也、食籠肴にて御進上仕候、即見參被成、躰而持參之酒御

賞翫也、種と御雜談共被成、拙者へも御酒しいさせられ候、總藏主も戲言共也、從夫拙者ハ和歌共ニ數寄之

由被聞候、然者 太守様御歌共候、左様之御和韻之詩など御見せなされ候、其外廣濟寺にて之短册又ハ連句

など御見せなされ、自身讀せられ候て理など被仰聞候、又京都五山衆紫陽へ御下向候とて送行など多候、此

等も同披見申候而、從夫御暇申候、興國寺住持年頭とて被出合、恆例之会尺共也、南林寺へ參候、如恆例御

會尺候、持參之御酒など御酌申候、種と閑談共申候、

八木越後守へ礼ニ行候、種と會尺也、此晚周琳御酒持(昌徳)
(中江重通寄)

來閑談也、天草殿被來候、御酒并中紙三十帖預候也、

一九日、V 出仕如常、一兩日中上使御下着之由候て、從

毛利殿使僧先刻下着候、五戒坊と申候、然者上使御宿(柳次元政)
(宗田)又者調達之儀など御料所椿之衆へ申付候、△此日親貞

へ御光儀被成、玄佐・赤星殿(統家)など御座ニ參被成候、▽

先如旧例御三献參候、親貞御相伴也、御盃頂戴候、躡而御太刀・百疋進上候、持參也、終日御会尺、御乱舞など也、赤星殿被打破候、御點心等彼是舊式之俣也、

無吳儀候、此夜平田新四郎殿・白濱二郎左衛門尉殿・木脇大炊助殿など被來候て、深行まで雑話共也、△

一十日、▽出仕如常、△從城殿之使者取成懸御目候、一

要より太刀・織筋ニ進上也、使者川原名字也、大野殿より鎧甲進上、何れも使者御見參被成、▽日州八幡之

大宮司罷出候、樽一荷并肴進上申候、奈良原安藝守年頭ニ被參候、太刀・百疋持參也、此日鎌田刑部(致原)左衛門

尉殿へ礼申候、樽一荷并肴進上候、種々會尺共也、白濱防州へ礼申候、御酒もたせ候、是も色々會尺被成候、(重政)

一十一日、諏訪へ社參仕候而、從夫直出仕申候、此朝

御護_一御成就也、談儀所法印へ御寄合被成、親貞取成也、所々へ御札等被遣候也、此日爰彼へ礼申候、上原

(論近)長門守殿拙宿へ礼也、御酒預候、賞翫申候、此晚從平田新四郎殿可參之由候間、其分にて候、種々御會尺共

也、△

一十二日、▽藥師如來別而讀經等申候、出仕如常、今晚

上使御着之由候条、御宿へ案内者平田豊前守殿へ被仰付候、同御着目出由之御使、吉田美作守殿(清忠)へ被仰候、

此外御調等之儀共、役人衆へ望被仰付候也、△南林寺御客殿作之事、日州より可仕候、然者悉皆拙者校量申候へ、伊集院下野守殿・上原長門守殿・山田新介殿、(有徳)

此衆別而作事奉行之由也、白濱周防介殿にて本田野州まで申候、右之儀被仰付候、何と様にも御意次第候、

雖然此前御對面所之事、親貞御下ニ被仰候て、種々入魂申候、此等も一向難事成候て漸閉目候、殊ニ日州遠方之事情間、何篇不如意たるへく候条、御侘之由申候、

親貞承候趣、難成事者尤ニ候、併親貞事ハ新田宮造營請取被成候、忠長・忠棟者、妙谷寺を新地ニ被移御寺

作被成候する、此儀を請取被成候、當者日州より調儀之事にてこそ候へ、拙者御侘申候ても誰人請取有かた

き事候条、御耳被入候ても如何候、先々領掌可目出之由也、さてハ何と様にも上意法第候、さてハ伊野・上長・山新へ早々作事奉行被仰付候て可目出候、又ハ日

州兩院之申次之方ハ、南林寺御客殿作ニ相添被成候て肝要之由申候、上意も其分之通承候也、▽此晚白濱次郎左衛門尉殿より可參之由候間參し候、種々會尺也、

子息大轍など被打、酒宴共也、此日 上使柳澤殿當所^(元政)
 へ着被成、上下廿五六人也、伊集院より御座候、宿元
 入来院殿假屋也、平田豊前守堅野まで被指出候て、宿
 元へ案内者也、此晚 太守様爲御使吉田作州、上使
 御宿へ被參候也、御調等御代官所より校量也、

一十三日、出仕如常、北郷彈正忠殿出頭被成、恆例之御
 三献御寄合被成、田之浦殿指出来候、御太刀・織筋
 二進上也、此日より御包丁人各拙宿へ被指揃、御光儀
 調儀校量共也、北郷殿へ礼申候、彼方も拙宿へ礼儀也、
 此夜本田弥六殿^(親正)・道正宗与、其外若衆中被來候て深行
 まで閑談候、時く酒宴、小唄など也、△

一十四日、▽出仕如常、△上使來十八日屋形へ招請被成、
 御内書等御請取可被成候、▽さてハ先其日ハ雜煮之御
 汁又ハ押之物などにて御酒二三返御寄合被成へく候、
 本之御寄合ハ來廿二三四日之間可然おほしめされ候、
 此段早く御代官^(伊勢貞末)有川長門守へ可申付之旨、白濱次郎左
 衛門尉殿にて被仰出候也、并明日柳澤殿御宿へ 太守
 様御礼有へく候、彼方へ御内儀可然之由共也、出仕歸ニ

鎌刑・長谷場筑^(純辰)・八木越同心申候て、拙宿にて振舞候、
 閑談共也、打續伊地知伯州^(重秀)・伊集院掃部助殿など御酒

持せ候て御座候間、雜談共にて酒宴也、鎌刑・吉作、
 上使御逗留中御宿元之見舞、又ハ諸篇取成等可被仕之
 由被仰付候也、此日 上使御宿へ參候、吉作にて様躰
 申候趣、拙者通にて御礼申候事不似合候へ共、御宿元
 近邊ニ當時宿仕罷居候条、乍楚忽御一礼申之由申候、
 即原田佐渡守と云人被出合候、祝義計ニ太刀一腰進覽^{金襴輪}

候、拙者渡し候、原田殿被請取候、廳而 上使柳澤殿
 指出被成、押物にて御酒寄合被成、肴兩度預候、拙者
 も進献候、吉作・道正宗与など有合候て御酒給候也、
 此日も御包丁人終日被居候て、諸事被調候、△
 一十五日、▽出仕如常、△町田出羽守^(久徳)・鎌田刑部左衛門
 尉にて、親貞・拙者へ、就 御家之儀蜜く御談合之儀
 被仰聞せ候、委細後日可書註候、▽ 上使御宿へ 太

守様御礼被成、柳澤殿廳而庭ニ被出合、良久御礼義共
 候て、其後座敷へ 太守様御入被成、御礼等如常、廳而
 柳澤殿太刀ニ刀相添本田下野守へ被渡候を、 太守様
 即おり合被成、御請取也、從夫 御歸殿被成、 上使
 門外まで送被成、深く敷御礼共也、明日就 御光儀、
 中書公御假屋へ拙者宿取直候、彼方へ包丁人、此外諸^(家人)
 細工など被集揃、終日調義共也、此日肝付彈正忠殿よ^(兼寛)

細工など被集揃、終日調義共也、此日肝付彈正忠殿よ

り珍肴十種計合力、敷祿殿(賴賢)より五種合力候、本田紀州・同名野州・白濱防州・有川長門守・市成掃部兵衛尉・長田石見守・津曲但馬守・桑幡左馬頭殿(道隆)・平田新四郎殿・忠棟などより種々珍肴・珍酒御合力とて持せ預候也、

一十六日、御光儀定候間、時分を以殿中へ罷出、御光儀可目出之由、御側衆にて申上候、臈而可有御光賞御返事也、午之刻計御光臨候、中途まで罷出候て踰踞候、卒と御礼候て、其俣御座候、先客居ニ御座候を上座へと申上候、其時上席延敷候所ニ御着座候、臈而御式三献參候、御相伴ニ拙者參候、御盃頂戴仕候、即御太刀・百疋進上申候、持參仕候也、御座躰御次北郷彈正忠殿・川上左近將監殿・拙者、客居玄佐・橘隱軒・本田下野守殿也、御三献めに一王大夫(河野通貞)罷出唄申候、從夫打續乱舞也、幸若与左衛門尉祇候申候て一曲共申候、百疋折紙にて遣候、一王大夫へも同前、春若壽へも如恆例折紙遣候、御同朋衆へも同前、御點心如常、本田紀伊守殿、川上將監殿ニ被替候て御座ニ被參候、道正宗与末座ニ召出候、終日御酒宴也、拙者御酌ニ參候時、御太刀・百疋進上申候、税所新介殿(篤忠)頼候て披露

也、及薄暮御歸殿被成、臈而御供申、忝之由申上候也、
〔拙者忝者安樂阿波介召出御酒被下候、又北郷殿内衆一人召出候也、椀山殿内衆者可罷出仁不有合候て無其儀也、〕
候、

一十七日、出仕申候て、昨日御光儀忝之由共申上候、此朝町田出羽守殿・平田左近將監殿・伊地知伯嗜守殿(兼)・宗運・可丹・木脇大炊助殿へめし寄合候也、昨日御機嫌共能候つるよろこひ、各より承候、又昨日御辛勞共被成候衆へ、使にて礼申候、御包丁人などへ相應くの引物なと持せ候て礼儀申候也、△
一十八日、▽夙起候て觀音へ讀經など別而申候、從夫出仕如常、△殿中へ上使、御内書等隨身被成御出也、吉田美作守御宿まで被參、御案内者被申候、太守様椀迄御出向被成、御座中へ御奏者也、上使一礼被成、臈而立せられ候て、御内書持せられ候て、太守様へ御渡被成候時文箱より取出、上包ハ懷中候て御内書計御渡也、太守様御請執被成、御頂戴候て押板之上ニ被置せ候、從夫又臈而柳澤殿たせられ、おもての御座にて御釵渡被成、町田出羽守請取候て、御對面

処押板之上ニ被立候、其後鞍御渡被成、是も町羽請取、
 同座上ニ被置候、從夫又柳澤殿座へ入御候、柳澤殿太
 刀・馬 太守様へ被進せ候、原田佐渡守と云方被渡候、
 吉田美作守請取披露候時、太守様 上使へ御目礼被成、
 さて御酒御寄合也、雜煮・塩煮など様之御肴也、三返
 參候、度々加也、初献三四度御礼候へ共、類にと候俣、
 太守御始被成、二献め一度礼候て、やかて柳澤殿始被
 成、三献め又二三度御礼候て、 太守様御始被成、御
 座只御兩所計にて候、橘隠軒參候て御雜談共少被申上
 候、廳而 上使御立被成、 太守様白洲まで御下合被
 成御礼也、勿論 上使惣門より出入被成候也、柳澤殿
 より之目錄之躰、御太刀一腰・御馬一疋、已上柳澤新
 右衛門尉元政如斯也、御拜領之御太刀金作也、銘次康、
 一方ニ不動尊形、一方くりから・梵字など彫候也、寸
 三尺計と見得候、御鞍(騎)作之物也、延徳之年号候、并判
 有、御紋桐ニ山雀、金貝也、紙よりにて被縛候、上
 使只今入御候御礼とて、町田出羽守御宿へ被參せ候、
 御太刀・馬柳澤殿へ被進せ候、目祿ニ御之字一字添候
 也、此日平田新四郎殿二人此方にて寄合申候、(平田)光宗女
 中も御出候、御酒預候也、

一十九日、▽出仕如常、△北郷(時久)殿宿へ御光儀也、▽御供
 可申之由一雲(時久)より度々承候へとも、不用仕候、此日伊
 地知伯へ礼申候、種々會尺共也、此晚有川長門守可來
 之由候間其分候、宗与など有候て、種々雜談共候て
 一酒宴也、深更ニ歸候、△
 一廿日、▽出仕如常、△從毛利殿使僧五戒坊指出候、彼
 趣者、上使御案内者又者龍造寺(政家)与御和合目出由共也、
 ▽從毛利殿縮羅 甘端、色種々被進候、五戒坊杉原十帖
 ・轡一進上被申候、右使僧へ御見參也、押之物にて御
 酒參候也、△有馬殿(晴信)出頭、御太刀圓重・御馬一疋・鎧
 甲進候、即御見參候て三献御寄合也、▽雜煮など參候、
 爰元澁谷之三献などのことし、大村殿(純忠)より御太刀・段
 子二端進上、使者 上覽被成、出仕歸ニ稅所新介殿可
 來之由候間、其分に候、喜入攝州・上原長州・宗与な
 とにて候、種々會尺共也、各閑談被成、酒宴共也、從
 夫喜入攝州御酒もたせなされ拙宿へ御出候て、暫御雜
 談共也、此晚忠棟茶湯會尺可有候、可參之由承候間參
 候、宗与・拙者也、配膳(伊集院)増喜殿被成候間、宗与も拙者
 も迷惑至極候、御手前忠棟被成候、御茶極無也、兩人
 感悅不少候、

一廿一日、▽養性氣に而出仕不申候処、△遮而御用候、

何と様にも祇候可申之由、從寄合中承候間、即出仕候、

先日町羽・鎌刑にて被仰出候、就 御家之儀御蜜談之

条、又と被仰聞せ候、忠棟・親貞御下ニ万端申上候、

後日委可書載候、將亦御談合条數なと被書せ候、▽此

日鎌田筑前守・上原長門守・伊地知右京亮・田代備後

守・鎌田加賀守・鎌田出雲守なと拙宿にて御酒寄合候、

閑談共也、有馬殿拙宿へ礼儀也、御酒參會候、太刀・

段子一預候、根占殿礼義也、太刀・百疋預候、吉田若

州・市來作州・稻富新介・二階堂安房介礼義也、各御

酒預候、即參會候、

一廿二日、出仕如常、御談合始也、攝州御宿へ御礼ニ參

し候、種々御会尺共也、不断光院なとありあはせられ、

雨中与申御雜話也、鎌田雲州宿へ礼申候、是又一王雅

樂助・松田(重昌)和泉丞なと有合候て、良久酒宴共にて候、

此晚有川長州茶湯會尺候、上原長門守・拙者也、乍勿

論亭主手前なとにて、種々之儀共也、△

一廿三日、▽出仕如常、△南林寺御客殿作、別而下知可

被仕衆、伊集院野州・上原長州・山田新介、拙者へ被

仰付候也、▽此日吉利總州宿へ御礼申候、御酒進入申

候、閑談共也、△

一廿四日、▽夜中行水仕、地藏菩薩へ看經別而入魂候、

出仕如常、△有馬殿官途并 御字可被下之由、吉田作

州にて懇望候、官途之事者分別次第候、さて御字免許

之事ハ御斟酌候、其故者、有馬殿事代と以 公儀既

義文字を給被成候、然ニ 御富家之字を被進候するハ

相應いたさゝる様に被思食之通、御辞退被成、雖然そ

れハ先代之事共にて候、當時有馬事ハ寔々爰元御高恩

迄にて連綿に候上者、頻懇篤之由也、就其 御字忠、

官途左衛門大夫ニ被補候也、▽此日於殿中 上使御寄

合也、御座躰主居 太守様・伊集院右衛門大夫、客居

上使柳澤殿、次毛利殿使五戒坊・本田紀伊守也、御寄

合之様子御湯漬也、終日御酒宴、乱舞なと之由也、拙

者ハ養性氣にて不罷出候間、巨細不存候条、大かた書

載候、

一廿五日、於護厂所御連歌也、此朝忠棟拙宿にて茶湯會

尺申候、有川長門守・宗与也、良久閑談共候、忠棟御

酒預候也、賞翫共申候、吉利殿御礼御出候、御酒預候

也、鎌刑より蘭望之由申候つるとて預候、日州へ持せ

こし候也、此日伊地知右京亮殿より可來之由候間、參

し候、種々會尺也、座躰主居伊野州・亭主、客居拙者
 ・上長州也、酒宴共也、此夜阿多掃部助・平田新四郎
(忠貞)
 殿・長谷場筑州・矢野出雲守・宗与・爲阿(野間政商)など被來候
 て閑談也、時々酒宴・茶など也、

一廿六日、出仕如常、御談合共也、本田刑部少輔殿・拙
(正親)
 者家景、向嶋二侯と白濱境論一兩年已來候、左様之儀
 ニ付、平田豊前守・木脇大炊助・三原下總守頼候て、
 明日彼方へ渡海被成、兩百姓之口を聞せられ、又ハ論
 地之躰共被見合候て可預之由、本刑・拙者同心ニ申候、
 於殿中日州諸名檢地帳少々見合、公役之義等書記候、
 此晚山田新介殿・稻富新介殿被來候、長谷場筑州も被
 來候、玉藻前之双紙眞名にて候を假名字に書候て進上
 之由、御新様より被仰候、然者不審之事等候間、拙
 者へ談合之由候、是等讀せ申候て承候也、△

一廿七日、▽出仕如常、此日も御談合共也、伊集院左京
(宗豊)
 亮殿・鯨嶋土佐守殿など礼ニ被來候、御酒參會候也、△
 此日有馬殿へ御寄合也、先出仕候て、御字被給候御礼、
 又官途之御祝礼被申上候、▽拙者取成申候、折肴・樽
 三十荷・白鳥・靄・鮭など、此外種々也、進物御字之
 御礼ニ、御太刀・黄金廿兩・鈍金(段)三端也、又官途御祝

礼とて、御太刀・白糸五十斤・南蠻頭巾・同かはんと
 て、蓑之ことく雨降にめされ候ても不苦候御打掛など
 様之物進上也、右之種々披露共候て、さて御座躰御中
 座 太守様、客居有馬左衛門大夫・橘隠軒・伊集院下
 野守、主居喜入式部太輔・顯娃左馬助・拙者也、御め
(久通)
(久忠)
 し參候て、三篇めに有馬殿持參之御酒參候、左衛門大
 夫御酌被申候、即 太守様又御酌被成候、躰而有馬殿
 退出被仕、刀持參被申候、一文字也、吉田美作守請取、
 被備 上覽候、即御自愛被成、御腰に指せられ候て、
 前ニ御指なされたる御腰物左衛門大夫へ被下候、拜領
 候て即さ、れ候、從種々御酒宴、乱舞など也、御點心
(笑脱)
 等如常、有馬殿舍弟新八郎被罷出候、一献御酌被仕候、
 若衆にて候間、座中戲言共也、安富左兵衛尉・大村兵
(徳巳)
 部太輔、京都より下候醫者竹田入道同心候、是罷出候、
(照)
 何れも御太刀・目錄進上申候、醫者織筋一・杉原・扇
 進上被仕候也、未之刻計より夜入候迄之御酒宴共也、
 去月硫黄嶋へ唐船破艘候、就其銀子一貫目計殿中へ參
 候、税所新介彼方役人にて候間、吾々へ銀五十目被持
 せ候也、△

一廿八日、▽夜中ニ行水候て諸神就中荒神へ讀經等別而

仕候、出仕如常、此朝も御談合有、△平田新左衛門尉(宗張)
次男(重時)三原名字之養子ニ罷成れ候、元服也、此日於殿中

終日御談合也、御寺新地之普請始也、河田殿(義明)校量にて
鎌刑へ談合被成、獄初なと被成候也、▽此晚河上備前(遠久)

守殿・比志嶋殿なと拙宿へ同心申候て、御酒振舞候、
誹諧なとにて閑談也、△

一廿九日、▽出仕如常、有馬殿宿へ爲御礼 御光儀也、

中途ニ被罷出、忝之由被申、廳而殿中へ被參、忝之通
被申候、御太刀・刀進上候、刀ハ鞘帳也、△此日吉作

にて有馬殿へ鎧甲・御馬川原毛被賜候、▽御祝言迄之由
共也、此日於殿中終日御談合也、鶴戸別當御礼承候、

并御酒預候、此晚拙者も鶴戸御宿へ御礼申候、御酒持
せ候也、△此日就 御家之儀飯野へ御使書、圖書頭(忠長)

・町田羽州・伊地知伯州可然之由定候也、

17 「義久公譜中」

(本文ハ一三号記事ノ一部ト同文ニツキ省略ス)

18 「上井日記」

三月

一朔日、▽出仕如常、△太守様伊作へ御光儀被成、

八幡宮へ爲御社參之也、從夫市來へ御光儀被成、▽屋
嶽之御狩たるへき由也、△此日於拙宿南林寺客殿作之

切符盛申候、伊集院野州・上原長州・山田新介(有信)・本田
刑部少輔・伊地知伯州(重孝)・長谷場筑州なと也、▽終日各

被居候、時く御酒なと也、△

一二日、昨日之衆着揃、切符盛共也、山田新介殿を以南

林寺へ申候、御客殿作之事吾くへ被仰付候、先く切符
盛共申候、▽尤參候て諸篇御談合可仕候へ共、木時に

候假切符之事急候、諸事御談合者、初秋之時分吾く參
候て可申候、乍勿論悉皆住持之御入魂肝要之由申候、

返答、先日拙者処へ御座候て如承候、御客殿作之事日
州衆へ被仰候欵、一段目出候、涯分入魂頼被成之由也、

此日市成掃部兵衛尉を以本田刑部少輔殿へ申候、白濱
与二俣堺論之儀ニ付、先日平田豊前守殿・三原下總介(重隆)

殿・木脇大炊助殿頼候て檢者ニ遣申候、然者向嶋御地
頭河上源五郎殿諸役人同心ニ白濱・二俣之百性之口を

被聽、其上各論地を被見候て、とひ石と申より濱へ直
ニ見渡被定候、然処本刑内衆無納得候て、其日者落着

無之候由、昨夕平豊・木大被來候て物語候、就夫者先

日刑部・拙者同心ニ見者三人頼申候時、何と様にも各御校量次第落着肝要之由申候キ、然ニ刑部内衆辞退故無落着候欵、けにも御存分共候ハ、幾重にも被仰候て可然候、拙者事ハ見者三人御校量法第之由申候つる間、是非共ニ爰より申間敷候、本刑御分別次第落着可目出候、明日罷歸へく候間、如此之段申理候由申候也、返事、拙者申候ことく、兩三人見者ニ同心を以頼候時、何と様にも彼御人數御校量次第之通被仰候て、爰にて菟角とハ難有候、さてハ悴者支候故、其日落着候ハぬ欵、笑止ニおほされ候、本刑於心底無吳儀候、檢者之如校量落着一篇之由也、さてハ拙者役人まで承候、二俣より山へ登候道白濱之内を踏候、是又とめさせられなど候てハ迷惑たるへく候間、頼被成由也、此晚平豊・木大拙宿へ被來候、三總ハ御供にて留守にて候、兩人先く申候、白濱・二俣境之事、先日見定られ候ことく本刑納得候欵、目出由也、

一三日、祝義如例、從南林寺使僧預候、昨日山田新介殿進之候礼儀也、并客殿さし圖もたせられ候也、長谷場殿雇候て伊勢因州^(貞想)へ之返書認候、同沈香一斤進献候、蔭涼軒へ沈二斤、總藏主へ沈一斤進之候也、本田刑へ

市掃にて、白濱・二俣境見者之分別之俣落着目出候、就夫道之儀承候、と、めさせなとハ仕間敷由申候也、平田新四郎殿^(増忠)・長谷場筑州御酒預候、賞翫申候、此日向嶋まで渡海申候、忠棟^(伊集院)・親貞^(本田)へ使者にて、太守様御打立之朝、白濱次郎左衛門尉殿^(重治)にて、爰元御談合御隙明次第御留守中にも御暇可申候間、若く日州へ御用などもやと申上候、早く御暇被下之由候つる間、先く歸宅申候由申理候也、此晚白濱にて太郎三郎会尺仕候、種く之儀共也、酒宴也、△

一四日、早朝從白濱出船仕、▽加治木へ爲御礼着船候、即從彈正忠殿使者預、可參之由候間、其分に候、種く会尺共也、拙者も御酒進之候、賞翫共也、肝付藏人殿へ宿申候、彼方へ彈正忠殿礼ニ御座候、并一家衆・役人衆なとより御酒なと持たせ也、良久酒宴にて閑談共也、此夜數称へ着船候、十八官処ニ宿申候、休世齋^(數称頼實)より使者預候、可參之由候つれ共、夜深候候無其義候、亭主種く會尺共申候也、

一五日、早朝休世齋御くたりなされ候、十八官又種く会尺申候、從夫打立、野くミ谷へ着候、亭主大隅清水生士之人にて吾く事共被知候て、昔物語なとにて候、種

と馳走共也、

一六日、早朝打立候、天氣惡候て漸きり川へ着候、

一七日、ねらひにとものほり候而慰候、△

一八日、さり川より打立▽歸宅候、栗野之大宮司坂迎申

候、種々會尺奔走也、△此晚宮崎へ着候、

▽一九日、歸宅候とて衆中各被來候て、閑談共也、酒肴な

と預方も候、金剛寺御出にて候、御酒預候、賞翫共申

候、心靜ニ御物語也、茶湯などにて慰候、此日一万座

調達之義、綾・佐土原・縣へ申渡候、佐土原へハ野村

甚介にて申候、此晚此方庭にて若衆達鞠也、從野尻歸

候由候て使者也、

一十日、如常、西方院・本坊・沙汰寺久々見參候ハぬと

て御出候、各御酒給候、參會賞翫仕候、大乘坊御酒持

せ被來候、同前衆中など酒肴共持せられ、歸宅之由候

て被來候、碁・將碁などさせ候て見申慰候也、栗野大

宮司父子先刻立寄候礼義とて來候、御酒もたせ候也、

新名爪役人御酒持來候て、次ニ縣へ申渡候萬座之調義

之事等、委細可承之由申候也、具ニ申聞せ候也、

一十一日、久馬共留守にて不乘候間、庭乘などさせ候て

見申候也、竹筥遍照院花之具被採來候間、立花一瓶仕

候て慰候、碁・將碁などさせ候て見暮し候、從福永宮

内少輔、先日飯田表罷通候処、他行候て不被出合候事

口惜之由候て、使者也、美々津町之者一人來候、久無

沙汰申候とて樽持來候也、

一十二日、藥師如來へ別而讀經等仕候也、從吉利殿使者

預候、^(高城)珠長近日中越着たるへく候、然者立願之千句成

就有度候、拙者も可罷越之由也、遙久千句ニ逢申さず

候処ニ、さてハ御千句候する哉、尤本望之由返答仕候、

本庄萬福寺被來候、先寺舊冬已來病氣にて去月死去候、

然者海江田淨瑠璃寺之事先寺ニ合力申たる地候、此寺

之事拙者へ可被返之由、末後ニ被謂置候条、其分届之

由承候、御酒持せ被來候也、返答、さてハ先寺死去候

哉、笑止千万候、就夫寺之事不紛良存へ合力申たる儀

候、返預由尤候、當年之事者先寺へ志之爲合力申候、

來年よりハ此方進退之通、^(鎌田兼政)鎌源にて申候也、此晚若衆

達鞠にて候、彼衆へ御酒振舞候、從夫深行迄乱舞・茶

などにて慰候也、休世齋より、當年無沙汰候由候て使

者預候、并酒肴給候、賞翫申候也、

一十三日、虚空藏菩薩へ別而看經仕候也、此暮滿願寺庭

にて鞠にて候、罷下候、鞠過候て酒宴也、山田新介殿

より使を以、五日前此方へ御座候する覚悟にて候へ共、養性氣に候間、先と被仰述之由也、菟角南林寺客殿切符盛之事、新介殿を相待申候間、早と可被成越之由申候也、此夜加治木雅樂助宿所にて若衆中謠稽故候、行候て聞候、種と會尺共申候也、

一十四日、関右京亮殿かこしま御番より歸候とて被來候、蔭涼軒より書狀など預候、三官より藥一七日煮遣候、是も同前ニ被持來候、新納武州(忠元)へ、旧冬歌書二卷借申候、頃書写候間、丸田玄番助越候便宜ニ、書狀相副返進之候也、此晚竹窠大門にて鞠にて候、過候て種と會尺、酒宴にて候、然者深更ニ歸宅候、

一十五日、衆中各被來候、見參申候、從野尻、佐土原井藏八町之事、一兩年糸原名之打替として市作拵(市茶家守)之由、かこしまより承候、然共一向爲ニ罷成事無之候、其故者、于今方とより懸持共候、左様之処然と不知候間、檢地させられ候て可然之通、かこしまにて承被成候、

從此方も檢地衆相添候へと承候間、岩崎刑部少輔・江田源七兵衛尉遣候、野尻よりハ長名字之方也、

一十六日、如常、造作なとさせ候て見申候、此暮も鞠なと也、

一十七日、如常、野村大炊兵衛尉殿茶湯会尺也、終日たてのきなどにて慰候、從倉岡使者預候、吉利山城守殿(久色)此間者市來御狩ニ御供候て漸頃歸宅候、先日ハかこしまにて申承候、其後無沙汰被成由也、

一十八日、觀音へ別而看經等申候、町口普請之談合共申候、様子など普請奉行へ見せ申候、西俣七郎左衛門尉被來候、手火矢細工など頼候、然者鉄放など射候て慰候、諸細工など多とさせ候て、見申候也、

一十九日、如常、此日も細工させ候て見申候、又手火矢きミなど仕候て慰候、碁・將碁・鞠などの衆も候、此晚蓮香民部少輔庭にて鞠也、折節休世齋御越にて候、民部少輔種と會尺申候、深更まで之酒宴也、此朝本田治部少輔殿越候、御酒もたせ也、茶湯会尺申候、光教寺礼ニ被來候、雜紙十帖・茶預候、茶湯之座にて會尺申候也、

一廿日、山田新介殿此方へ越之由候て遅引候間、山内采女佑にて早と御越待入候由申候、此間養性氣にて無越候、必今日越有へきのよし也、休世齋平家被聞せ度之由候間、四ノ巻讀候、又碁なとうたせ候て見申候也、満願寺御座候、御酒參會申候也、

一廿一日、町口普請させ候て見申候、此日も新介殿無越候、

一廿二日、休世齋歸被成候、早朝新介殿越着也、終日切符盛申候、隙く御酒・茶湯など也、新介殿よりも御酒持せにて候、賞翫共申候也、此日吉利殿より使者預候、兼日千句之約諾共候、然処山田新介殿越被成、南林寺御客殿切符盛共候歟、就夫罷越ましき由、笑止ニおほされ候、左候ハ、千句を一兩日も指延可有之由也、返答、切符盛之事者今日可事果候間、さて御待被成候由候条、必明日可參候、然者先日千句御發句賦之時分、拙者へ鶯之題預候、思案申置候へ共、とても出座成ましく存候て不進候、又出座之由承候間、發句書付進之候、珠長へ御談合被成、御定可目出候由申候て遣候、鶯にかはせ五葉の松のこゑ(歌)、鶯にかすや若葉の萩のこゑ、如此申候て、使者歸候、

一廿三日、満願寺より可參之由候て其分候、種く御会尺共也、山田新介殿此朝歸被成候、從吉利殿書狀預候、昨日使者被遣候、可參之由目出被思候、併參ましき由申候つる条、はや一順・再篇事行候、各連衆も拙者名

代にハ斟酌候、然者一順・再篇遅候て、出座とハ被仰かたく候、菟角拙者校量次第候、發句之事も拙者ハ參ましき由候間、珠長名代ニ被成候、殊ニ拙者申候ニ同意ニ候、奇特ニ目出おほさる、由也、必今晚可參之由

返事申候也、此晚吉利殿へ參候、夜更候間御宿所へハ罷出ましき由頼申候へ共、堅承候間參候、種く御会尺也、鶯をやとしてかはせ松のこゑ是珠長拙者名代也、一廿四日、千句始候、夜中各揃候、連衆座躰客居弥阿・珠長・但阿・稻富新介(長辰)・定庵(天徳)・意閑、主居拙者・世安(吉利忠登)・總州・長野筑前守・珠翫・城澤・宗眞、此衆也、一廿五日、同前、拙者御酒進之候、各賞翫共候、一廿六日、同前、一廿七日、此朝千句御成就也、種く御会尺共也、此晚罷歸候、爪生野にて鴛川壹岐拯坂迎申候、然者彼所へ留候、

一廿八日、又壹岐拯会尺種く申候、柏原周防介殿(有徳)・鎌源(有徳)など会尺ニ呼申候て酒宴共也、さて躰而歸宅候、此日從穗北使者也、伊集院莊嚴寺口事出來候て御他出之由候て來儀候由也、さてハ其分候哉、口事等之儀も曾以拙者不存候、併若く可申子細も哉候すらん、其元へ先

と抑留可然之由申候也、此晚此方庭にて鞠也、南林寺作切符所とへ遣候、

一廿九日、從早朝、南林寺作切符所とへ遣候也、

天十三乙酉
卯月

一朔日、看經等如例、紫波洲崎へ逗留申候、此朝二城別

而御寄合被成、種と御会尺共也、肝付彈正忠殿(兼寛)より、

先日加治木へ罷越候爲礼儀使節預候、并樽一荷種と肴

相副候、即使者へ參會申賞翫候、圓福寺使僧にて御酒

預候、同前木花寺・祖三寺御酒持來候、參會賞翫仕候、

肝付源八郎殿狩之爲此方へ拙者罷越候由被聞及候条、

夕加江田まで越着候、狩指延候通きかせられ候間、見

參のためのほり之由候、即見參候て御酒參合候、さて

ハせめて落しをさせ候て見せ可申之由申候て、山へ同

心ニ罷登候、鹿二取候、拙者一ツ射候、此晚恭安にて

種と御会尺被成、源八郎殿同前ニ恭安御館へ留候、(上并兼茂)

一二日、内山表鹿藏狩仕候、肝付源八郎殿此外從會井衆

中四五人被立候、從宮崎衆中三四十人被立候、朝鹿藏

ニ猪・鹿六ツ取候、一ツ拙者射候、柴屋にて各へ酒飯

振舞候、雜掌など諸人持來候、不及記候、次之鹿藏猪

・鹿三ツ取候、從夫明日九平良之狩申へき爲奇とにて

候間、加江田へ右之衆同心にて行候、隈江右京亮所へ

宿申候、種と会尺也、本田治部少輔殿・敷祢越中守殿

・柏原防州(有徳)・長野淡州・勝目但州・関右京亮殿・鎌田

源左衛門尉殿(兼茂)・同名右衛門尉など寄合候て酒宴共也、(上并兼茂)

此外宮崎衆中各へ御酒振舞候、夜入候てより誹諧など

にて閑談申候、

一三日、早朝打立、九平へ登候、雨降來候間、常瑠璃寺

へ暫休居候処ニ、天氣晴候条、又打立、九平へ登着候

て、一鹿藏狩申候、從夫又降候条、猪・鹿三漸取候て、

此夜ハ九平良へ留候、又右之衆同宿共申候て、種と酒

宴などにて雑話共也、

一四日、天氣能候ハ、犬山と存候処、不艶雨降候間、空

罷歸候、從穗村瀬戸山藤内左衛門尉可來之由申候間、

彼処へ行候、種と会尺共也、大乘坊其外穗村衆中あま

た被來候て會尺共也、稽故連歌共各心懸之由大乘坊物

語共候て、其次、拙者透次第伊勢物語聽聞之由共候間、

其義者曾成間敷事候、只拙者物語こそ即伊勢物語にて

候へなど戲言共申候て、一笑仕候処、狩裝束共入候物

之内ニたちあけ(つ脱カ)・ひしき物などにましハリ、双紙けな

る物見え候間、能と見候へは彼物語にて候、是こそ能

仕合と申、取出し一二段讀候て、當座之興を催し候、
従夫いゑとうしにかわらけ取せよ、さ候すハのまし、
など、亭主へむつかしく申かゝり酒宴共也、さて各被
歸候跡ニ、醉酒而臥之經文其俣候、

一五日、早朝大乘坊へ、當年無沙汰仕候間礼申候、三献
如常、廳而時振舞、種と会尺也、并茶湯などにて候、
閑談申候処、あひにあひぬ問ハ鶯花の宿 此發句之兩
吟之註したるを取出し見せられ候、能く見申候て、今
日こそ相に合たる茶吞にて候由戲候へは、尤候、乍去
鶯と花に茶吞ノたとへ無下なる由、亭主申され候、私
けにもの事候、然とも茶之吳名ニ候之歟、鶯舌と哉ら
ん承様に候、然者相應たるへきかのよし申候、是者さ
も有へく候、花ハいかにと又不審候、又拙者、花中鶯
舌美ならずして香 と哉らん申候へハ、おのつから鶯
と云処に花ハ有物を、とはつし候て大笑申候、是も酒
^(麻)風に一もミもまれたる故候、さ候て漸彼坊を退出候
て、沙汰寺へ參候、是にて又種と会尺無申計候、次第
く沈醉候て、彼一寺か四百八十寺計ニ目ニ懸様ニ
候て、寔煙雨之中之様に候て、漸宮崎へ城へ歸着候刻、
^(番)桃山玄佐より、一兩日前使節預候へとも拙者不有合候

間、又く被遣候、珠長明日穆佐へ越着たるへく候、然
者兼日千句之有増候間、興行有へく候、拙者出座申候
様にと之承事也、就其者發句之題時鳥預候、思案申せ
之由也、さてハ御千句たるへく候哉、尤目出候、不被
仰候共推參申度候処、吉利殿^(忠意)三城表之狩ニ可罷越之通
先約にて候、然者明日打立可申覚悟候間、不及是非之
由申候て、發句之題も返進申候、又此方より態使を以、
忝之由玄佐へ申延候也、此晚此方庭にて鞠共也、従夫
夜入候ていつものめしなと受用候、此間打續沈醉之故、
氣色平性之様にもなく、一兩年前以之外惱候、其時の
ことく様躰候て何とも笑止之由共申候て、色かへぬ竹
葉なと候ハ、そのそミ之由申候に、有合者とも、
それもこく候てハ腹中にたゝるへく候、いかにもうす
くとしほり候てなど申候俣、あまりのおかしさにた
へす、

情なくしほらせてのむ身のはてやつゐにハ野へのか
すミとならまし と誹諧一首たはふれ候て、賞翫共
申候也、寔く三佛乗の縁たるへき歟、
一六日、三城へ狩の爲罷越候、本田治部少輔殿被聞付候
て、先彼宿所へ參候へ、よきおとしの場候間見せ候す

る由承候、然者如其打立候也、佐土原通候時、弓削太郎左衛門尉以又七殿(豊久)へ申候、爰元罷通候、尤祇候可申候へ共、中書公御留守にて候間、御歸館之刻可參候、御城邊罷通候条、先々御案内申入之由申候て罷通候、右松沙た所にて、彼所之衆寄合候て坂迎申候、種々會尺也、本田治部少輔殿彼処まで迎へ御座候、從夫打烈治部殿へ參し候、平田新左衛門尉殿被出合、城へ可參之由候、尤可參候へ共、今度ハ急申候間、可被指置之通申候て治部殿へ通候、躰而平新も同心也、治部殿種々會尺被成、拙者も御酒もたせ候也、平新ハ躰而歸宅候、其後風呂焼せられ候、入候て慰候也、寺社家之衆、又ハ穗北衆中なと少く御酒肴持來られ候也、銘々賞翫申候、

一七日、狩之由候つれとも、天氣惡候て無其儀候、又々平新是非城へ可罷登之由候間、御礼ニ參し候、太刀・百疋進之候、先三献、其刻百疋預候、從夫種々會尺也、躰而高城へ急候處、於中途一鹿藏からせられ候、猪・鹿三取候、芝屋候て穗北衆中之校量にて會尺也、從夫高城へ越着候、山田新介殿中途ニ被出合、小宿へ案内者被成、濱田右京亮宿申候、今晚新介殿へ礼ニ參し候、

太刀一腰・百疋進之候、先三献如常、百疋預候也、種々會尺也、宮崎衆中二三人座ニ被出候、高城衆も一兩人也、

一八日、早朝山新より、夕宇治名茶拙者進之候、是を一服賞翫候する間、城へ可罷登之由再三承候、然共吉利殿へ必今晚平岩ニ可罷着之由約諾申置候間、急候假成間敷之由申候也、從夫山新拙者宿へ礼ニ被來候て、我も三城へ同心可有之由承候也、此朝高城寺社家衆中大酒預候也、左様之賞翫共申候、其座過候て、新介殿同道ニ打立候、なぬきにて沙汰人処にて新介殿種々會尺被成候、從夫美々津へ着候、吉利殿より使者預候、兼約にハ此晚平岩ニ可被出合之由候つれとも、鹿藏取相違候条、如塩見可參之由也、さてハ塩見のことくとおほされ候哉、委承候、併天氣こそ惡候へ、其上夕陽ニ及候間、平岩まで漸今晚ハ可罷着候、明朝案内者払曉ニ預候ハ、如狩場直ニ可參之由申候也、美々津大学坊処ニ暫時やすらひ候、會尺共也、從夫平岩へ通候、吉利殿内衆田中市佑処へ宿仕候、種々會尺也、此度狩之日限總州へ約束申候故急候處ニ、所々之會尺遅く候て、打立遲引候て迷惑仕候刻、あまりの事に、

今そ知るしき物とと、まらぬ客をハイそきたてへ
かりけり

など友とする人ひとりふたりにあひかたらひ、道のほ
とりの木のかけにおりて、かれ飯なとくひけり、か
れ飯のうへに雨落てほとひ候て、しかくならず、そ
れヨリ行くて美と津へつき候、平岩まで通候ハ、
はや日も暮ぬ、船に乗など候ま、舟にのり候、然ニ
平岩へと總州御約束候て又塩見へと候ハ、若く平岩へ
ハ御宿など無之もや候するらんと、船中之人こそり
て申候ま、

名にしおハ、聞て答よみ、津なるむかひに宿ハ有や
なしやと

など狂言共申候て、平岩へ着候、總州使者預候て、天
氣悪候へとも塩見へ是非共可參之由也、餘雨降候間、
明日必可參候、今晚者可被指置之通返事申候也、使権
宮内左衛門尉也、總州(兼心)太守様へ鉄放進上候、鹿兒嶋
にて射させられ候へハ一向不中候間、秘藏と聞召及候
条、又と返給被成候、拙者届申せと候て、宮崎へ御持
せなされ候間、爰元へ持せ申候、明日狩ニ定而もたせ
られへく候とて、彼使ニ渡申候也、

一九日、天氣悪候て狩無之候、從總州逆瀬川豊前拯にて
承候、今日雨降候て狩之儀不罷成候、笑止ニ候、さて
ハ早く塩見可參之由也、吉利山城守殿(久念)是も狩之爲同
心申候、朝食參會候、逆瀬川同前、從夫廳而塩見へ可
參之由申、豊前拯者かへし候、天氣少晴候間打立、塩
見へ參候、衆中途まで打迎ニ被出候、總州たれの口
まで御出合被成、小宿へ御案内者被成候、逆瀬川豊前
拯処へ宿申候也、從總州可參之由候間、城へ罷登候、
先三献如常、百疋預候、拙者も祝礼計ニ太刀・百疋進
覽候、從夫終日之御会尺酒宴也、衆中よりも大酒共預
候也、

一十日、從早旦狩ニ罷登候、朝鹿藏にて鹿一仕候、芝屋
にて御会尺也、日知屋・塩見之衆中思くニ食籠肴にて
御酒預候、美と津之衆なども御酒くれ候、從山中俣江
方・坪屋方など被來候、狩人千人計にて候、さて夕鹿
藏過候へハ各罷歸候、猪・鹿已上五十ほど取候、逆瀬
川豊前守拙者へ会尺仕候、吉利殿・同山城守殿・山田
新介殿など也、種と之儀共也、各深行ニ歸被成、從夫
風呂焼せられたる由總州承候間、入申候て慰候、今日
狩場にて思ひ出候、

もしもやと若葉かくれの櫻かり

一十一日、細嶋にてたちさせられ候て見せあるへき候処
 ニ、雨降候て不罷成候、然共少晴候条、はた浦之狩させられ候、鹿一取候、鎌田源左衛門尉殿被射候、細嶋衆棧敷構候て会尺申候、種々之儀也、幡州室之弥大夫与云船頭、當時當津へ逗留申候として指出候、杉原廿帖・樽一くれ候、此座過候て、井尻伊賀守日知屋へ可來之由被申候条、總州其外各同心ニ、彼処へ行候、樽とて祝言計ニ百疋持せ候、種々會尺也、及薄暮塩見のこくと罷歸候也、

一十二日、薬師如來へ別而看經申候、衆中十人計銘々ニ御酒もたせ被來候、并廣嚴寺礼ニ被來候、酒肴もたせ也、見会申賞翫申候、從土持殿使者預候、新名美作守也、酒肴持預候、使者へめし振舞候、預候酒など賞翫仕候也、井尻伊賀守昨日之礼ニ被來候、切付一通くれられ候、細嶋衆百疋祝言とてくれ候、才介・宗介とて細嶋衆にて候、酒持來候、同杉原・鳥子十帖つゝくれ候、いつれ見參候てかへし候、右松備後守可來之由候間行候、總州・山城守殿・新介殿同心申候、種々會尺共也、拙者御酒もたせ候也、從夫小宿へかへり候て支

度申、如山影打立候処、逆瀬川方祝言とて又御酒振舞候、むすこ懐出候て見せ候間、祝言とて脇刀遣候、然処從總州、爰元へ始罷越候目出被思之由候て、刀拙者へ預候也、右松方前之礼として被來候、百疋預候也、

總州同前ニ打立、ねらひニ登候、川上源五郎殿より書狀宮崎へ持せ預候、それを持來候、於中途披見候、去春かこ嶋へ參上之刻、向嶋白濱と二俣境論之儀大方落着候、然ニ二俣百性悉皆退出候、是者定而一途之事共可有之候歟、然者爲意得承由也、返書、論所之事、見者を頼存見せ申候、殊ニ源五郎殿も渡海被成御覽候、

其上市成掃部兵衛尉を以、本田刑部少輔殿へも落着之義細碎申定候、別儀有ましき由候キ、然処、二俣百性退出候事竟外存候、爰元遠方候条何篇難測候、様子被聞召合被仰理候ハ、可得其心之由申候也、此夜ハ土うちと云村へ留候、總州かり屋にて種々會尺共被成候、一十三日、狩之由候間、早朝拙者宿にて總州・山城守殿、其外拾人計振舞申候、從夫狩ニ打立、一鹿藏引廻候処、雨降來候て各空罷歸候、併鹿十計取候、吉田右衛門佐殿棧敷構なされ會尺之由候処、大雨にて候間難成候て、總州御宿ニ被持せ候て種々會尺也、從夫各集居、誹諧

などにて閑談共候、薄暮ニ各小宿ノニ被歸候、拙者ハ總州御連歌見申せ之由候て、彼御宿へ暫堪忍候て、寔不相應之不審など、任無御隔心申候、深行ニ小宿へ歸候也、

一十四日、早朝より狩ニ罷立候、猪・鹿ニ射候、猪殊之外大に候、拙者射候へハ、麤而吉利殿へ懸候を取被成候、總州三ヶ処くひ候、然共御痛無之候、長野談路守・拙者三人にて取留候、此夜者廣瀬与云村へ留候、

一十五日、可罷歸之由申候へ共、總州承事ニ、昨日猪ニくハれなされ候之故急候など、候てハ、外聞不可然候、少も御痛なく候之条、今日ハ爰元へ逗留申、明日罷歸候て可然之由也、從夫ひたうと云村へ行候て留居候、山影衆中五六人酒肴被持來候、從總州も酒肴御持せ也、吉田右衛門佐殿酒肴持せ使預候、明日狩之儀兼日定候、急候て此度ハ指留候欵、雖然可罷歸路邊之鹿藏一二犬山狩させられへき由也、さてハ菟角地下之御校量法第之由申候、鎌源此晩ねらひに猪被射候、それを各賞翫共候て、夜一夜酒のミなどにて閑談也、

一十六日、早朝吉田右衛門佐殿被來候、從夫逆瀬川豊前丞・井尻太郎四郎など打續狩人多く被登候、三鹿藏狩

候、拙者鹿一射候、從夫破籠之酒狩人へ振舞候、吉田右衛門佐殿・右松備後守・逆瀬川など酒肴共持せ候、賞翫共申候也、此夜高城之内そや原と云村へ留候、亭主御酒など振舞候、宮崎より同心衆各寄合候て、深更迄御酒などにて語慰候、拙者同心衆にて猪・鹿已上廿五六、此間之狩ねらひに射留候也、

一十七日、早朝そや原打立候、津野・松原の陰ニ暫やすらひ候て、破籠など受用候、面白松原など各承候間、狂言に、

昨日迄心にかけしさをしかのつもの、松原けふそ過行など戲候て急候間、午刻計財部へ着候、衆中各中途まで打迎ニ被出候、久米田名字之処へ小宿被仰付候由候て、鎌田筑州^(政心)指出被成案内者被成、暫やすらひ候、衆中十人計御酒持來候、亭主も御酒振舞也、從夫鎌源館へ罷登候、先三献如常、百疋預候、拙者も太刀・百疋進之候、女中親類にて候条、御酒進之候、表之座にて種と会尺被成、衆中よりも樽數荷預候也、表之座事果候て、裏之座にて又会尺種と也、女中指出被成、拙者もたせなと賞翫候、從夫麤而罷立候、宮崎衆數祢越中守・長野談路守・野村大炊兵衛尉・鎌源同心申候也、

又小宿へ寺家衆など御酒預候、鎌筑も中途まで被送被成、此晚佐土原へ着候、弓削太郎左衛門尉へ宿申候、中書公頃從かこ嶋御歸宅之由承候間、此晚にても明朝にても可罷出之由、長野下總守まで案内申候、廳而可參之由候間其分候、又七殿御指出被成御寄合也、長野談・野大同心申候、御座へ被召出候、かこしまより珞阿越にて候、是被參候、種く御会尺共也、中書者遠路之御勞又ハ瘡氣出合候条、御見參無之之由被仰分候、拙者猪一丸・樽一荷進覽申候、御賞翫共也、此夜拙宿へ又七殿入御被成候、御酒被下候、左様之賞翫共令申候、深行まで御酒宴也、

一十八日、早旦鎌田又七郎殿佐土原へ被來候、(鎌田使也)雲州使之由也、昨日鎌源前より註進候、拙者今日都於郡へ可罷

越之由候欵、尤目出被思候、併此間三城表へ逗留共候間、先く此度ハ直ニ罷歸候て可然候、如何様靜ニ可參之由也、返答、御札ニ可參之由きて被聞付候哉、就夫(政虎)御息此方へ來儀、祝着ニ令存候、餘御懇懃之至無申計候、菟角只今可參候間、面を以可申承之由申候也、此朝弓削太郎左衛門尉拙者へ振舞也、それ過候てとお郡のことく打立候、徳雲寺へ宿申候、廳而鎌田(政虎)甚五郎殿

案内者ニ被來候間、雲州館へ罷登候、先小宿へ衆中五六人御酒など被持來候、亭主も御酒振舞也、別枝・世安などと有合候て雜談共也、雲州表之座にて先三献如常、太刀・百疋預候、拙者も太刀・百疋進之候也、種く馳走共也、此日かこしまより書狀到來候、遮而御談合可有子細候、鎌雲・山新同心申、必來廿三日參着申候様可參之由也、即鎌雲へ申候、高城へも書狀を以申候也、種く酒宴などにて會尺也、從夫罷歸候、小宿へ雲州父子三人、其外衆中多く御酒共持せ被來候、銘くニ賞翫共仕候也、天氣惡候間頻ニ留候へと承候へ共、一兩日中かこ嶋へ祇候申候する間、急候由申候て歸宅候、直ニ金剛寺へ參候て風呂ニ入候、種く會尺共也、夜入候て、城のことく歸宅申候也、△

一十九日、▽罷歸候とて衆中各被來候、猪など振舞候、山物語共也、△從曾井比志嶋殿使預候、頃忠棟より内(伊集院)狀到來候、武庫様守護代ニ御定之由候、定而御祝言共申上候らん、如何様之調義たるへく候哉、尋之由承候也、返答、此義去春參上之刻被仰聞、さてハ其分ニ相定候哉、目出候、武庫様御子息様(久保・家久)頃御元服之由候間、眞幸へ祇候申御祝言と存候処、かこしまより參上

之由蒙仰候条、先く任其趣候、▽然者彼方にて承合、諸篇御祝言共可申上候、當分者如何様ニ御祝物等調候するなど、ハ存定候ハぬ由申候也、△此晚山田新介殿より使僧也、先日參候札承候、又かこしまへ參上之由候間、明日打立可有候、巨細かこしまにて可承之由共也、

一廿日、衆中など歸宅之由候て各被來候、細工などさせ候て見申候、明日かこしまへ參上之支度共也、恭安齋當年就御養性氣未御越候、然者拙者行候由聞せられ候間、与風御越之由也、先三献如常、從夫種く御会尺共申候、此夜伊地知大膳亮酒肴種く被持來候、衆中など參會賞翫仕候、深更まで酒宴共也、此日谷口和泉掬三男、日州居留前ニ城戸之番等させ可申之由訴訟申候間任其儀候、衆中各へも談合申如此候、祝言とて御酒并二百疋持來候也、鹿兒嶋へ肥州三池殿使書進上候、并吾くへも織筋一・書狀預候、かこしまかり屋より持せ候条、致披見候、彼塚當分無何事之由也、△

一廿一日、▽如常、△恭安齋へ參會候、從夫馳而拙者ハ打立申候也、▽田野三片時憩候、長藏坊・山本筑後守(有閑)など指出候、柏原周防介・関右京亮同道申候条、破籠

共寄合候て、海江田より之供衆共待付、從夫△さり川迄行候て留候也、

一廿二日、早朝打立候、▽都之城元服之渡と哉らんニ暫やすらひ御酒など受用候、右兩人同道也、△此晚敷祢へ着候、(敷祢御覽)休世齋へ即參候、▽種く御会尺也、彼御宿所へ留候、(敷祢御覽)三郎五郎殿もくたり被成候て会尺也、△

一廿三日、▽又休世齋御振舞也、柏周・関右同前、馳而△出船候て白濱へ着候、▽彼所へ經營之義候て、帖佐龜泉院之東堂渡海候て御座合候、參會閑談共申候、御酒など也、△從夫又出船候てかこ嶋へ申刻計着船候、▽御寄合中御問使へ、今日必參着之由御狀到來候条、如其參着之由案内申候也、平田殿へハ自身參候、養性氣にて見參無之候、△善哉坊拙宿へ來候て、此間長く爰元へ逗留難義之躰共物語候處、鎌田刑部左衛門尉殿御座候、參着目出之由也、今度吾く被召寄候事者何条にて候之哉、聊も無存知之物語共也、去春就 御家之儀一ヶ条 武庫様へ御承之事ハ、此度御領掌之由也、寄合中者御祝物等進上候之由物語被成、閑談共也、▽明朝出仕歸ニ宿所へ參候へ、肥後より玆酒到來候由也、いまた御礼さへ申候ハて被召寄候、乍斟酌可參之由返

答申候也、△

一廿四日、▽払曉地藏薩捶へ看經別而申候、△出仕如常、

懸御目候、直ニ早々敷參上申候由蒙仰候、町田出羽守

(重秀)殿伊地知伯耆守殿にて、鎌雲・山新・拙者三人へ被仰

聞候、武庫様八城へ御移被成、御名代ニ御座候て、

國家之儀等御裁判之由被仰出候、然者、數度御斟酌候

へ共、堅被仰取候て、御領掌候、さてハ老中衆其外御

使衆、又者地頭衆之中にも、御用次第彼方へ被指移候

てこそ、諸篇之噯等可事成被思召候、此等之義如何可

有候之哉、各々へ御尋之由也、拙者先々申上候、条々

被仰聞候、具ニ承候早、御談合衆猶々可被參之由候間、

余者次第く御談合たるへく候、先々去春參上之刻

委被仰聞候キ、如其武庫様御領掌候哉、尤目出奉存

之由申上候也、▽出仕歸ニ鎌刑へ參し候、種々会尺共

也、山新・鎌雲同心申候也、拙宿へ各參上申之由候て

御礼共也、御酒參會閑談共也、五嶋宇久和州より、使

者貞方右衛門佐進上也、吾々へも書狀并太刀・馬・織

筋一預候、書面、遙御無音所存之外候、頃方方屬御案

中候之由共也、△

一廿五日、▽早旦天神へ別而讀經等申候、從夫出仕申候、

御月次御連歌也、太守様者御虫氣とて御出座なく候、

然者、隙入事候ハす候假、躰而罷歸候、△町田羽州礼

ニ御座候、閑談共也、先日武庫様へ一ヶ条御承之御

使(忠長)麟臺・町羽・伊伯被成候、武庫様も人してきこし

めされ候、其使、喜入攝州・有川雅樂助・上井次郎左

衛門尉にて候つる由物語候、又武庫様御息御元服之

様子、理髮之役中書公被成之由也、御名又一郎殿と申

由也、御次男御元服者、武庫様御假屋へ太守様御

光義之時と聞得候、理髮者町羽被成候由也、御名又八

郎殿と申由也、又一郎殿御進上式之御引物、御酌之時

刀御進上之由也、太守様より御腰物御給被成由也、

又八郎殿鎧甲進上被成、是も御腰物御賜之由也、▽

御進物酒肴等之事ハ不及書載候、大方物語如此候、此

日も、當所衆各被來閑談共也、御酒なと參會候、

一廿六日、出仕如常、一乘院此間御祈禱被成候、御暇之

由候て御參也、從宇土殿使僧、片色二進上候、從小代

殿使者、轉多酒樽廿荷進上也、右各拙者御前二候て取

成申候、此日拙宿へ新武・珠長・山新・伊伯・八木越、

礼ニ被來候、御酒參會、閑談共也、新武御酒預候、即

賞翫申候也、此日、明日向嶋可爲御馬追候、御供可仕

之由、白濱次郎左衛門尉殿にて承候也、

一廿七日、早朝出仕如常、(重治)上使柳澤殿へ御寄合明日と

候つれ共、餘惡日にて候、其上(元忠)御請未出來候間、明後日可然候、左候ハ、殿中にて御請御渡可被成之

由也、さてハ淨光明寺より、明後日御光義之由兼日

定候、雖然此義ニ付被差延、來月二日御光賁可被成

之通可申理之由候間、即其分申候、何と様にも御意次

第たるへき由也、此日向嶋御馬追ニ御渡海候、御供之

由被仰候間其分候、先於御棧敷御三献如常、御盃、川

上源五郎殿地頭にて候間、祝言ニ頂戴候、從夫廳而御

牧並へ籠候、當野ニ狼類出候間中絶候を、去年已來又

と被召立候間、馬數漸十六疋候、取駒一疋・印指一疋

にて候、並出ニ若衆など各乗候て被出候、御一覽共也、

其後網曳せられ候、萬之鱗多と入候、上覽共也、御

食參候、御座躰上座(久殿)太守様、客居川上殿・町田出羽

守殿・拙者也、主居本田紀伊守殿(重親)・河上源五郎殿也、

種と御会尺共也、御酒一二篇參候時、前之網ニ入候鯛

一懸、同包丁可被仕之由候間、瀬戸口安房介御前にて(重也)

包丁也、大草殿直弟と申劫者の手から一入之由御一笑

共候、廳而只今之魚御肴ニ參候て御酒參候也、嶋中役

人衆など御酒多と進上共申候也、御供衆皆と被召出、

御酒被給候、從夫御鷹野へ御登被成、吾とも御供仕候、

御鷹雉三取申候、小鷹二・準一居させられ候也、拙者

食籠肴にて御酒進上申候、於中途御賞翫共也、河上殿

・本田紀伊介殿、此外御供衆・鷹衆などへ振舞候也、

從夫やかて御歸帆候、未暮内ニ御着也、

一廿八日、荒神へ別而看經申候、出仕如常、此日新武・

山新終日拙宿にて閑談候、武州と暮なと仕候、次ニ物

語申候、先日吉利殿にての千句之内に、見せてしもこ

そ拾かひあれと云前候ニ、乱暮に打むかふ外の友も

かなと申候つる、只今ハ新介殿御覽候程に、拾ふか

ひした、かにあるよし戲申候、新武、右之句より今の

あいしらい、珍重之由共候て慰候也、此晩右之衆へ夕

食參會候、深行まで心靜ニ物語共被成也、此夜中より

少惱氣出合散々之式候、△

一廿九日、▽未明參官めしよせ脉取せ候、熱氣出合候由

申候て、廳而藥調遣候、即受用申候也、從夫漸々ニ心

地なをり候、此日於殿中上使柳澤殿御寄合之由也、

御請も屋形にて御渡有へき由兼定候、御座躰、諸篇不

罷出候間不存候、此日各拙者氣分之由候て御出、御尋

「上井日記」

共也、△從琉球國、遙久御無沙汰之条、御音信之爲、
 又者肥後・肥筑兩三ヶ國御所感之御祝言可申上とて、
 使僧船着津候、先本田(親身)下野守殿彼口噉被成候間、彼前
 より白濱防州使僧宿(重政)へ被指遣、目出之由可仰理候也、
 ∇河上日向守殿、源五郎殿使とて御座候、趣者、二俣
 百性悉皆はつし候間、本刑前より、最前如此可有共覺
 悟候ハて、論所之事見者次第事果候、然処今分ニ候へ
 ハ御公役等も罷成ましく候、笑止ニ被思候、何と様に
 も源五郎殿御噉被成候へ之由承候、最前白濱与之事ニ
 候間、拙者へ承由也、拙者返事、さてこそ本刑与面談
 申、何と様にも見者次第と頼存、既源五郎殿も御覽候、
 其上耽落着候論所之義候間、今更拙者前よりハ順逆申
 間敷候、御老中より承候ハ、其時愚意之分可申通、
 柏原防州にて申候也、△

∇五月

一朔日、養性氣之条出仕不申候、此日も各衆中御礼共也、
 伊集院野州(久造)爲御談合昨日参着候、養性氣笑止之由候て
 御座候、(新納忠元)・(鎌田政近)・(鏡田政近)、終日伊野・新武甚うたせ

られ候也、御酒など振舞申候也、(重加)・(重本) 祇答院賀雲本田名字
 之方養性候、被懸御目候由候て被來候、中紙廿帖預候、
 一二日、三官來候て脉取候て養性申候、服藥共也、此日
 上使柳澤殿(元政)加治木まで被立せ候、御進上之様子、黄金
 百兩・御馬三疋・御鷹一連と大方聞得候、各々への御
 返礼物等委不承候、乗船と候つれとも雨風不艶候て、
 柳澤殿ハ陸路より加治木へ越被成候、毛利殿使僧(權元)五戒
 坊、是も同前ニ打立也、此日雨中とて若衆中あまた被
 來閑談共候、其中狂言ニ、今度之上使柳澤殿、一段索
 をよく御ないなされ候つるよし、宿元之者など駈と見
 候、其上商買人之様ニ様子見得候つる、言語道断之由
 共誹謗共候、無益之由打留候て、あまりの事に、
 進上の馬の綱引するからや上使のないしなハたちぬ
 らん と申候て大笑申候、他國への御使などハ御遠慮
 可入物にて候欤、

一三日、又三官來也、脉診、養性申候、平田濃州館(光宗)にて

今日ハ御談合候、可承之由候へとも養性中にて候間、
 可被指置之由申候也、白濱防州御座候て閑談也、本田
 信州も御座候、此日從敷祢殿(頼賢)使也、脇本三河丞・湯脇
 佐土丞也、十八官不慮之儀出來申候、典厩御家景ニ被

居候渡瀬平内左衛門尉と云人と口論申合候、従夫冤角候て十八官所へ彼平内切入候ヲ、二三度はううちなとにし候て追出候、然共彼者切狂候条、手負なども候、

其分にてハ不成候て、馳合候衆平内を仕詰候、依是十八官相手之噯候する爲、塚脇方番ニ被遣候へハ、由断申候て落失候、然間彼塚脇者腹を切せ候するとおほされ候つれ共、如庄内落失候、十八官之事、拙者家景向嶋白濱を頼渡海申候由きかせられ候、是非共ニかへし進之候へ、敵人として廻へ渡可有之由也、返答、玉峯不慮之儀出來候哉、笑止ニ令存候、就夫彼者之事承候、不紛愚領白濱を頼參候、可返進之由承候、何と様にも御校量次第御談合可申候へ共、昨日使節を進之候、未參着候乎、妻子等ハ白濱へ召置、十八官事者寺領など頼存候て可然候、其故ハケ様之六ヶ敷科人拙者請取申候ても、後日爲ニ罷成ましく候通かたく申候、然者彼方海路之条、于今白濱へ居候欵、又ハ拙者申候ことくいつれの寺領をも頼申候欵、未分明候条、取留御報難申候、併返進之候する事ハ難成之由申候也、

一四日、出仕不申、養性仕罷居候、又此日從敷祓殿同名衆一人、又昨日之使相添預候、是非共彼玉峯返進之候

へ、左候ハてハ口事平均ニ難成之由承候也、此返事にハ、はやく寺領頼存候条、不及是非之由申候也、此日大山肥前守殿御使ニ被來候、趣者、市來野栗毛之駒被下候、少肩を痛ミ候、若く此肩平癒申候ハすハ、紫波洲崎へ牧仕立申候なる、彼父馬などに可然被思召之由也、即忝之由申上、拜領申置候也、又春山野之母駄被下候、是又此日日州のことく曳せ申候也、△

一五日、▽養申立候間祝言ニ出仕申候、先粽御寄合被成、御座躰主居 太守様、御次光宗(平田)・親貞(本田)、客居河上上野(久保)守殿・拙者也、御酒一篇加而參候、従夫如恆例次之間にて出仕、各粽被下退出共也、此日於殿中從京下向候蛛舞仕候、種く曲術難及書載候、寔く貴賤群集候て見物也、千疋被下候、折紙猿樂などへ同前と見得候、吉田美作守舞臺にて被遣候也、大夫頂戴仕候、御座にも供饗之内にて御酒一篇參候、不断光院など御酒御給候也、拙宿などへ衆中各今日之御祝言承候也、此晚從敷祓殿又使預候、脇本三川拯・湯脇佐渡拯・塚脇和泉・岸本新兵衛尉也、趣者、猶く玉峯頻ニ歸申候へ、廻衆上山長門守被申事ニ、彼玉峯を敵人として指出被成候ハ、大安寺と談合候て身上にハ何事有ましく候、

左候ハ、口事も事果候する、有かたへも内談共候由候間、是非共ニ寺家へ罷居候共、拙者校量申返進之候へ、題目領地等此間ニ不易敷称へ被召置候する由也、拙者返答にハ、廻へ内談共被成、口事邊事果候する様に候欵目出候、併彼玉峯事者最前愚領中へ參候へ共、妻子計請取申候、其人之事ハ寺家を頼存候て可然之由申候間、南林寺へ罷居候、然者拙者意見ハ難叶候、直ニ使玉峯へ内談被成、彼者納得申候ハ、可然候、又者南林寺御分別次第たるへき由返答申候也、從南林寺も使僧賜候、當所へ參上申候ニ御無沙汰被成候、此間安樂之湯ニ湯治ニ越候て昨日歸寺候、然処、留守中十八官不慮之義出來候て御寺を頼存走入候、拙者萬端存知たる者に候条、入魂申候へ、敷称なとより返進之候へなと承候共、許用申候ハぬ様にと承候也、得其心之由返事申候也、△此朝被仰出候、肥筑表種と雜説到來候間、能仕合御談合衆着合に候、各精を入られ候て肝要之由也、▽并忠棟鹿屋へ逗留候、早く歸宅被申、各打合談合專一之由、早と書狀可進之由也、即認被遣候也、△一六日、▽出仕如常、福嶋道場御夏間ニ參也、御茶・廻進上也、御見參被成、△此日琉球使僧へ本田刑部少輔

・白濱周防介にて、彼口取次にて候間、親貞前より連く御無沙汰曲事之由、又者進物等次第くニ弥輕微之義、三司官書狀ニ在判無之候、國王之勅札ニさへ印判候、然ニ三司官判無之候、不審之事等也、▽此日新武宿へ礼申候、それより新武同心仕候て、不断光院へ參候、茶二斤進覽候、新武と碁二三番仕候、芳溪も御覽候、山田新介(有信)・長谷場筑州同心申候、御酒など御振舞也、それより親貞へ無沙汰申候間參候、即指出被成、御酒寄合也、此晚市來野駒湯治なとさせ候て、肩之養性仕せ見申候而慰候也、此夜本田田(彌立)六殿無沙汰被成由候て御座候、御酒參會、深更まで閑談申候也、△一七日、▽出仕如常、雪窓院夏間ニ參被成、御見參也、肥州大野殿より註進也、去月廿八日、豊後衆筑後表城嶋へ取懸候処、堅防戰候て、豊衆究竟之者共一二百程討留候由也、然者又豊衆高良山へ引退由也、又田尻殿(盛通)よりも同註進之狀到來候也、▽此日珠長へ礼ニ行候、御稽故連歌一順之衆なと被在合候、拙者御酒進之候、左様之賞翫共候て各閑談也、此歸るさ、伊集院野州宿へ礼申候、新武など有合被成候、種と會尺共也、誹諧・碁なとにて終日慰共也、△

一八日、▽伊集院道場より夏問之御酒進上也、忠棟夕歸

宅候として出仕被成候、天氣惡候へ共、△今日球琉使僧

へ御寄合之由也、▽祇候不申候間委不存候、雖然承及

候分少く書付候、使僧宿より殿中へ被指出候、路次之

案内者丹生備前守、大門被開候へ共、小門より參入候、

兩落迄白濱周防介被指出、座へ奏者也、雨不艶降候間、

殿中小評定所にて使僧支度也、衣儀正しき由也、琉之

勅書本田下野守被請取、御對面所押板ニ被置候、進物

等各指寄請取、御目ニかけられ候、聽而使僧へ御對面

候、先御礼茶參候、其後御時御寄合被成、御次川上上

州・親貞、客居天王寺・賀雲也、御點心、三番茶參候、

如常召出之御酒、使僧伴一人墨習參候、持參之御酒參

候時、墨習御酌申候由也、終日乱舞候て御酒宴也、從

琉球國王御進物註文、燒酒蠻貳・食籠一赤地、繪花鳥、

唐盤一束大小、内白柴、繪花鳥、紅花百斤・白絲拾斤・織

物卅端・絹子甘端・蚕碧糸五十把・太平布百端、已上、

天王寺私之進物、綿織物十端・唐名香七種・唐墨二挺

・方盆一枚・香盆一枚・唐紙二百枚、已上、△琉之勅

札之趣、承聞、近年如用霍去病、慶因奴於阜蘭、下陳

搏定屬猪之天下於笑中、亦不足比矣、殘黨歸服幕下不

日乎、於此方何大慶如焉哉、仍爲伸喜悅、差遣天王祖
庭和尚者也、輕微之土宜錄于別楮、恐惶不練、

萬曆十二年甲申季冬廿有三日

從琉三司官寄合中へ之書狀之趣、態用短書令啓、承聞、

兩三年間征伐肥之六國、服于幕下、殘黨亦不全也、依

之爲伸喜悅之深旨、被差遣天王祖庭和尚、自今已後亦

不違旧規、可被修隣好事所庶幾、曲折猶付于和尚之舌

頭、不腆之方物、蚕碧糸廿五把・太平布五十端進獻之、

恐惶謹言、

大里

萬曆十二年甲申季冬廿有三日 國上 在珠印

那吳

鹿兒嶋奉行御中

▽右太平布・蚕碧糸、寄合中五人候間、等分ニ被分、親

貞彼口御取次之条、丹生備前守ニ被持せ預候也、此日

天氣惡候条、平田新四郎殿へ參候て終日閑談共申候、

拙者御酒進之候也、村田雅樂助(登喜)より源氏六卷註借用申

候て見申候、壽信之自筆にて候間、書写可申之由約束

申候也、拙者萬聞集此札ニ雅樂助殿へ借申候、大慶之

由也、△

一九日、▽出仕如常、御談合種々之儀出合候也、△山田新介八城表へ可被召移之由被仰出候、▽種々侘共也、然共 御兩殿御内談共候、其上猶々餘多被召移候する間一人に不限候、是非以被罷移候て可然之上意也、此日於殿中若衆中御稽故連歌也、御次珠長・忠棟・平田新四郎殿・喜入大炊助・白濱次郎左衛門尉・川上雅樂助・爲阿、客居賀雲・川上左近將監殿・拙者・町田五郎太郎・宗運・本田刑部少輔・村田雅樂助・八木越後守也、會前賀雲・三原下總守・木脇大炊助也、發句賀雲被仕候、種々御会尺共被申上候也、此朝忠棟へ吾々被召寄候、客居新武・鎌雲・伊野・柏周・宗与、主居拙者・忠棟・山新・関右京亮也、種々御会尺也、到來之御酒共候て各賞翫共也、△

一十日、▽昨日疏使僧天王寺礼ニ被來候由、柏周被申候、嶋織物三端・線香ニ把預候、御連歌ニ罷出候由候て被歸由也、△此朝出仕如常、御談合衆大概御隙明候欵、併遠方衆被召寄事ハ毎々大義候、今一兩日各祇候被申、肥後表其外諸口之御相談肝要之由、伊伯にて被 仰出候也、▽出仕歸ニ宗与茶湯申候間可來之由被申候間、稅所新介殿同心にて彼宿へ行候、種々珍敷模樣共也、

茶過候へハ變而歸候也、此日於殿中御談合也、吾々罷出候、△ 太守樣福昌寺開山忌ニ御參被成、諸篇如例年、親貞御供也、▽此晚平田濃州可參之由承候間其分候、鎌雲・稅新など也、種々御会尺共也、各罷歸候処ニ、拙者ハ少用之由光宗承候間居留候、本田刑部少輔殿家景与拙者領地口事邊之義候つる欵、我等利運申候様に聞せられ候、就夫本刑彼義落着共申候事を後悔之様ニ聞え候、然者、二俣之事上被成候するなど、地盤之様ニ聞え候、若く拙者分別可申事も哉候すらん、承之由也、拙者存分共申候、彼義者本刑与談合を以見者を頼存、是非共其衆之御分別次第之由申候而、如其落着申候処、百性他出申候事ハ無了簡にて候こそ候欵、菟角拙者へ承候する事ハ、本刑前よりハあらしかと存候、殊二俣之事上被成候共、御老中御請取候する義を拙者ハ覚悟申さず候、若く彼地上候する由被申候ハ、先く御請取候ハて、吾等愚意之躰聞召候様ニ頼存候由、申候也、

一十一日、看經別而申候、出仕如常、御談合共也、山田新介移之事難成之通數度被申上候へ共、類々上意候、さてハ菟も角も一節御意法第之由被申、巨細者不及書

載候、琉球圓覺寺より忠棟へ付狀にて言上候、其書面
ニ云、頓首再拜、茲伸龜手呵氷硯、不顧其憚、擎朶雲
一封、承聞、肥之六國如泰山之壓卵(卵)、湯武討桀紂吾曾
聞之、大鵬之吞大龍、昔聞之而今又聞之、九萬里之外、
誰爭其雄矣乎、塞垣草木聞威風皆偃、今也天下無敵矣、
愚在遠嶋傳之聞之、欣々然迷愚懷、至祝至禱、雖輕少
之至、明燭百丁獻之於殿下、宜預御披露、誠恐誠惶頓
首再拜、

大明萬曆十有二年蜡月念五日

珠之圓覺寺也
宗長判

右當圓覺寺者、薩州河邊之住僧也、然而渡海候て、于
今琉へ堪忍也、此朝出仕歸ニ各拙宿へ同心申候、座躰
客居伊野州・平田新四郎殿・稅新・白濱次郎左衛門尉
殿・架阿、主居阿多掃部助殿・拙者・鎌雲州・長谷場
筑州・爲阿也、心靜ニ酒宴共也、明日御稽故連歌一順
共申候、此日も於殿中終日御談合也、

一十二日、出仕如常、藥師如來へ從弘曉看經申候、此朝
も種々御談合出合候、定而 武庫様八代へ六月者御越
被成候する、左様之御供衆御家景中五番替ニ被盛候也、
各出仕より急候て罷歸候而、御稽故連歌ニ指出候、御
座躰 御次川上上州・拙者・鎌雲・山新・宗運・平田

新四郎殿、客居不断光院・新武・伊野州・佐多宮内少
輔・喜入大炊助・伊地知伯也、平田新四郎殿調養前也、
御非時參候時、宗運・佐宮・喜大・伊伯者影ニ被行候、
餘者御座也、御前より琉球燒酒被召出候、各へ被下
候、珍酒之条、各忝之由申上賞翫共也、

一十三日、出仕如常、此朝も種々御談合出合候、天草之
義共也、談合衆各此日御暇被下候、從肝付霜臺類ニ拙
者用段之事共候、可參之由承候間、如其出船候、佐多
宮内少輔殿・存長坊・加治木迄同心之由申候て伴候、
白濱へそと舟を着候、種々会尺共申候也、從夫加治木
へ順風候て輒着岸申候、船本へ彈正忠殿より使者也、
隈本治部少輔也、即可參候之由候間、彼使ニ打烈城へ
罷登候、茶湯会尺也、拙者・佐宮・亭主三人之座也、
珍敷様子共也、其後八疊敷之座にて拙者もたせの御酒
など賞翫候、又拙者同心之衆などへも御酒振舞也、此
夜肝付藏人殿へ宿申候也、

一十四日、早朝肝付小五郎殿御酒持せ御座也、參会申、
賞翫申候、并中之坊と申御酒預候、是又即賞翫仕候、
藏人殿此朝種々会尺也、霜臺者夕粗被仰分候、頃就中
氣分然々なく候て、夙ニ起被成候事ならず候、然者無

沙汰之由隈元談路守にて被仰分候也、会尺候過へハ宮内のことく打立候、未刻計濱之市へ着船候、暫小宿へ休居候、別當聞付候て御酒持來候、即見參仕、賞翫共申候也、從夫桑幡殿へ參候、先三献如常、種々会尺共也、拙者持せ之酒など賞翫共被成候、大圓坊など被來物語共也、△

一十五日、▽早朝より看經等如例、高寺食籠肴にて御酒

持せ御座候、即見參申候て賞翫仕候、留守殿酒肴持せ

礼義也、是も同前、政所殿へ礼申候、御酒もたせ候也、

大圓坊可參之由承候間其分候、中紙持せ候、種々会尺

也、△めし過候て茶湯也、▽養蓮手前也、△從夫直ニ

打立候、桑幡殿父子各送被成候也、▽犬飼之瀧通候間

立寄見候、今日ハ晴天にて候へ共、此間雨ニ水増候て

白糸を繰乱たる様ニ言語道断之躰候、あまりの事に、

曇なくひかりうつらふ晴間にもさみたれ増る瀧の白

糸

かく共申慰候て、犬飼の村ニ而夫丸悉さきに遣候、は

やく通候哉之由里人に尋させ候へは、未其儀之由申

候、さてハ別道を行候らん、吾々ハ此村ニ休候する、

跡ニ歸候て可事問由申候て、一兩人遣候而、酉刻計迄

徒ニ待居候、折ふし里の犬ほえ候を、各跡より來候や
らんとてよろこひ合候俣、

をくれつる友待方に一聲を聞もうれしき犬飼の里

如此よろこひ候へハ、一向不知道行人也、それに事問

候へハ、別道あまた候ま、横川のことく行候らん、な

と申候、さてハ此俣有へき宿りにてもなく候ま、本

田刑部少輔殿假屋此川上ニ有由申候間、其邊ニ行候て

留候、跡ニ夫丸尋ニ遣候者共も不來、勿論夫丸等も不

來候間、不如意千萬之躰不申及候、柏周防介・関右同

道申候、中く物笑無止事候、種々戲言之次、家にて

ハげに盛飯を草枕旅にしあれハ椎のはにもる など古

歌にも候へハ、昔も旅行ハさひしき事こそ、など申候

て一笑候へハ、それハ椎のはにもりたる物候つれハ

こそ、歌をもあそはされ候つらめ、今夜ハ椎のはも松

のはもいるへき様なしとて、つかれたる者共侘合候、

おかしさのあまりに、

椎の葉にもるといひこしいにしへを羨ほどの草枕か

な

などたはふれ慰候処に、悴者之内ニ、能因法師の五文字を賣人候ま、買得候、徒然慰ニと申候、驚候て、さ

ていつれの歌そと申候へハ、色かへぬ竹の葉、と答候て持來を見候へハ、濁酒の言語道断面白也、各寄合賞翫不斜、因ニ、

飛鳥川渕よりふかきなさけたにせにかハリぬる事そ
悲き

如此共雜談候てふせり居候、

一十六日、雨不艶降候、然ニ夫丸者未來候へハ、歎冬之躰に候て出やらず休居候、宿之邊ニ庵室候ニ行候て閑談共申候處ニ、人足共昨日栗野迄通候として、地下之家内者付候て、蓑笠など持來候、從夫各悦合候て、如栗野打立候、別當所ニ宿仕候、亭主麩而御酒など振舞候也、△

一十七日、▽早朝打立候、然折節、雨こそいたうふり候へ、雲老樹を埋空山、など思ひ出候刻、杜鵑軒近鳴落て、香山館に一宿候つるかなと、疑計候而、此風景ニ又あハマほしくて、又爰にかへらハしかし郭公 と申候而伴ひ候衆へ物語申慰、急候間、△未計飯野へ參着候、即有川雅樂助殿へ參上之由、同名神五郎を頼候て申候、麩而披露可有之由也、從 武庫様、祇候申候欵、目出被 思召之由候て、土持外記殿御使也、忝之由申

上候、此晚罷出候、即御見參也、▽御太刀・馬進上仕候、持參申候、本田源右衛門尉殿奏者也、麩而御寄合被成、御次山田越前守、客居拙者・有川雅樂助也、種々御慰懃之様子也、△御曹子御兄弟御指出被成、又一郎殿様へ御太刀・二百疋進上申候、又八郎殿へ太刀・百疋進覽申候、▽拙者折肴にて樽進上申候、御賞翫被成御酌申候也、又一郎殿様御酌被成、御盃拙者頂候也、宮崎衆中十人計同心申候、此中よりとて御太刀・千疋進上也、各召出之御酒被賜候也、有川雅樂助拙宿へ礼ニ被成候、此日罷着候へハ、先々次郎左衛門尉殿種々会尺候、白坂彦左衛門尉殿・上之原伊賀守殿など相伴候て酒宴共也、

一十八日、夜中より觀音へ別而念珠仕候、白坂彦左衛門尉殿にて二郎左衛門尉まで被仰候、拙者宿へ御礼被成候する、今日急候て罷歸候ハ、早く御光儀可有之由也、拙者罷出、さてハ御礼と候之哉、忝奉存候、併天氣惡候条、祇候申候て忝之通可申上候、御光儀者可被指置之由申候、御使順逆御祝言ニ御礼被成候する由候通頻承候、さてハ御光義、外聞と申目出候、尤中途ニ罷出忝之段可申上候へ共、祝言ニ御三獻上申度候之条、

内へ可申請之由、御使頼存之由申候也、次ニ白坂殿にて御内義申上候、昨日大方御祝言申上候、太守様御名代ニ御定被成候、連と弟にて候者上置申、別而武庫様御事ハ太守様と無ニ奉頼候、然ニ如此之義、拙者一人之大慶不過之候、然者向後次郎左衛門尉同前ニ、拙者事ハ諸篇可被仰付事可忝候、さて追而愚存之趣神載を以可申上候、拙身事も思召離されましき通、有川方前より上意之由承置候様にと申上候、猶巨細深と敷申上候、追而別緒ニ可註置候也、御返事、昨日御祝言申上候刻如蒙仰候、今度鹿へ御參上之砌、御名代之事頻御承被成候、重疊御斟酌共候つれ共、上意難默止被思さ候、其上下と申散にも、如此御名代など御定候へハ、又と御直子など御座候物にて候など申候、然者さも候ハ、一段目出御馳走被成候する程にとおほしめされ、先と御意次第之由御申被成候、惣而次郎左衛門尉此方へ被召置候間、拙者事別而被仰聞御内談共候するを、遠方与申、遮而御承之事にて被仰渡候、然処、如御覚悟別而巨細深重ニ申上候、御大慶至極候、備者神文にて追而申上候する哉、其節御存慮之躰をも具御返事可有之由共也、上意之委忝通、是も別紙ニ

可註置候也、當所衆あまた御酒など預候、銘と參會申、賞翫申候也、此日午刻計、武庫様拙宿へ御光儀被成、小路まで罷出御供申候、先御三献如常、本田源右衛門尉・上井神五郎御配膳也、御太刀・百足進上申候也、御盃拙者頂戴申候、其後御座躰、御次山田越前守・敷祢越中守、客居拙者・大田尾帳^帳守・有川雅樂助也、拙者ハ亭主与申、頻ニ斟酌申上候へ共堅上意之条、餘と事延候間、任御意客居之上ニ罷居候也、御会尺、膳部等旅中にて候間楚忽之躰候、三日まで參候、御氣嫌能候て、御酒など御褒美共候て御賞翫被成、御點心之時次郎左衛門尉・柏原周防介御座ニ被召出候、御酒宴乱舞也、拙者御酌之時刀進上申候、山田越前守披露也、聽而御酌にて御盃頂候、從其又拙者御酌申、各へ御酒申候、終日之御酒宴也、御歸殿之時御供申、御館まで祇候申候、又御見參被成、今度從鹿兒嶋直ニ參上申候、一段御大慶之由共也、△

一十九日、▽此朝も當所衆御酒共預候、各見參申賞翫仕候也、有川雅樂助茶湯会尺候する、可參之由候間其分に候、白坂彦左衛門尉・拙者也、種と珍物共也、御酒二篇參候、一篇ハ拙者持せ也、其後如常茶也、別義に

て候、手前雅樂助也、薄茶也、麴而退出候而、又次郎

左衛門尉殿にて、天氣惡候間雨支度共申候、然処ニ有川雅樂助暇乞とて被來候、白坂彦も同前、武庫様より

本田源右衛門尉殿にて、今度かこしまより直ニ參上

申候、一入御大慶ニ被思召候、殊昨日ハ旅宿にて種々

馳走之義御祝着候、御祝言計ニとて御馬被下候、即拜

領申候也、忝之由本源まで具申上候、將亦今朝有川殿

へ面談にて、武庫様へ白彦にて御内儀申上候、趣具

申候也、さてハ其分に深く敷申候哉、武庫様より被

仰出候てなり共如此たるへく候に、ケ様之申事寔々肝

要候、然者一身ニ至候ても、別而自今已後可被仰談之

由也、△此日飯野打立候而野尻へ留候、▽別當所ニ宿

申候、着候へハ麴而別當御酒振舞候也、△

一廿日、▽野尻町を早旦打立候、洪水故路次廻候間、漸

此晚△宮崎へ着候也、

▽一廿一日、衆中など歸宅申候とて被來候、酒肴など預入

も有、賞翫共申候、

一廿二日、此日も衆中・寺家衆など被來候、此方風呂焼

せ候て、城内之衆中又者拙者忝者共寄合、入候て慰候、

御酒振舞候、終日暮・將暮・茶湯・酒宴などにて慰候、

閑談共也、△

一廿三日、▽早朝、馬誘させ候て見申慰候、金剛寺御座候、茶湯・御酒などにて物語也、△氏久様御作之馬

書十八ヶ条頃書写候、▽然ニ跋候、左様なる得御意、

委讀分候也、此日も終日若衆達被來、暮・將暮・茶湯

などにて候、戰記など讀候て各へ聞せ申候也、海藏坊

・閑治部少輔兩人共御酒もたせ被來候也、閑談共申候

也、

一廿四日、払曉起候て、勝軍地藏之看經等別而丹精仕候、

此日も終日若衆達暮・將暮・双六などにて候、水流之

普請なども申付させ候、從吉利殿其後御無沙汰之由候

て使者預候、南林寺材木之事、佐土原与雜務之義共也、

相應ニ返答申候也、△

一廿五日、▽早朝天神へ讀經等申候、△馬書今日書果候

間、表紙など懸させ候て見申候、▽野村丹後守酒肴被

持來候、各參会仕、賞翫共申候也、

一廿六日、從有川雅樂助殿書狀到來候、先刻与風祇候申

候、辛勞之義共承候、殊更無会尺被成候由共也、次ニ

者、奈須左近將監へ就御鷹之儀かこしまより御扶持被

成、宮崎之内之所領ニ候之間、無吳義知行之由可申付

之義也、此日も終日、若衆中碁・將碁などにて被慰候也、△

一廿七日、▽此方風呂淋汗にて候、長野談州・山本備前
 拯・重信源太左衛門尉、風呂燒前にて種と奔走共也、

碁・將碁・双六など也、此晩是ノ庭にて鞠也、△かこ

しま奇合中より書狀到來候、先日如御談合、八城御番
 手御家景中五番替ニ御盛事澄候、然者、一番衆來月中

ニ可罷立之由相定候、次肥州表より到來之儀共候、一
 番衆必來月十日比可被立之由可申渡之旨也、▽井上使

兩処下向候、就夫所へ京都反錢、一反三十錢宛之義
 早速申渡、可調進之儀共也、

一廿八日、早朝より看經別而申候、殊荒神之祈念專仕候、

八城番立并反錢之儀所へ申渡候、佐土原へ長野殿迄
 勝目但馬拯以申候、高城・財部へ大井宮内左衛門尉に

て申候、曾井へ丸田左近允にて申候、清武へハ彼使ニ
 曾井まで書狀認言傳候、本庄・木脇へ山下急介にて申

候、綾へ存覚にて申候、野尻・紙屋へハ洪水にて難成
 候間、綾へ書狀頼候て遣候、反錢までの事、穆佐・藏

岡・飯田へ野村甚介にて申候、細江・永峯へ山内采女
 佑にて申候、永峯へハ御番之事も申候、三城・守永へ

ハ、福富權五左衛門尉にて吉利殿まで申候、都於郡へ

ハ良泉坊にて申候、富田・穗北へ大塚右近將曹にて申

候、田野へ松山七左衛門尉にて申候也、満願寺御座候、
 茶湯会尺申候、閑談共也、諸所へ遣候使衆各被歸候、

皆同委承之由也、佐土原よりハ、反錢之事者かこしま
 にて御任被成候由也、番立之事ハ去年高瀬へ御番衆跡

まで被召置候間、一番ニハ難成被思召候、併遮而御任
 之由者無之候、使承候分者、遲御立可有様之意趣之由

物語也、此晩此方庭にて鞠也、
 一廿九日、如常、西方院庭にて此晩鞠也、過候て種と御
 振舞也、風呂などにて慰候、

一卅日、如常、△

20 「島津世録記」

一天正十三年乙酉春、六月廿日、定忠平主、以爲
 守護代、而後稱義弘云々、陣于花山、

使鎌田左京亮政虎・木脇刑部左衛門尉祐昌守其地、甲
 斐宗運之次子相模守、催阿蘇八千町之士卒、而八月十

日、攻陷花山、則政虎・祐昌其外三十餘人戰死也、
 義久主聞之、領數万之騎歩、赴八代之地、到閏八月十

一日、擊殺隈莊之凶徒、得首二百餘員也、同十三日、

攻陷甲佐・堅土田、義弘主魁諸軍登城也、於此戰平田新四郎被癩、始良新次郎戰死也、故同十四日夜、御船・木山・津守等委而去焉、同十六日、隈莊城主甲斐上總介且阿蘇惟前脫甲來焉、先是合志於吉松陣有隱謀、而今忽顯、則無所措手足、而降城謝其罪、以向薩摩來服矣、其後 義弘主九月下旬歸陣也、蓋高森有合心於豊後之業、故稻富新介長辰・阿蘇氏臣仁田水右衛門佐等至高森、欲得質人、不得却囚仁田水、然長辰漸免脫矣、乘其時、甲斐親乘・滿永宗甫亦畔 太守、津守城曾爲滿永本領、今也伊集院肥前守久春爲地頭守其城、忽窺久春之不在城時、而十二月十五日、陷津守城、夏聞薩摩、新納武藏守忠元率諸軍、翌年丙戌正月七日、發大口至御船、使市來下總守及忠元臣立本玄蕃允、運討其讎之策、坂無地遣忠元陪臣二人矣、邊新納四郎左衛門尉・有村隼人佑・園田丹後守其外步卒數多行向、誅伐謀逆之徒、而後同廿三日、欲陷高森之時、或曰、廿三日 貴久主之忌日也、不忍殺人屠城乎云云、忠元曰、夫 貴久主退逆臣之黨徒、舉忠士之貞良、于朝于暮勞心治三州者、非此主之功哉、當其忌日、誅伐逆徒、其靈威、助戰場必矣、何可忍之、則應其言、軍衆

奮出高森陷焉、

21 「忠元勲功記」

一天正十三酉三月、是方以前、嶋津出羽守忠明八代義天様守有久御子に大口三百五拾町、一所之地に被下置候時分、
兼刈大和守重續等、忠明之居城に押寄討取、其前年、
忠明之子次郎四郎明久を大嶋村に討取、兩靈を西原八幡と同社ニ奉崇爲有之由候処、段々奇瑞御座候由にて、
貫明様より忠元江被仰付、西原より神体被爲相分、此
月二日、大嶋村戰死之跡に奉崇移爲申由、則今之若宮
八幡ニ御座候、
一 同年八月、松齡様肥後へ御出陣、忠元も罷立、同十
一日、阿蘇簷下之隈庄ニ押寄及合戰、敵五百被討取、
同十三日、甲佐・堅志田之兩城に攻寄せ、抽戰功候処、
同十六日、隈莊城主甲斐上總介者勿論、矢部城主阿蘇
惟前迄も降服爲仕由、然處、其以前相叛キ罷在候合子
城之合子藏人親重も降參、如此肥後國中段々入御手候、
媒之初者、横嶋に加藤上野与申者致敵對砌、忠元何角
申論、大口に爲列歸置事有之、夫より漸々降參不仕者
無之様爲罷成由御座候、左候而、同九月、松齡様御

歸陣被爲在、忠元儀者在陣仕居候處、同十一月六日、

貫明様より御感狀被成下、此年三船地頭職も被仰付、

前文同様兼務仕、暫大口へ罷歸居候處、其比高森城内

と大友方ニ相付候事相知れ、稻留新助長辰・阿蘇役人

仁田水左衛門を人質爲可取置、高森へ差越、却而仁田

被捕得候故、長辰者漸爲遁歸由、且津守地頭伊集院肥

前守久春留守之隙を伺ひ、同十二月、津守城を爲乗取

事、爲申來由御座候、

22 「御文庫三番箱中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

就元服之儀、今度以使節丁嚙之段、喜悅不斜候、則厲懇

望候、然者馬一疋一月毛、印遣之候、寔補微慶計候、恐々

謹言、

「御譜二天正十三年秋ト朱カキ」

卯月十日

義久(花押)

賀惠九郎殿

23 「義久公御譜中」

「案文有之」

「本文書ハ二四号文書ト同文ニツキ省略ス」

24 「御文庫廿二番四卷中」

依久基若年之故、諸下知等御入魂之由、最珍重、堺目之

儀候条、倍賢慮之才覚、可爲肝要候、恐々、

卯月十日

本田讚岐入道殿

25 「義久公御譜中」

「寫有之」

「本文書ハ三三三号文書ト同文ニツキ省略ス」

26 「案文有之」

「本文書ハ三四号文書ト同文ニツキ省略ス」

27 「案文有之」

「本文書ハ三五号文書ト同文ニツキ省略ス」

「上書有之」

「天正十三年 貞方右衛門佐使之時 御返案字久方へ」

28 「中原爲兵衛藏」

「本文書ハ「旧記雜録後編」一三四九号文書ト同文ニツキ省略ス」

天正十三年四月廿四日、使町田出羽守・伊地知伯耆守、達上井伊勢守・鎌田出雲守・山田新介、三輩自日州到鹿兒島曰、去春以降令兵庫頭忠平移八代代乎我、掌國家裁判、忠平數反雖固辭、我強不止、是以隨我言矣、然則家老以下諸將從而可移彼地、各可言思慮之所及也、今日五島之宇久大和守差使節、貞方右衛門佐者也、述諸方屬于手裏之慶賀也、

天正十三年乙酉夏四月、太守義久公之有高命、島津圖書頭忠長・町田出羽守久倍・伊地知伯耆守、奉其命、達忠平曰、禪守護代於忠平也、然則移居肥後州八代、宜國家之爲裁判、聞此之言、迄固辭再三、而嚴命不敢以止、故不得已而隨 高命矣、補大任、則欲撰季夏之良辰、赴肥後州之八代、是以爲薩隅日士卒於五分、而使其一分、無間斷、肥後州警衛之定田賦也、

「口裏」
「天正十三年 卯月 柳澤殿下着」
「御譜 御判在之」
去年九月四日 御内書、二月十五日着降、謹而令頂戴候、殊御太刀一腰康次・御鞍一口作、重疊忝致拜領候、抑從上口懇望故、御入洛之御催最中候之哉、千秋万歲候、因茲一稜可致忠貞之段、被仰下候、遼遠相應之馳走、聊不可緩存候、隨而雖輕塵之儀候、御鷹一連・御馬三疋栗毛、黑遠馬、河原毛、同印、黃金百兩奉致進上候、以此等之旨、宜預披露候、恐々謹言、

「朱カキ」
天正十三年 卯月廿六日 義久(花押)

眞木嶋玄番頭殿(留光)(番)

一色駿河守殿(留秀)

「義久公御譜中、案文有之トアリ」

「口かき」
「天正十三年 卯月」
眞木嶋殿へ 御返札 御判在之
連々御無音罷過候之處、今度 御内書謹而令頂拜候、抑從上口懇望之故、御入洛之御企半候之哉、尤玆重奉存

「全卷中」

天正十三

柳澤殿へ

候、依夫可致忠勲之段、被仰下候、遠邦相當之儀、聊不可有疎懷候、每事御執合所仰候、仍打刀御丁寧之至候、次沈香二拾斤令進之候、寔表祝儀計候、恐々謹言、
「朱力キ」
「天正十三年」 卯月廿六日 義久(花押)

眞木嶋玄番頭殿 (番)

此之由、義久可然様御披露所仰候、恐々、

「御文庫廿二番箱四卷中」

「天正十三年、爲 上使柳澤殿下向之刻、自柳澤殿進上之書狀写 御返札乘有之」

「全卷中」

就豊州之儀、御懇切之上意、連々御雜話、殊更遮而芳札怡悅至極候、尤決其辻、今度雖可奉遂言上候、以時分次第可致内訴之条、左様之刻、公儀者不單是非候、至諸家調達之儀、所庶幾候、猶巨細者忠棟可申候、恐々、
「天正十三年」
 卯月

柳澤殿

到肥州表、去歲得勝利、過半属靜謐候、然處、爲此等之祝詞、使書・太刀・馬并種々到來、殊更先年之礼儀等、懇勲之段、玆重候、倍向後於無御疎遠者、春日大明神八幡大菩薩照覽、不可有別儀候、仍太刀一腰・鎧甲進之候、誠補嘉瑞計候、恐々謹言、
「天正十三年」
 卯月十三日 義久

宇久大和守殿

36 「御文庫廿二番箱四卷中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

厥后御無音罷過候之處、今度 御内書、忝令拜受候、抑從上口、以馳走 御入浴之御粧、急速候之哉、尤玆重奉存候、就夫可致忠節之段、蒙仰候、遠國相應之儀、聊不

可有疎懷候、以此謂御執合所希候、仍太刀一腰・鞆十懸御惴切之儀候、次乍輕微何々令進之候、謹表嘉瑞計候、恐々、

卯月

一色駿河守殿

「末紙」
「天正十三」
「一色殿へ」

37 「御文庫廿二番箱四卷中」 「義久公御譜中案又有之トアリ」

「御内書 御請案 老中、攝州」

去年九月四日之 御内書、今月六日、謹而頂戴仕候、殊

御太刀一腰 銘一・縮致拜領、悴家之面目、恐怖至極候、

抑御入洛之儀、可爲急速候之哉、千秋万歳奉存候、就夫

到義久一廉忠節之段、被仰出候、進退相應之儀、聊無疎

懷被存事候、仍雖爲輕少、生糸十斤・黄金十兩奉致進上

候、此等之趣、可然御披露所仰候、恐惶謹言、

「朱力本」
「天正十三年」卯月

眞木嶋殿

一色殿

38 「御文庫廿二番箱四卷中」 「義久公御譜中案又有之トアリ」

従上口、以御馳走、急度可爲 御入洛候之由、千秋万歳

奉存候、就夫到義久忠節之段、被仰出候、遼遠相應之儀、

不可被存怠惰候、仍被成下 御内書候、并御太刀一腰 助

宗・縮五端致頂戴、忝次第候、因茲黄金十兩令進上候、

宜預御披露事、奉頼候、殊自御兩所被五懸送給候、大慶

至極候、乍輕微沈香百兩・手火矢二丁進覽之候、聊表御

祝儀計候、恐惶、

「朱力本」
「天正十三年」卯月 日

一色殿

眞木嶋殿

眞木嶋殿

一色殿へ

老中
攝州 など返札案

39 「尚久一流系圖」

下野守久元之弟

頼幸

初立頼 又頼英 童名堯仁丸 三十郎 中務少輔

天正十三年乙酉四月廿四日誕生、母忠倍一腹、

敷根藤左衛門尉依無世子、而爲猶子、連續彼家者也、
寬永四年丁卯四月十日卒、年四十三、

40 「義久公御譜中」

天正十三年四月廿九日、招 上使柳澤殿、進饗應致宴安、
而後授 御教書之請也、今日從琉球使僧船到着矣、使僧
天王寺也、

天正十三年五月二日、 上使柳澤新右衛門尉殿歸京之首
途也、昇黃金百兩・馬三疋・鷹一連、因風雨經陸路、寄
一宿於加治木也、

天正十三年五月七日、從肥後州大野氏、注進曰、豊後軍
衆攻筑後州城島、防禦不怠挑戰之際、豊後軍敗、屠殺甲
兵二百許矣、由是引退、今也屯高良山也、田尻氏亦注進
件同事、無少違也、

同月八日、大雨、對面于琉球國使僧天王寺、祖庭和尚、勅書

本田下野守受之、置對面所牀上、貢物燒酒饗饗二・食籠
一赤地施花鳥之繪、有諸臺、紅花百斤・白絲十斤・織物三十端・絹子廿

端・蚤碧絲五十把・太平布百端也、次天王寺自己進物織
物十端・唐名香七種・唐墨二挺・方盆一枚・香盆一枚・

唐紙二百枚也、備三番點心、爲酒宴也、勅札開緘讀誦、

其文曰、

41 「上井伊勢守覺兼日帳有之」

承聞、近年如用霍去病、慶凶奴於臯蘭、下陳搏定屬猪之
天下於笑中、又不足比矣、殘黨歸服幕下不日乎、於此方
何大慶如焉哉、仍爲伸喜悅、差遣天王祖庭和尚者也、輕
微之士宜錄于別緒、恐懼不縷、

萬曆十二年甲申季冬廿有三日

「天正十二年ノ末ニ同日ノ一書アリ、參照スヘシ」

42

「御文庫廿二番箱四卷中」 「義久公御譜中ニ在リ 案文在加治木衆長谷
場傳左衛門トアリ」

天正十三乙酉
大覺寺殿江 宗著之便に
五月

對 御門跡樣、節々可得尊意処、遠國故厥後御音絕之至、
誠失本懷候、然者 御先師宇智院義昭大僧正就慮外之趣、
曩祖已來故障之儀候之条、御納受之御丹祈、別而奉憑候、
因茲雖輕塵候、生糸令献上之候、委細之段宗著申合候、
以此旨宜預披露候、恐々謹言、

「朱力キ」
「天正十三年」五月拾九日

義久

井関殿

於京都用要之儀、毎々相調之事、誼感悦之至候、自今以

後者、可爲披官之約諾、聊不可有愀易者也、謹言、

「御譜ニ朱カキ」
「天正十三年」五月

依懇望、右之御書被下、

宗普

「木紙」

天正十三五月

宗普へ 御書案

至龍造寺一和之儀、累年種実懇望候之處、其辻轉變之儀、

大半案中候喜、然者今度高木表へ一戰、不慮之勝利風聞

候之哉、使書怡悅候、猶右之鬱憤媒介候之歟、巨細年寄

可申達候、仍織筋二端來着、御慇懃之儀候、從是 何々進

之候、補祝詞計候、恐々、

五月廿二日

彦山

座主

天正拾三歲六月三日

賦何人連歌

面影の花よりさける煙哉

五月雨はるゝみねのうき雲

ふもと川行水とをく月すみて

あらしのすゑになひくかりか音

ややさむくゆふへなりぬる秋のそら

やとりとはんと道いそくなり

たちのほるけふりハほそき一村に

窓のうへなる松の木たかき

下くゝる水や夢路にひゝくらん

おくハのこれる雪の谷川

なかれ行氷もしはしたゝよひて

春の朝日のほのかなるかけ

淺みとりたてるかすみに風よはミ

おきわたしたる夢の白露

おりてみは散なんもおし小はき原

たゝすむくれの月のさやけさ

すゝしさをとむるかたの水すみて

あそふ船やハさしもかへらん

忠棟

義久

珠長

忠長

宗運

可丹

賀雲

久茂

忠盜

正信

久正

經宣

定親

久辰

篤和

増宗

重聰

爲阿

うら傳ひ外ハありとも難波かた

忠綱

わすれ行中の契の淺からて

爲阿

音をなきかハし鳥ぞ立行

忠秋

はてハ山としならん戀しき

忠綱

花の影こととふ袖も色くに

重元

今朝出るみやこの野への歸みに

忠秋

わきてをおもへ九重の春

忠棟

ねせりつみこしかたのはるけさ

義久

わかれ路の旅人いかに朝かすみ

義久

花の春たてハこゝろのいさなはれ

殊長

越なは山のさそふかからん

殊長

やとりさためぬてふの一つれ

忠長

たつねよるふもとの里のやすらひに

忠長

ぬる鳥のかすみのうちに音をたえて

忠棟

しはしもはれぬ夕立の雨

宗運

奥より山やくれかゝるらん

久辰

秋ちかくなりぬるころの風の音

可丹

さひしきハまた住なれぬ柴の庵

篤和

むしなきいつるかたのすゝしさ

賀雲

いたくなふきそ袖の秋風

久正

うたゝねハさめての後の月きよミ

久茂

みどり子をはこくむ露のさむしろに

宗運

笛ふくかけハ露もたまらず

忠益

のこるあつさや月にわするゝ

可丹

浪あらくなりてたゆたふ湊船

正信

ふくるまてきりのまかきにやすらひて

賀雲

磯の窓こすしほやみつらん

久正

よすかありとやしのふ小車

正信

獨たゝくちたる松のかたふきて

經宣

余所にのミみてハやまれぬ我おもひ

宗親

いつまで人ハ住しよもきふ

宗親

行てよ川のみねに住はや

珠長

たれにかもしらぬむかしをとひてまし

久辰

このころの雪いかはかりさむからし

經宣

こゝろにうとき文のことハリ

篤和

冬のそらにはくる鴈ぞなき

宗運

なそもかくおろそかにてハ生けん

増宗

つらゝハる小田のいなくきくちはてゝ

珠長

身をかこちつゝすこすおりく

重聰

下桶の水のかれくゝの音

篤和

山きはや里をかけたる道ならし

はなちて駒のかへるおりく

むつまじき袖かとはかり打つれて

いりあやおしき月の舞人

紅葉、のすこししくれてくる、日に

霧のとこえのその、まち、さ

むら鳥のさそふはふきハひまをなミ

明はなれぬる山のかたはら

川そひやくたす小船ハさほ取て

芦のまるやハひとり住らし

こゝろある友を求むるかたらひに

うへてもみはや花の色く

すゑの春おもひやるにハとをからて

けふ聞そむるうくひすのこゑ

うつし來て我宿りなる谷かくれ

ふけてくもらぬ月の下水

むら雨や送すてけん秋の風

露はらふまを袖のやすらひ

行道のしは草たかく茂りあひ

旅たちしよりあればつる里

義久

賀雲

久辰

忠棟

珠長

忠秋

忠溢

可丹

賀雲

珠長

義久

宗運

正信

忠棟

珠長

久正

忠長

重聰

増宗

宗運

忍ふるにたれかふることかたらまし

すきみに又も□たくまきく

心からたのしむ世とやみえぬらん

いやしかりしも人とならずや

かすくにつかふる道をならひにて

たかをすへ野のひろきみハリ場

あさりすて、行かたしらぬ田羈のこゑ

ひかたも浪の又さはききぬ

風をいたミ芦まのふねをひく袖に

露こほるれば月もこそちれ

おもひなをつ、みもあへぬ秋のくれ

われもしかどやつきにうかれん

みし夢の面影したふうつ、にて

わかれしころハとをきたらちね

なに、かハあらためて住宿ならん

のほるくら位のあさからぬ袖

おほうちやときをたかゑぬ衣くはり

一夜こえてやどふき□の春

さかつきをこゝろの花に汲そへて

ななき日をしもおしむ友なひ

篤和

可丹

經宣

珠長

爲阿

賀雲

義久

忠綱

久茂

宗運

正信

珠長

義久

宗運

忠棟

篤和

宗親

久辰

忠溢

鳥くのかすみのうちに啼かハシ

義久

あらしをきかぬ今日のしのゝめ

珠長

忠棟六 久正五 經宣四 義久八句 珠長十一

宗親四 忠長四 久辰五 宗運八 篤和六

可丹五 増宗三 賀雲六 重聰三 久茂三

爲阿三 忠益四 忠綱三 正信五 忠秋三

重元一

46 「義久公御譜中案文有之トアリ」

奉復

琉球國王殿下

茲承 貴國豊饒、尊候安佳、保文武之徳、夏禹王・殷湯王布禹湯之政、

至祝々々、時哉々々、抑如勸諭、近年六國属我治内、實

出于不意者也、竊按之、天運所致、而神明冥鑑也、以故

命天王視蒙祖庭和尚、所傳旨趣具以領之、特所頒賜璽珠

海貨感戴々々、何慶抗焉、聊爲述回禮之義、献微物表寸

丹衷備于別幅、誠惶誠恐謹白、

日本天正十三稔季夏

藤原義久

奉復 琉球國王殿下

47 「雜抄」

一天正十三年八月、木脇刑部左衛門祐昌・鎌田左京亮政

虎、肥後州花之山壘ニテ遂戰死、祐昌有辞世、

うつ敵とうたる、我ももろとも

憂世の夢を見はてけるかな

48 「正文在平田監物」

猶く此文箱之内ニ方々書狀御座候、御覽取候て御肝

要候、

秋・龍自忠棟御遣候書狀、直此方へ使持來候之間、即如

其方持せ申候、以先札令申候、肥前秋月之使僧者東禪寺

へ可被仰付候、自拙子前茂寶藏院にて申渡候、自然侘を

雖被申候、絶而可被仰、先秋月ニ被通、從夫龍へハ可被

參之由申せにて候、仍自入田方に貴殿書狀參候を、拙子

請取候間、此便此文箱之内相添申候、御返事候者、後便

之時、爰元迄可被遣候、慥可相届候、爲御存知候、恐惶

謹言、

六月十四日

忠元判

新納武藏守

『諏訪氏家藏』「義弘公御譜中ニ在リ」

〔義弘譜ニヨレバ「上井伊勢守ヨリ」トアリ〕

〔武庫様へ進上之文案〕

「天正拾三年六月十六日、上井右衛門尉を以、眞幸へ進献申候」

起請文

- 一 奉對 武庫様、連く曾不奉存疎懷、殊更 御家督可爲御相續之由、決定之上者、離親子兄弟之好、不可有無
- 二 忠勲之外事、

- 一世間萬一雖有轉變之儀、 武庫様任上慮、到 御子孫 茂、無渝易可奉致崇敬、如斯之時者、乍恐愚孫者、向後不可被思召捨事、

- 一 讒佞之者、若拙身上於有申掠条者、速被 仰聽、愚意亦可申披、隨厥左右御裁斷可奉存忝事、

右条く奉令違犯者、

「諸神名略」

起請文之事

一 御當家就相續、永く無變易可有入魂之由、以神文承候、

拙者儀者無申事候、到子と孫と茂、不可有別心之由、祝着無極候、縱世上轉變之儀雖有風聞、爲此方者、伊勢守方進退同到子孫茂、聊不可存疎意候、弥自今以後

之昵睦所希候、若此条於令違犯者、

上梵天帝釈四大天王、下堅牢地神、惣而日本國中大小神祇、殊眞幸院擁護白鳥六所權現 飯野鎮守一宮大明神 天滿大自在天神御部類眷屬、神罰冥罰可蒙身上者也、仍起請如件、

天正十三年六月十六日

兵庫頭

忠平(花押)

上井伊勢守殿

「上巴」
起請文

「御文庫廿二番箱四卷中」「義久公御譜中写有之トアリ」

「朱カキ」
「右衛門太夫殿神判写」

起請文

一 今度八城江御番之儀被仰付候、一節奉任 御意候、然者御座所江罷居候之時茂、嫉意讒言之事、氣遣候、況遠方於御番者、必定可有取沙汰候、萬一被聞食付儀候者、即刻被仰聞、御糺明本望候事、

一 去年以神載申上候之筋、雖不及申候、不可有相違候之

事、

一世上心遣之儀、到承付候者不勤、折節境目之御奉公御
侘可申上候事、

右条々若令違犯者、

〔御譜中天正十三ト朱カキ〕

52

〔御文庫廿二番箱四卷中〕「義久公御譜中案文有之トアリ」

〔天正十三年六月

御書草案

伊集院右衛門大夫殿へ〕

肥州八城表者、諸境目眼前之処、定番無難澁之段、寔禮
悦候、殊以神載、条々被顯心底、尤感要之至候、因茲或
人之嫉妬、或讒言等之時者、即糺明之儀、是又任懇望不
可致疎略事、春日八幡 天滿天神茂可有御照覽、仍爲
證跡染筆者也、恐々謹言、

〔朱カキ〕
天正十三年六月廿日

義久

伊集院右衛門大夫殿

53

〔上井日記〕

一 六月

朔日、看經等如常、衆中各被來候、參會申候、如例氷

也、明日月次連歌愚亭にて始候する談合共申候て、一

順・再返など拙宿にて仕候也、此日谷山志摩介かこし
まへ使ニ進上申候趣、八城御番立之事、先札之趣ニ任

せ諸所へ申渡候、并拙者宮崎衆同心申可罷立之由候、
尤可罷立之処、前日御方にて養性氣出合候、其草臥于

今然々なく候、炎天と申當時歩行難成候、併氣分之躰
打伏程にハ無之候、遮而拙者罷立候ハてハの儀に候ハ

すハ、御指置可目出之由申候、付而ハ宮崎衆又拙者人
數之事も、いつにても候へ私罷立候する節召烈候する

哉、又先々爰元にて名代立申候する哉、是又御校量次
第に候通也、此晚鞠など也、

一二日、從早朝連衆揃候、座躰主居滿願寺・大門坊・拙
者・長野談路守・敷祢又十郎・上井右衛門尉、客居西

方院・大乗坊・柏原周防介・宗賢・鎌田源左衛門尉・
野村大炊兵衛尉・鳥原四郎兵衛尉也、發句、月次始に

て候間、祝言ニ拙者仕候、

詠あかし八千世もさ、れ石の竹 乍斟酌類にと各承
候間、祝言計ニ申候也、連歌過候て酒宴など也、此日

平田狩野介殿久無沙汰被成候とて來儀候、拙者罷出、
御酒參會申候、御酒持せられ候、是又即賞翫仕候也、

一三日、毘沙門へ別而讀經等申候、拙宿風呂淋汗前鎌源にて候、然者種と馳走共也、各集居候て、盤之上・茶湯などにて閑談共也、

一四日、如常、此晚澁屋大夫下向仕候、佐土原より當所へ來候、今夜見參申候すれ共、定而路次くたひれたるへく候間、明日見參可申候由申候て使遣候、并調儀等もたせ候也、忝之由返事也、

一五日、如常、澁屋大夫召寄候、并先年より度と下候桂も同心也、是も同前ニ召寄候、即見參申候、松右衛門尉弓懸一具くれ候、御姫より扇子くれ候也、脇大夫・小鞆・太鞆打など隨身也、勿論与吉同心申候、種と会尺申候也、御酒之時唄など申候、然者、松右衛門尉父子へ二百疋宛遣候、同心衆四人ニ百疋つゝ遣候、御姫へ織筋一遣候也、御姫も父子來候、彼むすめへかたひら遣候也、此日各内海までと急候間送等申付候処、俄大雨にて候つる間、此日ハ扣留申候也、

一六日、澁屋大夫内海のことく送候也、此日海江田へ越候、木花へあまりく炎天難儀候間、參候て暫やすらひ候、種と会尺共也、從夫沈醉共仕候間、蘇山寺へ參候て此夜ハ留候、厩ニ二階をさせられ候、一段涼処に

て候間、是へと承候間此座に休居候、門田ニ指懸たる二階にて候間、折と稻葉音信秋風近様子、言語道断候、然者宗賢同心申候間、餘之事ニ申慰候、

忍あへず門田にかよふ秋風のそよめき登る樓の上かな　かく共申候て慰候、又端近く枕をうこかす様に涼しき風吹來候間、

近しとや枕うこかすあきの風　如此宗賢へ物語共申、今夜ハ明し候也、

一七日、早朝紫波洲城へ參候、恭安様種御会尺共也、拙者も御酒進上申候、御賞翫共也、此日暮・將暮などにて慰候也、此春馬追之時分かこしまへ長と逗留申候間、馬追不事成候而于今遅引候、然間明日馬追之由申付、苙之普請等彼是申調候也、

一八日、薬師へ別而看經等仕候、雨不艶降候間、今日馬追留候也、谷山志广介從鹿兒嶋夕罷歸候由申候て指出候、御返事、八城番立之儀ニ付申旨委被聞せ候、さてハ先日之養性氣于今然となく候哉、御番にハ罷立候ハす共、涯分養性肝要之由承候也、然者、宮崎衆又ハ拙者人衆之事もいつにても候へ、私罷立候する刻召烈候て可然候由承候也、　武庫様八城へ急度御發足たるへ

く候、然者御供之爲御番之由被仰候、養性最中に候ハ、無是非之由也、又大乗坊豊後へ御使僧ニ可被遣候、可申付之由也、又平田狩野介殿子息、御頭殿之由可申付之由也、即兩条共ニ申候也、

一九日、如常、此日中城くさニ御振付被成候也、

一十日、如常、

一十一日、從宮崎柏原殿・長野殿・野大・鎌源・上井右衛門尉越也、青嶋へ同船申終日慰候、水練などさせ候て見申候、又時く盤之上など也、此日玆阿弥佐土原之御障明候て、拙者屏風繪頼候間、宮崎へ越之由註進也、

一十二日、早朝より馬追ニ罷登候、様子如例年之、取駒一疋候、宮崎衆なと馬共被成候、網曳せ候、魚など棧敷へ持來候、各參相賞齎申候、諸人御樽など持來候て終日之慰也、此晚取駒乗せ候て見申候、彼馬蘇山寺預度之由候間、即預申候也、

一十三日、御崎寺可參之由候間、早朝參候、宮崎衆同心申候、御時御振舞也、種く会尺候、盤之上など也、御崎寺頃面白在所へ風呂建被成候、焼せられ候間それへ行候て入申候、彼風呂地水邊にて、當時之会尺言語道

断也、彼処にても宗賢なと碁被打候、又酒宴など也、此晚中之城にて各へ御振舞之由候間參候、種く御会尺共候、御くさ氣にて、我ハいつものことく御指出など無之候也、

一十四日、神九郎殿吾くへ振舞也、種く之會尺也、此晚各同心仕如宮崎可罷歸企にて候つれ共、皆く沈醉共仕候間、圓福寺へ參候て一宿仕候、無門関被遊候て御聽せ被成候、又御振舞なども種く也、終夜雜話共也、△一十五日、▽圓福寺御時被下候、種く御馳走共也、其過候て打立罷歸候処、若き人數なと川道遙可然之由申候間、色く之網など持來候て、各漁人ニ罷成候、從夫、

得魚筈者忘却候て酒宴など也、棧敷なと構候間良久慰居候、然処、△從中書公上原宮内少輔・高崎兵部少輔にて被仰候、其後御無沙汰之由也、一ヶ条御弓箭方角之儀共、御談合被成度おほされ候、さてハ吉利殿へ連く御無沙汰共候、豊州口之義者總州境目御地頭にて候条、御談合被聞せ候ハてハにて候、然者彼方へ來十七日御越可有候、拙者も彼方へ參候へ、其次を以御談合有度由也、菟角御意法第之由御返事申候也、▽棧敷にて彼兩使へも御酒參會申候、從夫打立宮崎へ歸着候也、

此朝同名右衛門尉 武庫様へ進上申候、趣者、先度拙者參上之砌、自今已後御奉公別義有間敷之段共細く御内義にて申上候、さてハ吉月吉日次第神載にて申上へき由申入候、然者、其神文進上申候、并今度 御供之由從鹿兒嶋被仰付候へ共、養性氣にて無其儀候由共分候也、

一十六日、罷歸候とて衆中なと被來候、玆阿父子拙宿へ被來候、則食振舞候する、内城へ然与候へと申候へ共、今日就中繪ニ隙入事候儀、成かたき由候、其爲計ニ雇申候条、無是非由申候也、此晚若衆中内城庭にて鞠也、

一十七日、払曉打立入野へ可參覚悟候處、從紫波洲崎兩使到來候、中之城御氣分以之外火急之由也、就其入野へハ柏原防州にて申分、拙者ハ鎌源同心にて紫波洲崎へ越候也、即懸付候、參着候て見申候へハ、寔く火急之御氣色也、内く・同子共皆く罷越候也、從夫少御氣色共能候て、物共被仰候也、

一十八日、中城御氣分少昨日より能候、然者、吾く子共召烈御崎へ物詣申候也、御崎寺、堂へ指出被成、御酒など也、

一十九日、一番鳥計打立、内く・子共なとハ宮崎のこと

く歸宅申候也、

一廿日、中城御氣分然くなく候へ共、大乘坊近日中豊後へ越山之由候間、左様之義可申調存候て、宮崎のことく罷歸候也、

一廿一日、罷歸候とて衆中なと被來候、諸所へ豊後行之人足なと申付候也、都於郡・穗北へ丸田左近將曹、清武へ原田大膳亮、曾井へ同名縫殿助也、從清武、一圓ニ成間敷由之返事也、

一廿二日、如常、若衆中被來候て暮・將暮なと也、此亥刻計紫波洲崎より使到來候、中城遠行被成由也、即迷惑之由申候て人指越候、

一廿三日、洪水いまた深候間、拙者越ハ不成候間、加治木但馬拯へ巨細申付指越候、此夜吉利殿より使者預候、中之城死去候、笑止之由也、明日就其加江田へ拙者罷越候歟、そと相待申候へ、先日中書より拙者へ被仰義共候、境目之事候間、加江田へ罷越候て暫者取乱候する間、餘く遅くたるへく候、いかにも払曉ニ御越有へき由也、さてハ御校量次第御越可待申之由、返事申候也、

一廿四日、早朝吉利殿御越被成候、境之義条と承候、拙

者意分共委申候也、一兩日中柏原周防介同心にて、佐

土原へ御參可有之由共也、此日未之刻計打立、しハす

崎へ越候、猶々川深候て廻候間、漸薄暮ニ彼方へ着候、

中城葬送之様躰、申時計ニ事果候由也、恭安様圓福寺

ニ御參被成候ニ中途にて參相候、此夜拙者も圓福寺へ

參候て靈前など拜し申候、此夜ハ蘇山寺へ留候、

一廿五日、追善ニ百韻於蘇山寺独吟仕候、發句・脇・第

三、

よる浪の露ちりのほる蓮かな

涼しく残るゆふたちの雲

日くらしのかたふくかたに聲添て 漸夜入時分百

韻成就候也、執筆治部大夫仕候也、此夜も蘇山寺へ留

候、

一廿六日、懷紙清書共させ候、恭安様御使預候、昨日追

善之百韻、炎天大義之由承候也、次ニ名号を句の上ニ

居たる御歌六首到來候、取く哀なる義共也、拙者難

默止存候て、名号を句ノ上ニ置、六首申候也、

なそもかく世に習ふらん別路のさらぬよしこそ今恨

なれ

むすふての水にうつろふ玉ならハひたしやせまし下

かひのつま

あはれ也古き枕を身にそへてたのむ夢さへミしか夜

の空

見せはやな我もおとらぬ聲立て袖にしくる、蟬のは

衣

誰も皆今の思ひハ有なめと世との契りやわきて悲し

き

ふたつなくいさめし物を吾も又おやの親ともへたて

さりしに

恭安様へ御返歌之ことく申候也、寔今の心まとひに、

取分きこえぬ事のミにて候、後晝く、

此晩打立候て、わち川原之谷口和泉拯まで歸申候也、

一廿七日、早朝、船より柏田までのほり候て懸而歸宿仕

候、此日より別火ニ打立候、然処ニ圓福寺より使預候、

別火之義、打續日廻あしく候、それ過候へ八月越ニ罷

成候間、人數あまたにて今日一日別火可然之由承候間、

其分ニ仕候也、

一廿八日、如常、御崎寺例講ニ御座候也、此日敷祢休世

齋、中城之義ニ付恭安へ御出被成候とて、此方へ御座

候也、

一廿九日、清武より使預候、春成殿也、豊後へ寺社家使之事先日申候、難成之由候つれ共、侘之義巨細承候也、返事、侘之義者可然候、先日ハ一圓ニ成ましき由承候条、納得不申候、是のミならず、度々申義御承引なく候、一向分別不申由返事申候也、此日此方風呂也、同名右衛門尉焼せられ候、若衆中各々被入候て慰也、種々会尺馳走共也、各沈醉共候、碁・將碁・鞠などにて終日慰也、

七月

一朔日、如常、衆中など各被來候、見參申候也、此日も終日若衆中被來候て閑談也、鞠・碁・將碁などにて慰也、

一二日、如常、此日も終日若衆中被來閑談共也、此晚阿之宿関右京亮殿へ行候て絵見申候、然者亭主振舞也、種々珍酒・珍肴共也、此日弓場普請アリ、

一三日、如常、此日屏風之絵成就候、阿阿持せ被來候、一段見事無申計候、阿阿子息弥七方、鐘（鐘）之絵始而書候とて預候也、此晚御酒阿阿へ寄合候也、

一四日、如常、本田治部少輔殿被來候、久無沙汰之由也、御酒預候也、此日、此方風呂焼前柏原周防介殿にて候、

種々之儀共也、從都於郡大脇定庵越候、ケ様之衆も寄合酒宴共也、時々盤之上共也、此晚從有方驚到來候間、各々寄合候、數称休世齋・本治・定庵・阿阿父子・関右、此衆也、本治持せの時酌共候て、深行まで酒宴共也、

一五日、掃地・普請させ候也、阿阿歸宅候、此間辛勞候祝礼とて阿阿へ銀子五十兩、弥七方へ袷表一遣候、祝着之由共也、

此日内々より拙者へ御酒振舞也、座中之衆、休世齋定庵・兼源・柏周・長談・関右・猿大・野大・敷又・上右、此衆欵、種々之儀共也、珍酒・珍肴共見來候、

一廿六日、此早朝休世齋歸被成、此日満願寺にて、月次去月延候間興行候、

にこらしのころろハ清き蓮かな 満願寺玄惠

むかへハす、し月のした水 定庵

暮わたる橋のこなたに駒留て 覺兼

終日御馳走共也、此日吉利殿より使者預候、其後御無沙汰候、何条慰共候哉之由也、次ニ御番立之事申候、必來月者三城へ移被成候する御校量候、然者御侘之由也、御返事、當時何たる慰など無之候、併定庵頃被來

候間、連歌時く興行共候由申候也、御番立之事先日書狀にて其由承候条、昨日鹿兒嶋へ書狀にて申上候、其御返事到來次第、委可申理之由申候也、

一七日、兵具等虫干如例年、書物等見明め、虫干などさせ候、將亦馬ノ血出せ見申候也、此日江田之大宮司綱曳せ候て見せ候する由申候候、定庵など其外衆中五六人同心申候て罷下候、魚多候て慰共候て、酒宴など也、

一八日、大宮司申事に、定庵など同心申候間、連歌面八句計なり共法樂大望之由申候也、さてハ定庵發句と頻ニ申て候へ共、法樂と候ま、拙者祝言ニ申候て可然之由各承候条、難默止候て、

秋ハまた青木か原のなかめかな 覚兼

如此申候、住吉法樂に相叶候由など定庵當時之会尺也、種と馳走共也、連歌四十四句事果候て罷歸候処、海藏坊可立寄之由候て其分候、種と会尺共也、庭前の吹上之白洲ニ磯撫子一本盛にて言語道断面白候候、夕花下ニふせらん事を敷て、

かハさねと床なつかしき枕哉花のあたりにねしと思へは

如此共申候へハ、定庵其外各歌など被讀候て酒宴なども、漸薄暮ニ及歸宿申候也、此日花園へ、豊後御使之義石神甚兵衛尉にて申候也、

一九日如常、定庵へ御酒寄合候也、吉利殿より使預候、當時慰ニ折と稽故連歌興行之由被聞せ候、いつ比たるへく候哉、來儀候て合せられ度おほさる、由也、さてハ其分に候哉、無御隔心承候、令祝着候、明日西方院にて一折興行候、入御候て可被合せ事可目出由申候也、花園被來候、昨日豊符へ御使之由候、尤可任御意候へ共、痔病出合散と之躰候、居ながら左様之御侘等候へハ、正表ニ相似候間、様躰見せ候する由候て被來候也、不及是非由申候て指置申候、鑱而鎌田筑後守にて鎌田雲州へ申候、從鹿兒嶋一昨日御狀到來候、大乗坊豊後へ御使僧相定候処、俄ニ惡瘡出來候故不罷成候、然者花園又ハ金乘坊兩人之間申届、急と御意趣承ニかこしまへ可被參之由候、花園田數増にて候間、先と申付候処、當病故難成之通被申候、さてハ其方金乘坊へ早と被仰付候て可然之由申候也、此日、此方風呂関右京亮殿燒前にて、種と馳走共候也、終日盤之上などにて慰候也、又明日之連歌一順共仕候也、

一十日、早旦爲連歌西方院へ參候、吉利殿も御出也、終日馳走共也、

一十一日、爪生野八郎左衛門尉処にて、吉利殿御歸之道便にて候間、拙者百韻興行申候、發句總州、御斟酌候つれ共頻と申候間、被成候、

置露の玉ゆら絶ね萩(萩)の聲

忠澄

虫かと計聞そむる暮

覚兼

此日金乗坊被來候て、豊後御使僧難成之由也、御急用之由候処ニ、昨日此方へ被來候ハて遅く慮外之由申候也、種々六ヶ敷御侘共被申候、菟角鹿兒嶋へ被參候て御侘專一候、左候ハ、御侘立候ハ、不及申候、自然御侘きこしめしわかれす候ハ、驪而御意趣被承可被罷歸候、彼是爰元にて何ヶ度御侘候共、拙者一人にて承分候とハ難申候、是非以鹿へ祇候肝要之由頻申候也、さてハ罷歸、鎌雲へ談合候て、又く巨細可申由候て被歸候也、此晚連歌事果、酒宴共候て、誹諧など良久被成、明朝無余儀御隙入事候とて、總州歸宅被成候、吾々ハ八郎左衛門尉処へ留候也、

一十二日、定庵如都於郡被歸候也、吾々へ八郎左衛門尉會尺仕候、種々之儀也、壽鑿与申立花仕候人泉より被

來候、是も御酒寄合候也、立花一瓶見申候、池坊舍弟師殿弟子之由物語共也、此日城のことく罷歸候処ニ、鎌雲より使鹿屋權介、竹案にて被追付候、藥師堂にて意趣承候、金乗坊豊後御使之事頻ニ難成被存候、鹿兒嶋へ被參候て御侘之由拙者申候へ共、御同前之儀にて候間、是非爰元にて拙者可承分之由也、尤左も候すれ共、相應之人を鹿より御覽し被限被仰付候処、拙者指置申候とハ難申候、昨日其仁へ如申候、順逆鹿へ被參候ハてハ事終ましき由申候也、使驪而被歸候、大門坊堂へ御酒被持來候て、若衆達同心にて良久酒宴共也、

一十三日、払曉財部へ野村甚介遣候、趣者、昨日日本野州・平田濃州より御狀到來候、鎌田か名字今年居頭役之義、先刻被仰候、然ニ今年にてハ無之由候歎、併川上殿御日記にハ當年と見え候、然間是非共今年御閉目肝要候、殊更急々之義候、別名字衆などへハ被仰付す候俣、無吳義御奉公專一之由候、此分委申届之由申候也、此朝壽監之花一瓶所望申候て見申候、此日此方風呂燒前長山兵部少輔殿にて候、種々馳走共也、吉利殿より使預候、此一兩日者御越被成候、連歌一二百韻被聞せ候、祝着之由也、次二者先日面を以も承候御番立

之事、御侘ニおほされ候、鹿へ拙者前より申渡候て頼被成之由也、次ニ者△羽柴筑州人數四國へ打渡、七八百も亡候由、賣買人傳ニ聞え候由、承候也、又甲斐宗運死去之事、山中傳ニ被聞せ候、必定之由申候、然共又武略ニ如此申候など、も申者候、併死候事、必定と聞え候、可然之由也、▽金乗坊被來候、豊後御使之義、類ニかこしまへ參候て御侘之由拙者申候、爰元も鹿も同前候間、只此方へ侘申候段、又々被申候、然共、是非以鹿へ被參候て可然之由申候条、領掌也、さてハ曳付之一通之由被申候、拙者使を相添候する由申候也、從夫見參申御酒寄合候、爪過分(爪)くれられ候、左様之寄合候也、從總州も、見來候とて爪給候也、

一十四日、野村甚介、從財部夜前歸候とて來候、鎌筑居頭役之事不紛今年にてハ候ハぬ由先度承候キ、然共名字中へ談合候て、又々今年類ニとか承候すらんとおほされ、都於郡又ハ諸所名字衆へ談合共候つれ共、指合事多々候て、漸一兩人こそ候へ、其分にてハ不罷成事候間、五日已前鹿兒嶋へも此由申上候、定而今明日にハ可相聞候由之返事也、鎌田筑州より書狀來候、就居頭役之義、當所へ被居候鎌田筑後守へ早々可申付事頼

之由也、即申付候、從鹿兒嶋、高原傳ニ書狀預候、趣者、拙者御祭礼ニ乘馬にて御供之由也、片便宜と申、又者一兩日中使節を以可申分覚悟候間、不能御報候、此晚衆中子息達踊共被成候、見物申候也、△

一十五日、▽衆中各被來候、御酒參會候、壽監すなのものあいしらハれ候、見物申候也、此日柏田町より踊來候、見物申候也、穆佐へ使にて、御祭礼御供ニ御祇候之由申候、并乘馬たるへき由申候也、從鹿兒嶋よりも一兩日前被承成候、其心得なきる、由返事也、△明朝長野談州かこ嶋へ使ニ進上申候、此晚意趣申候也、衆數、御祭礼御供當年者無余儀指合にて候間、不及是非事、豊後御使僧之事付故実等之事、御番立之事并御侘衆之事、四國說之事、甲斐宗運滅却之事共也、

一十六日、如常、八城より忠長・忠棟御兩処より書狀預候、今月三日甲斐宗運死去候、就夫從阿蘇家も申來事候、又者宇土殿取成を以限庄可差出之由申候へ共、御遠慮共被成事候て未落着候、自然人數入事候ハ、註進可被成候、早々可馳續由也、又ハ二番衆之所々へ無油断可申之義共也、▽此日長野談路守かこ嶋へ使者ニ上候、御祭礼御供たるへき由承候へとも、當年指合事候

間、罷成ましき由申候、豊後御使僧金乗坊之事、就夫丸之等之事、四國説之事、南林寺作之事、此等之条と申上候也、

一十七日、如常、八城へ 武庫様御滞在候、其外忠長・

忠棟へ御用之儀共候間、使僧進上可申覚悟候て、怡光坊へ申付候也、此晩的射初候、悴者共計也、祝言とて御酒にて候、

一十八日、觀音へ別而祈念申候、城之草払させ候て見申候、岸切せ候処も候、然者已上普請也、

一十九日、此日も草払、昨日一日にハ不事成候間、普請させ候て申候、此日風呂野村大炊兵衛尉殿也、種と馳走共候、壽監立花共候也、

一廿日、如常、谷山志介爪生野天神之弓場にて弓之事企候間、罷下候、衆中十人計同心申候、種と馳走共也、此晩弓場近処へ留候、

一廿一日、亭主会尺申候、種と奔走共也、此晩西方院庭にて鞠蹴候、非時御振舞也、酒宴共也、風呂焼せられ候て、懇志之会尺被成候也、

一廿二日、如常、長野泷路守かこしまより被歸候、豊後御使僧金乗坊へ被仰定由也、吉利殿此度御番立之事、

三城へ就移之儀御侘之由、直ニ從彼方も使節にて御侘候、尤にて候間御指置被成之由也、四國説、猶と委承候て可申上之由共也、

一廿三日、此方之風呂加治木但馬拯焼前にて、種と馳走申候、終日慰候也、

一廿四日、地藏菩薩別而看經仕候、壽監今日歸られ候、若衆達十人計此間立花稽故共被仕候也、拙者も遙と爰元へ堪忍被仕候間、引物等遣候也、

一廿五日、早旦より天神へ別而誦經共仕候也、此日かこ嶋御祭礼之御供ニ各被參候、猿渡大炊助殿・敷祢越中守殿・野村大炊兵衛尉殿・長山兵部少輔殿・弓削甲斐介殿・野村右近將監殿・堀四郎左衛門尉殿・関治部少輔殿、此衆也、此晩大門坊庭にて鞠也、種と会尺共候、閑談共申候て、夜深候て歸候、

一廿六日、如常、此日若衆中被來、盤之上にて、終日慰也、△

一廿七日、怡光從八城歸候、遠方まで使僧進上申候とて御祝着之由 武庫様被仰候也、忠長・忠棟よりも一と返事承也、來月中三舟表秋作可被難候、然者日州衆同心申候て拙者可罷立候、追而巨細日限等者從眞幸御註

55

「義久公御譜中」

天正十三年七月十三日、吉利下總守傳上井伊勢守曰、(商)

進可有之候、先々支度申候て可相待之由也、
一廿八日、荒神へ別而看經申候、例講ニ御崎寺御越也、
次ニ内々此五日氣分惱候間、爲祈禱觀音經百卷讀せ申
候、竹筵衆なと被相加候也、

一廿九日、如常、飯野へ八朔爲御祝言、和田刑部左衛門
尉進上申候、△

54

「御文庫廿二番箱四卷中」 「義久公御譜中案文有之トアリ」

爲今歳之至祝、御使節尤珍重候、殊至拙者、芳書并太刀
・鞆預御懇意候、畏悅此事情、然者過春之比、就弓箭之
行、被差出兩使候、其筋聊無油断候、因茲忠平去月已來
在八城之一着候、倍被遂御熟談、諸口御才覚之儀、不申
及候、從爰元茂不可有疎遠候、仍任見來太刀一腰・鷲羽
一尻令進覽之候、寔補嘉瑞計候、恐々謹言、
〔朱力キ〕
天正十三年七月十二日
(本田)
親貞

秋月殿參

御報

57

「御文庫廿二番箱四卷中」

「天正十三年七月琉球三司官へ自老中返札草案」

賣人有言曰、羽柴筑前守殿、渡軍衆於四國挑鬪之際、羽
柴殿軍敗、屠殺者七八百云云、又從山中有傳達、甲斐宗
運病死必定也、未知爲謀略乎、
天正十三年七月十六日、島津圖書頭忠長・伊集院右衛門
大夫忠棟、從八代注進曰、今日三日、甲斐宗運死去、因
茲阿蘇家有言、又宇土氏以奔走、隈莊某欲出頭、然而疑
心滿腹、以未落著、若有軍衆所望者、可獻捷書也、

56

「在御文庫」

茲承貴國豐饒安佳誠、全文武之道、布禹湯之政、惟德惟
馨、至祝々、抑如來諭、近年隣邦不意屬我治内畢、竊
按之、天受而非人力欵、故命天王祖庭和尚、遠傳寶簡、
何抗焉乎、聊爲述回禮、獻微物、表寸丹、冀備于別幅、
猶永々連綿和通之儀、庶幾者也、誠恐不宣、
天正拾參曆乙孟秋十八日 修理太夫義久 〔御判ナシ〕

進上 中山王

「御文庫三番箱中ニ有リ、御譜中ニナシ」

「薩州家義虎譜中」

薩摩守義虎

天正十三年乙酉七月廿五日卒、法號大通元廣庵主、

女子

巽伯耆守妻、母川上上野守忠克女也、

女子

飯島小川某妻、

忠繼

謹上 琉球國三司官

貴國倍康寧之儀、當邦以同懷々々、抑六州之凶徒、捨累年之濫吹、屬幕下之衆、尊卑之群參湛々無寸暇謂、且者天道、且者彼得軍德故欵、因茲今度天王祖庭和尙遙凌蒼海、船涉之段、寔膠漆之旧約、無相違者也、若又至向後爲逆務者、球与薩不意思恨可有之事案中候、心底不指殘之驗如此候、然者蚤碧糸廿五把・太平布五十端 御丁恟之至候、從是白麻 三十束 進覽候、聊補空書計候、恐惶謹言、

天正拾三年七月十八日

(本庄)

下野守親貞

(平田) 美濃守光宗

(伊集院)

右衛門太夫忠棟(花押)

初忠豊 號三葉 東市正 左近大夫 母川上上野守忠克女也、

領水引、居住于當所矣、

有八幡大菩薩靈夢之得告、而後號三葉也、

元和七年十二月十一日死、

59 「義久公御譜中」

天正十三年八月八日、島津中務太輔家久遣使者於宮崎、達上井伊勢守曰、傳稱大友氏運籌策、進甲冑於高知尾三多伊殿、贈冑於甲斐長門守、其外贈兵器於彼此將士、著陣於縣之時節、爲欲合力之無違意也、匪啻高知尾、諸方計策最中也、

天正十三年八月十日、島津中務太輔家久傳上井伊勢守曰、去渡阿波・讚岐兩所於羽柴殿將、又長宗我部氏爲和平矣、去七日、聞于細島云云、又從山中有注進、大友氏彌運計策於三多井殿・甲斐長門守等、自薩摩至阿蘇家、待及一戰之佳期、可發向日向口也、又羽柴殿使菊田氏渡豊後、昇金箱一於大友氏、預置今十一箱於豊後、卽如四國遂歸帆矣、夫金未知何用也、同日、肥後州花之山壘、先是天正十一年十月廿八日、相

修築之、使木脇刑部左衛門尉祐昌爲守將、其外警衛之士代入守彼壘、鎌田左京亮政虎爲警衛、到其地、及晚景宿花山城外、有甲斐宗運二子之稱相模守者、催阿蘇八千町士卒來、今夜圍花山、已攻責、政虎單騎通敵軍中、得入城中、防禦不怠、然而比我之騎步於敵軍、則以天地懸隔也、由是不得長支、祐昌・政虎以下勇士三十餘人共遂戰死、壘亦陷畢、祐昌有辭世曰、

「軍記有之」

うつ敵とうたる、我ももろともに

憂世の夢を見はてけるかな

天正十三年八月廿日、遣成覺房、差日州宮崎、達上井伊勢守曰、自京都有內通事、羽柴殿四國渡海之奧旨、有志于我領國、且復有計策書簡已下帶下者、然則與家久爲密談、必可捕捉、而後達佐土原、次往縣、所以傳達也、
天正十三年八月廿四日、島津中務大輔家久・上井伊勢守覺兼以下往縣、與土持彈正忠俱、爲諸方計策評議、留滯之際、同廿七日、右松備後守有言曰、去年以降、運計策於山中、有同心者廿七八人、頃遣一价、問兼約同否、則曰、予曹何變兼約乎、此節有及一道者、可致忠功、若迄猶豫、則自今以後可爲仇敵、其故如何者、大友氏使柴田

治右衛門・小田原氏差高知尾、數日逗留運謀略、而其約既成歸國矣、來月十二日十三日、再來于山中、催軍衆可發向三城、塩見・門川、日知尾也云爾、然則已等少寡、而得背山中衆多之列乎、予熟念之、及此之時、發軍衆及一戰、則田代・字名間、殆乎可入手裡歟、

天正十三年八月廿九日、發軍衆於肥後州豐田口、屠殺強敵六十三人也、
既禪守護職於兵庫頭忠平、以故自今以後肥筑以下諸所、細大大半記忠平譜中也、

60 「義弘公御譜中」

天正十三年乙酉八月十日、阿蘇氏之旗下甲斐入道宗運之次男相模守催阿蘇領八千町之士卒來、攻我之花山壘、地頭木脇刑部左衛門尉祐昌・守將鎌田左京亮政虎運武略振猛威、防禦敢以雖曰不爲怠慢、敵兵衆多、我之士卒少寡、是以不得支、而遂三十餘輩戰死、而壘亦陷者也、

天正十三年八月十日、欲襲肥後州隈莊城、引率於大軍、進發於八代、今夜軍衆宿于小野・森山・高津賀・豐福之地、忠平寄一宿於小川也、同十一日、早且進歩兵於城下、敵兵出城門、振威退我兵者孔以急也、丁此之時、我將等

窺佳期乘其變、指揮衆兵、各向敵兵、盡筋力以競戰之際、敵軍敗走、以斬獲二百餘員、我軍中戰死者、只數根源六也、高城雅樂助被傷矣、勝吐氣川田駿河守義明、勸請吐氣伊集院三河守役焉、爰甲斐宗運之二男林氏某、有我軍中、俾渠所獲看敵首、其中有甲斐治部・同姓帶刀首、二人共隈莊有司也云尔、丁此之時、三船敵兵爭前馳來、殆乎四千許屯向之原野矣、我之輕銳士卒曰、馳向彼敵較勝一戰、然而未見得其機變、且復將向日暮、以故強所制止也、其夜又宿小川也、

同十二日、留小川爲評議曰、昨日三船敵兵以夕陽之難伸不戰、而各引退于左右矣、明日發我之軍、則念渠亦發出乎、臨其時、乘佳機、不可不致一戰、問日時是非於川田氏、川田氏報曰、明日以後善往惡來、敢以勿企鬪戰云尔、天正十三年八月廿二日、發於飯野赴於八代矣、是亦爲肥後州裁判也、

天正十三年閏八月十三日、早且忠平率近居之騎步、登法連寺之尾、見陣營之地、輕銳士卒潛進堅志田城邊、已爲放火、未及評議、雖楚忽之爲放火、今更不能制止也、不得已、而上井伊勢守覺兼・新納武藏守忠元、到于響之原、則步卒等又過堅志田、進于甲佐之壘、片時陷之、得敵首

者數百、各持參所斬獲之首、其中宮崎之士鎌田源左衛門尉・柏原周防介・金丸主馬首・吉田外記及上井伊勢守之加治木雅樂臣助討二人也等、其外不遑記之也、其後島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟、馳到覺兼・忠元之所屯、丁此之時、所陷甲佐壘之勇士等曰、堅志田萩之尾椿攻實之、則忽以可陷乎、聞其言各同之、而即攻寄城下、于時平田新四郎打太刀被傷也、諸士卒競進矣、敵亦防禦實以強矣、然而不屑責入本城、與強敵競戰、被傷者多矣、然而忽以塵之切捨、而不記其員數、諸將入城中警衛堅固也、

天正十三年閏八月十四日、到于堅志田城麓、今日惡日故忠平不登城上、昨日敵首少拾集、俾伊集院三河守祝勝吐氣於堅志田麓也、

同十五日、率梅北宮內左衛門尉國兼只己之步卒窺彼此、自其封疆差一价曰、有三船城既委謂敵軍退散者、速發出我之軍者可乎、由此諸軍先我到于三船、忠平乘夜暗入于三船矣、今日島津圖書頭忠長・伊集院右衛門大夫忠棟・上井伊勢守覺兼進乎隈莊近邊、差使僧於夫城曰、三船已下諸城悉以入乎我手裏矣、唯汝雖曰暫支、何長得敵對於我乎、不如速出質降旗下保露命、是長策也、

天正十三年閏八月十六日、隈莊城主應昨日忠長等之所言、

今晚出質請和、從田代亦質人來格也、

天正十三年閏八月十七日、小代氏爲據禮詞來進矣、

同月十八日、城入道一要爲名代、出田助九郎一要子也、參上、

同月十九日、八代莊嚴寺歸矢部阿蘇氏居城也、來、而反命曰、

阿蘇氏雖爲當敵、依崇仰阿蘇神之故、當家亦有措其憤止

干戈之命、於阿蘇氏何幸如之乎、即俾甲斐美作入道爲質

以來也、

天正十三年閏八月廿一日、隈部但馬守親泰來進、伸禮詞

以太刀一腰・織筋一・黃金十兩、少焉進盛膳、旨酒數巡

之後座席雜話之際、親泰有言曰、率隈部一手之兵、近日

向小國爲一戰、可致無二忠節云尔、忠平已下候當座之族

聞此言曰、如斯之企、實心服之所致也、

此日、令川田駿河守義明祝泰平吐氣、義明之莊東者、著

鎧加袍、掛結袷及守、如恆例、於庭上發三三九聲、事

終而召義明於座席、祝三獻不及諸將也、其後諸士等太刀

持參、匪啻故舊之臣、隈部氏・赤星氏・志岐氏・上津浦

氏・天草氏亦偕持參也、

天正十三年閏八月廿二日、合志藏人親重使同姓對馬守達

勝利祝言也、老父宣頓自參曰、愚息親重嗜酒不止、屢爲

醉狂招人誹矣、然而莫蔽子惡而尤人言之情、伏冀後來

垂愛於宣頓及孫子云云、

天正十三年閏八月廿三日、遣龍造寺政家、裁誓紙之案、

其案記左、

61 「案文有之」

〔本文書八一五号文書ト同文ニツキ省略ス〕

〔朱カキ〕

「天正十三年閏八月廿三日」

62 「義弘公御譜中」

天正十三年閏八月廿六日、田代之土宗典父子已下五人來

見、持參甲冑也、

同月廿七日、矢部阿蘇氏居所也、之質五人來矣、各有司之子也、

天正十三年閏八月廿九日、小代下總守使一价述勝利慶賀、

持參太刀・馬也、

同日、島津中務太輔家久使者三原宮内少輔、從田代直經

矢部、而來八代曰、家久向田代、山中三ヶ所入手裏矣、

高知尾三田井氏亦曰、近日出質人屬旗下、然而未知實否

云云、我報曰、山中三ヶ所入手裏幸之至也、且復高知尾

一圓欲屬旗下、運籌策有此時矣、

天正十三年乙酉、從于兵庫頭忠平主、在于肥後八代之際、閏八月十一日、催大軍襲隈莊得勝利、斬獲於敵者殆二百也、同十三日、欲構陣於法連寺之尾、于時輕銳之士潛進于堅志田之麓、放火村舍、由是上井伊勢守・新納武藏守等增其勢到于響之原、則步卒等過堅志田破却甲佐壘、屠殺數百之敵、故忠長發於法連寺之尾、增其勢乘勝各勇進、又攻堅志田下栴萩之尾、而匪甞破之、堅志田亦陷之、而殺戮數多之敵、悉以切捨、而不能記焉、即入城中矣、然而不計得勝利、乘敵城、以各無衣食之備間、賞輕薄之酒肴、只數鎧之袖、待東方之將白耳、翌日、集拾敵首、唱凱歌於堅志田之麓、

同十五日、梅北宮內左衛門尉國兼、自卒引五六十人窺三船城、則敵軍既棄城而去矣、見之則差价使曰、三船之敵軍有退散之聞、各速到于其地可警衛焉、即軍衆赴三船、丁此之時、與伊集院右衛門大輔・上井伊勢守偕謀、差使僧於隈莊曰、三船已下諸所悉入我之手裏、今也唯隈莊何敵于我乎、不如速出所質全生命、由是同十六日之晚景出質人、自田代亦出質者也、

天正十三年乙酉之秋、忠平主得守護職之讓、征于肥後・筑後、有軍務之功勞、家久不往、而欲入高知尾於手裡、其故何者、大友氏先是天正六年至此之時、運謀略而不止、故高知尾屬大友氏者、過大半矣、不肯島津氏者、唯田代城主甲斐右京亮耳、徒在我國非可徬徨之時、是以家久及不往肥筑諸將士卒悉催之、而赴高知尾先入田代、究隨否之實、而先陷佐鹽兵部少輔之石櫃城、次陷甲斐長門守之小崎城、而後餘黨皆出質屬旗下焉、九月上旬、使吉田右衛門佐・高崎越前守達高知尾之入手裡、而後所許山中之地頭職於甲斐右京亮也、

同十三年乙酉閏八月、薩隅日之軍勢發向于肥後國、同十一日、犯於隈庄而有勝利、斬獲殆可二百、同十三日、陷堅志田城之時、忠虎抽粉骨者也、

天正十三年乙酉八月十三日、肥後國陷堅田城、時規久討敵一人、郎從牧之瀨筑前守・長田筑前守・緒方仲右衛門

尉等、各討敵一人充、又川添惣右衛門尉者、進出規久之
前蒙疵也、

67 「樺山權左衛門久高譜中」

天正十三年乙酉八月十三日、肥後州甲佐・堅田之陷兩城、
于時甲佐勇軍六十余輩、進出於城門爲防禦、樺山大藏後
道稱、爲太刀初討殺一人、又強敵田中軍兵衛・森山主計
一溪、求麻新城、言姓名於高聲發出、一人久高、一人郎從神崎大
地頭云云、藏兵衛正廣、所以斬首也、甲佐者未之初刻、堅田者酉時
陷畢、其日久高得敵首者三也、

68 天正十三年乙酉

八月十日、鎌田左京亮政虎肥後花山に城守し、三船の甲斐相
模守親乘か來攻るを拒て戰死、年
二十三、木脇刑部左衛門祐昌・西俣七郎左衛門祐昌に從
軍死す、
下同し、村山越中・村山源太・鎌田與兵衛尉政由政虎與力にて同
しく死之、凡三
十餘、高野助次郎三舟にて戰死と
あり、此に歎考、

十八日、矢部兵部左衛門長野方を攻らる
に戰死とあり、
肥後隈庄の板
城戸にて戰死、

閏八月十一日、敷根源六堅志田城を攻らる時、大手の城戸に
て戰死、年十六、或十八ともあり、
深創を蒙り大河平に
回て死、年七十四、中村喜兵衛光義・大河平甚右衛門隆貞

野崎掃部介重通北郷忠
虎臣、

十二月廿五日、仁田水左衛門太夫十一年に載す、高森
城戰死、是非考を俟、

此年須藤若狹頭秀清・河崎縫殿介或作河島、肥後岩屋に戰
死と、以上二人を記せり、

筑後の須藤采女頭若狹と
同人歟、

69 「忠元譜中」

十三年乙酉秋、從 松齡公師于肥後、八月伐阿蘇氏、十
一日、戰于隈莊大破其師、十三日、進攻甲佐、又攻堅志
田皆陷之、阿蘇聽 命、九月歸自肥後、十月五日、忠元
遣入田宗和書使歸順我藩、十一月朔日、又遣盟載、六日、
公賜忠元書褒軍功也、八日、甲斐長門入道宗攝・興呂木
新左衛門武富・馬原右近太夫重昌・宗和盟皆降 公也、
十二月九日、公弟家久遣宗和書、十三日、龍山公使
古川主膳入道宗忍來賀、松齡公承家督、因是賜忠元書、
進藤筑後守長治亦贈忠元書、

70

「上井日記」
▽天正十三乙酉
八月

一朔日、如恆例、衆中各礼ニ被來候、酒肴等預衆も候、
任舊例御酒寄合候也、寺社家衆同前、茶・帚・雜紙な

と被持來候也、福永駿河守殿より使預候、弓一張預候也、野村賀加^{（賀）}守殿より使、御酒・箒預候、福永備後守殿より使、雜紙持せ也、野村安房介殿より使、雜紙・さし繩預候也、此日城内之衆へ久無沙汰申候間、今日之礼彼是ニ行候、関右京亮殿へ在合候砌、金乗坊豊後御使僧之義、堅被仰付候間領掌候、諸篇拙者頼之由共也、御酒寄合候てかへし候、従夫滿願寺庭にて鞠也、歸さに、長野淡路守よせられ候、種々会尺共也、誹諧・酒宴など也、深行ニ罷歸候、

一 二日、如常、此晚柏田川にて鮎取せ候て、見申慰候、歸さに、谷山志^{（志）}介よせ候、右之鮎など賞翫候て、深行まで酒宴也、和田刑部左衛門尉飯野へ八朔御祝言ニ進上申候、被歸候、御祝著之御返事共也、八代御番立などの儀、請御意候、彼是一兩日中、御使を以可蒙仰之由也、

一 三日、毘沙門へ別而讀經など仕候、此朝馬之向指させ候て見申候也、此日若衆中被來候て、碁・將碁にて慰候也、

一 四日、内々氣分無然々候間、爲祈禱大般若にて候、御崎寺・木花寺越也、經衆各海江田衆也、從中書公預御

使僧候、御領内徳之測之者、私用候て廣原へ行候か、圖書頭殿御領知石崎を通過候、彼処にて棒打ニ打殺候間、定而石崎之者不存事者有ましき由、堅被仰候、然に彼処ニ出家之被居候、其小者仕候由申候て、繩を付候、然ニ油断申候哉、中書御家景ニ彼者逃來候て、不紛我也走合候て、刀を男役ニ取候、仕候子細者、佐司兄弟にて仕候由申事ニ候、さてハ佐司ニ敵人を乞ニ、徳之測之者、又佐土原衆など少く被行候て被申候へハ、無余儀佐司兄弟にて仕候、不及力之由頻ニ申候条、其假無了簡成敗被仕候、當國之事悉皆拙者承義候間、被仰聞由也、さてハ其分にて候哉、御校量之前候間、不及是非候、麟臺御家景之事候間、乍不存宜様ニ被仰談候て可目出由、御返事申候也、此日本田治部少輔殿越にて候、御酒持來候也、賞翫申候、終日碁・將碁にて閑談共申候、此晚本治・長淡へ御酒寄合候也、長山兵部少輔かこ嶋御祭礼ニ被參候、昨日歸也、御寄合中より承候趣、金乗坊豊後へ御使被仰付候へ共、武庫様他國への御使ニ、餘々若輩にて候間無御納得由候、然者彼人者指留可申由也、即都於郡へ申渡候、御書等者此方へ被持候へと申候也、△

一五日、▽如常、△從佐土原川上左近將曹殿被來候、中書公爲御使、飯野へ參被成候、有川雅樂助より傳言候、態御使者を以可被仰由候処、好便之条被仰候、忠長・忠棟當時八城へ滯留候、堺目作など被拂せ候するハ、彼表寄之衆にて可事成候、拙者事者用意申、右御兩所之爲御替、追而御註進次第可罷立之由也、此日かこ嶋へ八朔ニ進上申候衆罷歸候、被仰候趣、來十三日八城へ馳着候様續たるへく候、さてハ二町ニ物數一宛、逗留者十日之由也、此由佐土原其外諸方へ申渡候也、并羽柴殿衆四國へ渡海之由風聞候、然者彼方退治程有間敷候歟、其後爰元へ下着之志有由、世間申散候、當國之諸地頭衆、拙者同心申、佐土原へ參候て、若く京衆下向之由候ハ、何たる御行たるへきかの談合申定、急度かこ嶋へ可申上之由也、即関右京亮申付、佐土原へ此由申候也、此晚有川雅樂助殿まで書狀認遣候、かこしまより續之儀被仰付候、飯野よりハ、忠棟替ニ拙者ハ可罷立之由候、餘と相易之義候、巨細承候て可致其心得候由也、

一六日、関右佐土原より夜前歸候とて被來候、さてハ續之由候歟、中書公御事ハ、當秋中ハ自身御立成まじき

由、飯野へ御侘被成候、御番前にて候間、人數一兩日中ニ御立候する由也、就京説ニ御談合之由候歟、兼日中書も左様におほされ候条、武庫様へ被請御意候、其御返事ニ、吉利殿・拙者・鎌雲御同心被成、縣・三城表之様子見償被成候て、其上御校量肝要之由候、然共彼衆御同心ニ御覽し合せ候ても、内端之御人數御得心ニとても參ましく候条、飯野衆又ハかこしま衆など、誰人も被參候ハ、可然被思召候、依其菟角此方へも不承候、一途御談合ハ候ハてハにて候、然共此節者先と續と候ハ、其分可然候、御談合者追而之儀たるへき由也、

一七日、▽如常、△都於郡へ関右遣候、趣者、かこしまより爰元人數御談合專一之由候間、中書様へ申入候へハ、如右之御返事にて候、如何、可有候哉、鎌雲分別可承之由申候也、返事、さてハかこより御談合之由候哉、乍勿論尤候、然者拙者續之儀候歟、▽當時痔病出合候ハ、不及是非儀候間、然与罷居候て、爰元之様子御談合肝要之由也、△

一八日、▽藥師ニ別而看經申候、△関右又佐土原へ參せ候趣、鎌雲存分共申上候、菟角來十日・十一日之間、

佐土原御透次第、各同心にて參候て御談合申、さて十五日・六日にハ、續ニ打立可申由申候也、此日從中書公、伊地知名字之御使被下候、趣者、從山中申來事候、豊州より阿蘇家殊外熟談共候、就夫みたい殿へ鎧・甲、甲斐之長門守へ甲、其外誰彼あまたへ武具など、相應く遣候て、縣表へ着陳候する、左様之刻別而入魂候様にと打憑之由候、諸方針策最中之由也、就夫もかこ嶋より被仰候御談合肝要候歟、然者拙者續にハしかと罷居候て、御談合專一ニおほしめされ候、來十四日、早朝佐土原へ着合候て肝要候、左候ハ、三城地頭題目被聞せ候ハてハにて候間、吉利殿へ伊尻伊賀守被召烈、必佐土原へ十四日御參之由可申由也、其外談合可有人數へ申渡候へと候、御返事、さてハ御續にハしかと罷居候て、御談合肝要之由候歟、何と様にも御意次第候、山中より申來候通、尤存候、▽委承置候、拙者も御方へ関右進上申候、巨細彼仁へ申たる由也、△此晚関右歸候、鎌雲へも談合共申候哉、此節御談合專一ニ被思召候、來十四日、必佐土原へ談合衆可被揃之由可申之通、承候也、此御返事にも、拙者事ハ、續にハしかと罷居候て肝要之由、被仰候也、▽此夜從中書、

大光寺・高崎越前守にて被仰候、先日凡被仰候石崎与德之淵口事邊出來候、殊ニ佐土原衆楚忽之成敗共被仕候、何とも笑止ニ被思召候、麟臺へ直ニ此等之儀可被仰述候すれども、餘無御面目様候間、拙者事御憑被成候、急度八城へ使を進し候へ、何と様にも圖書頭殿御納得ニ參候様に、中書御分者御校量被成候する由也、大光寺御酒御持せ候、參會申候て賞翫申候也、御返事、石崎与御領六ヶ敷出來候、就其麟臺御前之義、拙者御憑之由候、惣而御隔心なき御あひたの事候間、直ニ被仰談候て可然存候へ共、御憑と候処を辞退申候ニ相似候条、御意次第、御存分猶く承候て可申理候、何と様にも麟御存分ニ參候様に御校量候すると被仰候処者、定而楚忽之義共被仕候衆、寺領などさせられ候する義にてそ候らん、菟角麟より御侘共候ハ、尤可爲中書おほしめされ候ハ、先あなたより被仰候ハぬさきに、楚忽共申候衆へ面目を失せられ候てハいか、候する哉、御校量にハ過ましく候、菟角御校量次第、麟臺へ何と様にも可申入之由申候也、

一九日、從飯野飛脚歸候、有川殿返事之趣、さてハ從鹿兒嶋續之儀候哉、不紛來十五日御働可有にて候つれ共、

とても遠方衆被續合ましく候条、指延被成、來廿二日ニ相定候、十九日・廿日、八城へ越着候様に續之由也、
 ▽拙者事養性氣に候哉、併涯分養性申、罷立候て可然候、直ニ忠長・忠棟御替ニ、拙者ハ可罷居之由也、即諸方へ續相延候て、廿二日之働之由申渡候也、從佐土原又高崎殿を以承候、麟臺へ一ヶ条御憑候処、御意次第之由申候、御祝着候、然者楚忽之義共申候衆へ、先被失面目候てか可然候すらんと存候哉、無腹藏申上候、是又御大慶候、然共、中書公無御存知とハ被仰候つれ共、少きこしめされ候つる、併ヶ様に楚忽共被申候へとハ不被仰候、旁以先面目を失られ候する事ハ、御得心無之候、先々申理候て、様躰承候へ、次第く御談合可有由也、次ニ者拙者事、菟角此度續にハしかと罷居候て、談合肝要ニおほしめされ候、來十四日にハ、必々談合衆同心申候て參上可申由也、是又、御意次第其心得可申由申候也、△

一十日、鹿兒嶋へ同名右衛門尉を以申上候、此度續之儀被仰付候、當時痔病再發候て散々之躰候、然共中途まてなり共打立可申存候処ニ、中書公先々爰元雜説共申候間、拙者事ハ然与罷居候て、かこ嶋よりも被仰候當

國諸地頭指揃御談合、肝要之由申候、并四國表之阿・讚兩國、羽柴衆へ去渡、長宗我部殿和平之由、去七日細嶋へ聞え候由申上候、又從中書被仰聞候山中より申候雜説之儀、是も爲御存知とて申候也、▽又南林寺作之事等、条々申上候也、△此日佐土原より田中筑前守を以被仰候、又々山中より到來候、必定みたい殿・甲斐長門守などへ豊州より計策候、阿蘇表へ一途現形之刻、此口も仕出候する由申候、豊後へも羽柴殿より菊田名字之使者下向候て、それハやかて四國のこたく渡海候、大友とのへ金箱一被遣候、其外金箱十一、豊後へ被請取候、是もいつかたへか計策候する趣之由申候、▽彼是巨細多々候へ共、不及書載候、此条とも、かこしまへ使進上之由、中書きこしめし候間、申上候て可然之旨也、委仰の条々承置候、かこ嶋への使者今朝早旦打立候間、無是非候由申候也、

一十一日、飯野へ勝目但馬守にて申候、此度續ニ、養性時分にて候共、何となり共打立、中途まてなり共可參覚悟候之処、中書公爰元之雜説事候間、御談合可有候、拙者事ハ然与可罷居候之段被仰候条、不罷立候由申候也、又山中より之雜説等、具申上候也、△

一十二日、▽藥師如來へ別而祈念申候、△從八城忠棟書

狀預候、來廿二日、堅志田表當作可被拂せ候、日州衆續之由也、并一番・二番之衆、私ニ所を二番盛に被仕候、ケ様にハ有ましき事のよし也、即所くへ申渡候也、此日從清武註進候、只今眞幸傳に聞え候、花之山之椿阿蘇家より仕拂候由也、此儀佐土原へ長野淡路守にて申上候、次二十四日御談合と候つる、此説聞え候間、先く續候する哉、又就右之義御談合肝要さうに存候、如何之由請御意候也、

一十三日、▽敷祢越中守殿彦參之企候、祝言ニ御酒たへさせられへき由也、兼日約束申候条行候、△此日飯野より圖書頭殿書狀預候趣、御談合可有子細候て、八城より飯野へ御參候、花山椿敵詰取候、就夫諸所有足・無足續之義可申付由也、中書公ハ此境雜説申候条、御一左右までハしかと御座候て可然由也、▽拙者事、當時養性氣之通聞召及れ候、先く手之衆計立候て、しかと可罷居由也、△此晚飯野へ進上申候勝目但馬守被歸候、申上候条く尤ニ被思召候、次二者、花之山不慮義出合候、笑止ニおほしめされ候、就夫續衆無吳儀可申付候、拙者事ハ此境雜説申候間、然与罷居候て校量可

申由也、

一十四日、弘曉打立佐土原へ參候、御談合也、衆吉利山城守殿・比志嶋殿・鎌田筑前守殿、吉利總州者服氣にて候間御參無之候、伊尻伊賀守御參せ也、伊集院作州も養性氣とて、松下越中守參せられ候也、御談合、先く中書公・拙者など、縣・三城之様子見償候て可然候、それに應して、御談合ハ次第く可有之由定候、又諸所他方之計策ニ打合ましき由之神水、上中下共ニのませられ候て可然由也、▽種く御会尺共被成、吾とも皆御酒進上申候、△此夜▽拙者宿へ△中書公御札共被成、御酒御もたせ也、并尻伊賀守・松下越中守めしつれられ候、酒宴共也、鎌田出雲守殿御談合と候つれとも、子息左京亮花之山にて打死之由聞え候て不參也、此夜ハ廣原までかへり候、野村丹後守へ留候、一十五日、野村丹後守会尺也、それより宮崎へ歸候、各被來候、御酒參會申候也、△一十六日、續衆申付、各被打立候、柏原周防介飯野へ被參候て、當所之衆者御供ニ可召烈之由被申候へと堅申候、此日比志嶋殿より拔水豊前丞を以承候、從忠棟より書狀到來候、先く續衆之事ハ入間敷候条被指延候、

如何様追而從飯野御註進次第續たるへき由也、將亦花之山にて打死之衆、鎌田左京殿・木脇刑部左衛門尉殿・西俣七郎左衛門尉、此衆者分明候、別にハ不聞得由也、敵も餘多越度申候由也、右之使前にて番衆召寄候て、續衆可被留之由追使遣候也、并海江田之衆も立候間、是へも番衆遣候也、

一十七日、佐土原より飯野へ御用候て使僧御參せ候、其使僧歸宅候を、直ニ飯野より御遣被成候趣、日州衆一人も續と候て、不被罷通候、如何候哉、來廿二日、兼日之御日取のことく御働たるへく候、無油断可申付由也、并有川雅樂助殿書狀被相添候也、從夫驚候て、谷山志广介、早道之馬ニ乗せ候て飯野へ參せ候、續之事度く承候条、拙者ハ然与可罷居之由兼日被仰候俣、續衆別而致馳走、昨日打立せ候処、曾井より留候ニ付、追使遣候て留候、如何無御心元由申候也、此日加江田へ罷越候、▽縣へ中書公御越候する、御同心之由候間、直ニ船より可罷越覺悟にて越候也、蘇山寺弓場にて暮の可仕之由住持指出承候間、的射候、弓數廿張計也、

此夜ハ彼寺ニ留候、種く会尺共也、△
一十八日、▽早朝觀音へ看經等如常、恭安様へ參候、種

く御会尺也、紫波洲崎城内廻候て見申、普請之義等申付候、安樂阿波介今日茶的前にて候間、御伊勢之弓場にて興行申候、乍辛勞下候て可仕之由申候間、其分にて候、種く奔走共也、木花寺酒肴預候、賞斷申候也、此夜大宮司処へ留候、会尺共仕候也、宮崎より使來候、飯野よりの書狀持來候趣、度く被仰候ことく、來廿二日作払せたるへく候、別ニも御行可有之候、有足・無足日州衆勸候て、立可申之由也、鎌田源左衛門尉殿へ彼狀持せ遣候、▽如書面早く諸所へ申渡候へ、拙者事ハ明朝払曉罷歸候て、可罷續之由申候、曾井・清武へハ是より可申之由申候也、△

一十九日、▽早旦打立候処ニ、△鎌源より書狀到來候、谷山志广介も夜前罷歸候、各續無油断可申渡由也、忠棟より續留之由、比志嶋殿より被仰候歟、無御心元被思召之由也、▽拙者ハ養性氣之由候間、然与罷居候て可然之由也、曾井・清武へ續之義申渡、宮崎のことく罷歸候也、曾井谷山仲左衛門尉にて申候、去十六日續衆留之事、拔水豊前丞にて承候間、任其趣留候、然ニ飯野よりハ無御心元由候、さてハ後日のため申置候由申候也、此日比志嶋殿より使預候、續留之事、少しも

しらせられざる事にて候に、拔水方承違候て申誤之由也、されハあまりく笑止ニ被思候間、寺領など候するや、如何之由也、返事、さてハ續留之事、使之申誤に候哉、併吾等返事ハ定而聞せられ候つらん、其時使之申誤ハ知候つらん、菟角不承候て、于今如此承候事、納得不申候、比志嶋殿寺家などへ御座候する事ハ不存候、拔水方一定承違候て之儀候ハ、曲事之由被仰候て可然候段申候也、拔水方、長山兵部少輔処まで來候て、先日之使申誤之由、比志嶋殿被仰候、既ニ彦太郎殿打立候も留被成候、清武などへも其分被仰候て、吾ニ承違候之由候、御無理にて候へとも、地頭承事候間、謹而罷居候、于今も先日申候通不相替之由也、委永山方被承置、被歸候て可然之通申候也、△

一廿日、續ニ打立可申覚悟にて、從加江田人衆・夫丸等召寄候、今日ハ戊午、餘惡日にて候間、人衆を竹田まで遣候て、拙者ハ明日払曉打立候て可然之由、却者なと被申候間其分に候処、從鹿兒嶋御使僧成覚坊越着也、即拙宿へ被來候、御意趣、此境雜說事実之由、各心遣御察被成候、涯分所く普請等、無緩可申付之由也、重く京都より御内儀申方共候、羽柴衆四國へ打渡候、必

竟ハ當國を心さす由聞得候、無油断堅慮入へく候通也、并計策文等持下者、有方より申上候間、委被仰聞候、中書公へ御談合申、彼者下候者、早く搦執候て可然之由也、彼御使僧物語ニ、かこ嶋衆なども少く續せられ候、然ニ加治木にて聞せられ候へハ、從八城横川まで書狀到來候由候て、爰かしの衆被打歸候由候、如何候哉、吾く續之事、今少見合候ても可然候すらん之由也、彼御使佐土原へ被參、從夫縣まで可被通之由候、然者拙者も縣へ中書御同心之義候条、於彼方委御返事可申上候、一ヶ条被仰付候義者、即鎌田出雲守へ談合申、覚悟可仕候由申候也、▽此日從清武より使預候、去十六日續衆立られへき覚悟候処、曾井より留なされ候て、無其義候、又く續之由候間、明日立られへき由也、早く御立可然之由申候也、

一廿一日、寅刻計中書より御使給候、續ニ先く然与罷居由、御使僧物語候、さてハ兼日有増のことく、縣・三城へ御越有へく候、今日財部まで御越有へく候、拙者事ハ養性氣にて候間、乗物にて靜ニ參候へ、御待なされ候する由也、其心得申候、御待ハ有ましく候、御跡より聽而可參之通、御返事申候也、此日柏原周防介・

鎌田源左衛門尉、此外衆中不殘續ニ打立せ候、柏周飯野へ被參候て、武庫様明日御立之由候間、宮崎衆者御供ニ可然之由被申上候へと申付候也、△

一廿二日、打立候て高城へ着候、▽坂本民部左衛門尉拙宿へ被來候、山田越前守殿代官同心也、御酒預候、賞翫共申候、△

一廿三日、早朝打立候、▽美と津ニ少やすらひ候、町衆

など御酒持來候、種と之儀共也、△此晚日知屋へ着候、

▽即中書より御使被下候、昨日爰元へ御着被成、拙者

御待被成候処、早と參着目出之由也、吉利殿も御出也、

井尻伊賀守御酒持せ被來候、中書公今日ハ細嶋へ御慰

共被成候、只今城のことく御歸被成候、拙者も罷登、

御会尺頼之由也、痔病惡候に遠路をかけ候故、一段難

儀之躰候間、罷出間敷由申候也、△

一廿四日、▽地藏菩薩へ看經如常申候、此朝も井尻方被

來、頻ニ城へ罷登へき由被申候へ共、養性時分難成候、

其上去春城へ礼申候間、此度ハ可被指置由申候也、△

此日縣へ中書御越之由候間、我とも打立候刻、從飯野

有川殿書狀到來候、從八城頻ニ拙者事可罷立之由候間、

其用意肝要之由也、中書公も御立可有之由也、▽去廿

一日之日付之狀也、即返事、中書御供仕、爰元へ罷居候、歸宅次第可罷立之由申候也、從土持殿、中書御光儀目出之由、拙者まで使者にて被申候也、此晚縣へ御

着也、土持殿中途まで被參候て御案内者也、此夜土持殿へ中書御礼被成、我と御供申候也、先御三献如常、中書御父子より、馬・太刀、土持殿へ被賜候也、御座

躰客居中書公・拙者・鎌田筑前守、主居頻ニ御斟酌被

成候つれ共、堅被申候間、又七殿御座候、吉利總州・

土持霜臺、種と馳走共候、鳥鳴候までの御酒宴也、京

より下候狂言大夫參、種と之義共申候也、彈正忠殿子

息指出られ候、御酌など被仕候、又御酌をも中書公被

成候、

一廿五日、川船にて、むしかあたり大友宗麟之旧跡共、

中書公御覽候、吾とも御供申候て見申候也、こあつさ

の下にて、土持殿御酒進上候、御賞翫共也、御かへる

さハ、こあつさにのほらせられ御覽候て、直ニ御歸候

也、此朝土持殿へ馬進之候、鶴毛也、此晚中書公御宿

へ土持殿被參候、可參之由候て參候、種と御会尺共被

成候、中書御父子へ馬・太刀進上也、深行まで御酒宴

也、此夜拙宿へも土持殿礼被成候、御酒參會候也、太

刀一腰・織筋四端預候也、

一廿六日、早朝中書公御打立御歸鞍也、土持殿門川まで送也、彼所にて芝屋候て御酒也、従夫霜臺御暇被申候也、此日塩見へ御着候、吉利殿中途まで出合被成御供也、御三献如常、中書御父子より、總州へ太刀・目錄被遣候、總州も太刀・目錄進上也、御座躰、主居中書公・總州、客居又七殿・拙者・鎌田筑前守也、種々奔走被成候也、夜更候まで御酒宴也、此夜從中書、吉利殿・長野下總守を以蒙仰候、先日佐土原へ參候刻、御面談ニ乍楚忽蒙仰候キ、拙者娘之事、御次男ニ御似合にて候間、御所望之由也、寔々先日御座物語ニ蒙仰候、中々相應申さぬ御意にて候条、菟角御返事申上まてなく候、然に又々蒙仰候、忝義共候、併あまりく不似合義にて候、指置れ申度候、其上、鹿兒嶋ニ被聞召候ても、御ちかくの事に候ニ、御意おもく候とハ申なから、拙者無了簡之由可有之存候、彼是被指置申候様ニ、兩所頼存之通申候也、又蒙仰候、是非共御所望ニおほしめされ候、鹿兒嶋へも、中書御前より御申なされへく候、菟角追而吉日次第猶と可被仰候、先々誰人へも縁邊之義申定候ハぬ様ニ、覚悟のため被仰置由

也、△

一廿七日、鹿兒嶋御使僧成覚坊歸にて候間、中書公御返事共なされ候、吾とも御返事申上候、其内ニ、右松備後守去々年已來山中ニ被柄繰人候、頃彼者へ使被遣候へハ、連々申組候義、于今相吳有ましく候、此節おほしめした、れ候ハ、御奉公一途申へく候、無其義候ハ、御惱にハ罷成ましく候へ共、爰より御敵たるへく候、其故者、從豊後柴田治右衛門尉・小田原、高知尾へ來候て逗留いたし、爰元手切之段申定罷歸候、來十二・三日、必彼兩人山中へ來候て、一途三城口へ可相絡候、此方ニから繰付候者、廿七八人も候、左候へハ、田代・字名間邊輒かるへき由申來候、如何候て可然候する哉、八城へも申入候、能仕合御使僧にて候間、委申上候、ケ様之儀等承合、肥州へ吾と事者打立可申之由申候也、▽此日中書公御歸鞍候、總州平岩之松原まで御送被成候、彼処にて良久御酒宴共成、中書公ハ此夜津野へ御留候、吾とハ美々津へ留候、地下衆酒肴など持來候、亭主大覚坊種々會尺共也、

一廿八日、早朝打立候、財部麓ニ柴屋構られ、鎌筑可參之由候間其分候、種々馳走被成候ての會尺也、下々ま

て沈醉共仕候、此夜人足等佐土原へ召置、拙者ハ宮崎へ罷歸候、

一廿九日、普請させ候て見申候、佐土原へ使者にて、此間御供共仕、種々憚多事共申述候也、此晚紫波洲崎普請之事等可申付ため罷越候、蘇山寺へ留候、△

一卅日、▽早朝城へ登候、恭安種々御会尺也、風呂焼せられ候間入候、從夫暮的にて候間射候、是にても種々馳走候て会尺共也、同名玄番助の前にて、色々奔走被仕候、△此夜法花獄寺より、かこしまへ御用候て使僧進上候、歸ニ御傳言也、中書公御供申、縣へ罷越候由其聞得候、肝要ニ候、さてハ罷歸次第、八城表へ早々罷立候へ、彼表ニ御談合入事最中之由也、次ニ南林寺作之事、御弓箭最中可難成候へとも、伯圀様御奉公之義候、何と様にも心かけ、事成候様ニ御頼之由共也、彼僧又々かこしまへ參候ハ、御返事可申由申候、別僧にて御返事ハ申あるへき由也、さてハ書狀相添申へき由候て、近々八城表へ可罷立之由得其心候、巨細成覚坊にて申候キ、爰元承合事共候、中書公へ御談合申候て可罷立候、將又南林寺作之事、愚意を添候事無緩候、併今分御弓箭に取乱候てハ、難成之由申候也、

71

『長谷場越前日記』

一天正十三年之酉八月十八日より、肥州限府の郡司長野方爲御成敗、打手の大將軍 兵庫頭義弘様御出馬を被成けり、御供之軍兵者、我もくくと勇つゝ、肥後の國限府の内ニ松尾の栴い乗取て、其假御在陣にそ被成ける、擬又追付、長野か居城を被攻ける間、矢上兵部左衛門尉戰死也、敵方終に不叶して、長野方と山鹿之郡司共に御幕下ニ參陣す、押直て高瀬ニ御陣被取せ、三池・小代も無程被罷出、御當家之御威光輝く事共を國土萬人見聞より、我先きニと申上げ、頓而參陣仕る、か程目出度世の中ニ、かすまの村の惡黨等無道事を申上がひに振舞處を、足輕衆を指向けて被追伐けり、高瀬表の仕合も可然相濟て、御大將義弘様の御開陳ましまセバ、諸軍兵致供奉、肥筑州を開陳す、此次ニ伊集院右衛門太夫者御暇申宛、肥州之宇都之顯高へ爲禮儀被打寄、其砌ニ鹿兒島衆佐多宮内少輔・伊地知越中守同心也、然間終日晝夜の酒宴にて、翌日者肥州八代迄の開陣也、如右國家靜謐有る故ニ、年始歳末御祝言、自國々ニ被申上、御礼式之仕合之いかめしかりける事共ハ、更ニ限りもなかりけり、去程に八朔之御祝儀ニ、

合子と宇都之使者共の御太刀の前後を争て、六ツ敷成

けるに、さうしを替て請取せんと被仰渡、兩使者是を承り、只同座ニ而、我先ニ御太刀を上んとて、宇都之使者が罷立て、是を急度見る方も、合子の使者か追付て、素袍之袖を引留る、彼人ハ以外ニ腹立して、太刀目録を差捨て、すまふ取りたる有様は、前代未聞、末代も懸る類ひは有間敷也、田舎人の出合を、鹿兒島衆の小者以下ニ至迄て笑ぬ者ハなかりけり、是を貴賤老若祇候衆ハ皆嗜とぞ聞得ける、其刻ハ九州ニ豊後豊前は薩摩方ニ不參也、此外ニ五唐方(島)も參上す、爰許よりも加世田衆ニ井尻伊賀守を被差下、小島とハ申せ共、人之嗜深くして、御使者下向の會尺ニハ、馬狩を馳走なり、又其よりは、宍岐の嶋方・對馬方皆同ニ御當家を頼母敷被申上て、筑前表ニ橘城の御陳ニハ、直ニ使者を差上て御祝礼を言上し、つぶてと云へる御酒樽を數百荷之進上也、其時ニ諸軍勢雲霞之様ニ立つ、き、此大酒を被下、さて狂言ニ取あわせ、いざや人と出合て、つぶて打に申さんと、束ね繩をときのべて、手毎ニ一ツツ宛取り持テる有様ハ、御善世とぞ見得ニける、

72 『勝部兵右衛門聞書』

一同年の八月下旬、肥後表合子藏人親爲早薩方方ニソ參ラレケリ、阿蘇家と隈部の親光・和井府ノ宗家など、未御下知ニ不隨、此等退治とシテ、大將ニハ兵庫頭義弘、相隨ふ一門宗徒の勇士數百人ニ其勢一万餘キ隈本へ打入、即吉松へ御陳を着られけり、其内ニ和井府の松尾の城ヲ可攻評定有ける処ニ、城ヲ明退落失けり、暫く在陳有ける程ニ、隈部の親光も赤星宗家も降參申たり、追付長野か居城ヲ攻られける程ニ、是等も降參申たり、慈ニ矢上兵部左衛門打死す、従夫内の小鹿も山鹿の雲洞も參れたり、勝代又肥前方ニ成間、高瀬へ御陳替有へしとて打入、高瀬在番をそせられける、懸て勝代降參申けれハ、美毛も即チ參られたり、美毛殿ハ、庶子宗領の争ひして、前三毛を追出セハ牢人と成、合子を頼て居られけるか、薩方勢高瀬へ打入之折節、當美毛を追出す、如肥前退れけり、前美毛古郷を安堵して、無二之薩方とそ成られける、従夫和仁・江原・大津山も降參とて參陣す、筑後の大名ニハ、蒲池鎮宗・富饒鎮連・久留目林慶入道・黒木宗作入道・同息ノ益性・溝口周防益家・西牟田左近將監種純、星野・

草野・尾山・執行良觀・筑紫上野守弘門・田原下總守茂種、筑前大名ニハ秋月筑前守種実・高橋右近太夫種春皆悉御旗下とそ申入れける、龍造寺政家も、薩厂ハ親の敵なれとも、身の大事と見ければ、江島長門守を人質ニ差出し、頻ニ降參の由をそ申れける、此に春間野と云所ニ、惡黨等拵へ取籠り、無道を振舞の間、足輕共ヲ差出し、即追伐せられけり、從夫高瀬表の諸軍歸陣ヲソ申サレケル、如此國ノ勢も強大となれハ、諸方の大名郡司も年頭暮の御祝言、國より被申上、其禮式仕合の感美事申計なし、去程ニ八朔爲禮儀、宇都・合子の使者罷出、太刀の前後の諍ひにて、事煩く成ニける、宇都の使者先きにて罷立処を、合子の使者青袍アズの袖を引留ル、宇都の使者腹ヲ立、太刀目録をさし捨て、上を下に成相撲を取有様、餘りニ笑く見へたり計季、

「日向記」

一同年九月上旬、肥後ノ合子役(殿)ハ薩厂へ參り玉へトモ、阿蘇家隈部役ハ隨ハス、是ヲ退治セントテ、兵庫頭大將ニテ隈本へ打入、ヤカテ吉松へ御陣アレハ、隈部モ

「大口土濱川西市丞覺」

飽府ヲ捧テ降參ス、内ノ小鹿モ山鹿ノ有動モ參陣ス、小代ハ肥前方成ケレハ、高瀬ニ陣ヲスエケルニ依、小代殿モ降參ナリ、而モ三池役庶子惣領三池ヲ争ヒ、先三池殿ヲセリ出シ、牢人合子ニ逗留有ケルカ、薩厂勢高瀬へ張陣ノ時、合子ヨリ亦三池へ打入テ、其頃ノ三池役ヲ退出シケルニ依、肥前如ク退レケル、去程當三池薩厂方ニ属ス、鰐・部原・大津山役モヤカテ薩厂へ參陣也、龍造司政家役、薩厂ハ親ノ敵ナレトモ、爲人質添嶋長門守ヲ差出シ降參ノ由被申故、幕下ニ属ト聞へタリ、依之先々諸軍薩厂ノ如歸陣、筑後蒲池・草野・筑紫・秋月・原田迄、不殘嶋津カ幕下ニ成、然トモ猶阿蘇家ハ不隨云々、

天正十三年之閏八月十三日ニかうさ・かたした兩城を責落被成時、堅下之城にて田代名字之人跡と合戦仕、手三ヶ所、面ニ目之上より耳ニかけ、其外ハゑたニ二ヶ所ニ而候得共、其人を打取候之由、おち市丞被申聞せ置候、是は御家記ニハ無之候得共、名字ほまれ、又は孫のためニ書付置申也、

▽閏八月

一朔日、看經等如常、折宇迫濱之口、石築地普請させ候て終日見申候、此日吉利殿へ書狀にて、山中之儀相尋申候也、

一二日、彼岸入候間、別而讀經など申候、御崎へ參詣申候、座主被出合候て御酒也、此日井比井・野嶋、彼あたりの浦衆、的興行可申覚悟候処、天氣惡候て的不成候、然者中城にて、各へ御酒振舞候、種々馳走也、夜深候まで酒宴共也、△

一三日、▽天氣不艶候へ共、明後日可罷行候間、宮崎へ可歸校量にて打立候、然処△宮崎より谷山仲左衛門尉來候、昨日從中書御使にて、八城へ御打立來八日ニ相定候由也、▽殊更川水増候て、漸游候て來候由申候、さて歸路難成存候て、蘇山寺へ留候、圓福寺入御候て、御雜話共也、此晚天氣晴候間、暮的射させ候、爰かしこより酒肴など持來候、賞翫共申候て慰候、△

一四日、▽如常、わかき衆朝の共仕候、見申候也、蘇山寺種々振舞也、△此日宮崎へ歸候、吉利殿より去朔日之返狀到來候、吾々急々に可罷立候哉、左様に候てハ、

先日之談合も徒ニ可罷成候、是非以來十日之前後迄ハ、然与罷居候て可然おほされ候、山中へ又々人被遣候間、一兩日中委彼方之様子可聞得候、其節早く註進可有之由也、將亦豊後衆頃梅口へ着揃由、聞得候由也、和田刑部左衛門尉を以、中書公へ申入候、右之返狀御披見のため持せ候、拙者事、明日可罷立覚悟候、▽併彼儀も無余義事候、如何候て可然候する哉、御意次第之由申候也、△

一五日、早朝和田刑部左衛門尉佐土原より被歸候、吉利殿より書狀、委御披覽候、先日於塩見大方被聞召候筋、尤ニ被思召候、乍去八城表より頻御立之由候処、彼義自然無首尾候ハ、必竟八城表へ爲御不用之様に、武庫様被思召候て、笑止たるへく候、何れ共難分おほしめされ候、拙者校量次第之由御返事也、城戶建させ候、左様之普請させ候て見申候処、福永藤六殿より註進候、只今同名伊豆守、八城へ當時罷居候、書狀到來候、去廿九日豊田口にて敵六十餘被打捕之由候、目出通註進也、各目出など申居候処ニ、從清武八城へ被遣候使僧歸ニ、忠棟より書狀給候、來十一日、三舟・隈庄へ被差通、深々敷御働たるへく候、續于夜日、八日

・九日之間八城へ越着候様ニ、可馳續之由也、詰十日
 之用意之由承候也、彼使僧物語ニ、去廿九日、一定敵
 六十三被討取之由也、皆々究竟之者共之由也、又中書
 公へ和田刑部左衛門尉にて、右之趣申入候、拙者ハ明
 朝打立可申由申候也、

一六日、早朝和刑歸候、度々使にて申入候、御祝着候、
 さてハ今朝拙者ハ打立申候哉、中書御事ハ、明後日八
 日必御打立可被成之由也、此朝打立候、本庄にて、久
 保左近兵衛尉財部衆にて候ニ行合候、只今八城より罷
 歸候、忠棟より書狀持せ也、即披見候、昨日之書狀同
 前也、來十一日御働必定にて候、早々可罷續之由也、
 中書公御立候哉、如何無御心元通也、此由、纏而彼方
 にて佐土原へ申候也、敵被討取候事も同前ニ物語也、
 財部地頭へも、早々可立成之由申候也、▽此夜本紙屋
 へ留候、椀山殿町へ宿被成候、通候砌事問申候、纏而
 使預候て、能仕合拙者今日罷立候哉、同心可被成之由
 也、

一七日、般若寺門前へ着候、別當拙宿へ御出也、酒肴御
 持せ被成候て、良久御物語也、御寺へ可被召寄候へ共、
 急々ニ續候由被聞せ候、結句無様にて候間、無其義之

由也、拙者も御礼ニ可參候へ共、日限をさしての續に
 て候間、御無沙汰ニ罷過候由申候て、使者にて御礼申
 候也、

一八日、久木野へ着候、椀山殿從中途水俣より船ニ乘可
 被成覚悟候て、彼方のごとく御座候由、使にて承候、
 御懇懃之由返事申候也、久木野の地下より、馬草・薪
 などくれ候、衆中野村大炊兵衛尉・宇田能登守同道申
 候也、△

一九日、早朝打立候、佐敷地頭へ船之儀頼候間、一艘被
 仰付候、拙者ハ悴者五六人召烈乗船候、已上者陸路也、
 此夜比奈古へ着候、當所嘸鎌田源三郎殿かり屋へ宿申
 候、財部地頭養子鎌田二郎五郎殿、爰へ越着候礼ニ
 被來候也、忠棟へ書狀を以申候、只今夜入時分當所へ
 越着候、明日之打立にて候哉、如何候らん、拙者ハ人
 數待合候、明日早々可參候、巨細宮崎衆中八城へあま
 た被居候間、被仰付、夜中ニ御註進頼存之由申候也、
 此夜中返狀到來候、明後日十一、御働必定候、隈庄城
 近村四五ヶ所被破せ、是を釣手にて敵付候ハ、味勢
 にてまぐられへき御談合之由也、日州衆者皆同拙者同
 心可申之由也、河上殿同盛にて候通承候也、武庫様

明晚小川まで御發足たるへく候、是にて校量申せ之由也、

十一日、早朝從栴山殿使預候、水保より出船候て、漸此方まで被着せ候、拙者同心可有之由也、日州衆者同盛にて候、一定今日之打立にて候、其支度肝要之由申候也、跡衆待付、比奈古より巳刻計打立候、懸而八城へ參着候、路次より直ニ武庫様へ罷出候、即御見參被成、今日御打立候処、神妙之折節參着申候由 上意也、從夫懸而御打立被成、圖書頭殿御供也、諸軍衆も思々ニ打立候、此夜 武庫様小川ニ御留被成、諸卒ハ小野・森山・高津賀・豊福など、在く所々ニ宿候、吾等者 豊福へ留候、

^{己卯}十一日、隈庄城近村く破却被成候、衆盛等、昨日越着候間然と不承候、併 御馬廻ニ一手、鱗臺御供也、忠棟一手、吾々一手、大略日州衆也、吾々罷居候口ニ破衆被退候ニ、敵付送候処、懸而追崩、敵二百程被討取候、武庫様御内衆過半分執也、隈庄板城戸まで追詰候、宮崎衆野村甚介・濱田後藤兵衛尉、立本右近將曹、拙者倅者谷山刑部少輔・山本備前守分捕申候也、數祢源六戰死被仕候、高城雅樂助被手負候、宇土殿自身出

張也、彼手之衆も餘多高名申候、志岐・高津良・栖本・天草殿など、皆々自身被罷出候也、勝吐氣川田駿河守、勸請時伊集院三河守也、龍造寺・秋月殿使者勝時ニ相候、御働之様躰褒美共也、甲斐宗運次男土方へ頸見せられ候、甲斐治部・同名帶刀、兩人共ニ隈庄役人共也、此等始而頸二百程也、三船より續衆四千計、むかへの原ニすわり候、若衆中切崩候する由類ニ被申候へ共、日さかり候間、無用たるへき由候て、稠御留被成候也、

二十二日、早朝より、各小川 武庫様御宿へ祇候申候、談合衆被指揃、執々兵義也、昨日從御舟續候四千計之衆、定而明日も可出合候、左候ハ、是非以被懸せ、一戰させられ候て可然之由相定候也、然処ニ河田殿へ御尋被成候、明日より續而惡日到來候俣、御働御無用之由被申候也、如此被申候事ハ、花之山椿取勸請新納右衛門佐被仕候、彼方改軍申され候ハてハと、支而鹿兒嶋にても被申候欵、太守様上意にハ、改軍之法なと候事ハ、爰元ニハ一向不被及聞召義候、右衛門佐ハ迎も存ましく候、何と様にも川田軍神之御祈念、肝要におぼしめされ候、其上、花之山慮外之已後、於彼口

究竟之敵六十餘被討捕候、然者天道より改軍被成義候間、不及是非之由被思召候通上意候つる由、各物語也、併明日御働之事ハ、役者得心不被申候間、先々御留候て、法連寺之尾ニ御陳ニ可罷成処有由申候条、是を御打出被成、上覽可然之由出合候て、各宿々へ被罷歸候也、

^{辛巳}一十三日、早朝衆盛なども候ハす、御宿寄々之人數ハ御

供、其外諸所之軍衆ハ、思ひくりに打出也、武庫様

法連寺之尾ニ御登被成、忠長・忠棟御供也、然処若衆

中、下知之外ニ堅志田麓へ被指通、放火共候、是者御

談合之外にて候条、笑止ニ存、留候へ共、はやくさ

きニあまた被通候間不及力、左候とて、たゞ二有へき

事候間、拙者事ハ法連寺之尾にハ不罷登、響之原ニ見

合候、然処、新武州も下知之外之義有由被見候て、拙

者罷居処ニ被來候、從夫菟角候処、堅志田指通足輕衆

行候由申候間、新武同心にて堅志田麓ニ指懸、承候へ

ハ、甲佐之困破却候て、敵數百人被打取由到來候、先

宮崎衆分捕被申候て、頸被持來候衆、鎌田源左衛門尉

・柏原周防介・金丸主馬允・吉田外記、拙者倅者加治

木雅樂助、二人討候而來候、一定甲佐困被仕払之由也、

御旗本より忠長・忠棟、我々罷居処へ御座候、忠棟事者、甲佐椿へ被通候て御番候する由候、新武・拙者事にハ、尤左こそ可有候すれ共、只今彼方見候て來者共申候ハ、悉被燒拂候間、御格護一夜も可難成候、其上敵入目とハ申なから、餘深と數処にて候間、忠棟御籠ハ無用候由申候也、僞者、武庫様へ甲佐へ可通之

由申させられ候条、吾々兩人前より申分候ハ、留な

され候する由也、それハ我々ニ任せられ候へ、先々拙

者罷居候処ニ御座候て、御談合肝要之由申候、忠棟・

麟臺・新武・拙者、此外諸地頭集居候て談合共候、然

ニ堅志田・萩之尾椿までハ破さうなる処之由、却者な

と被見候、然者責させられ候て可然之由定候て、一同

^(張懸)ニ懸らせられ候、下椿にて平田新四郎殿太刀打など候、

一天正十三年閏八月十三日堅志田御攻ニ蒙疵、

平田新四郎 後太郎左衛門増宗コトカ、系圖ニハ幼時新三郎トアリ、二十歳ノ時ニ當リ、

天正十三年秋肥後三船在陳、

新納縫殿助久時」

疵かふむりなされ候也、從夫一所にも合戦など候て、

詰城まで責登候、各被討候敵働候て、手負など候、宮

崎衆・拙者倅者など、數多分捕仕候、切捨にて候間、

不及記候、長山兵部少輔・山本備前守、詰城にて被手負候、各粉骨共也、拙者ハ肝付霜臺同心申候、吾々通にハ最前ニ内城へ登候間、懸而内城へ此夜罷居候、霜臺同宿申候也、破籠之御酒など計漸參合候て、兩人賞甄共申候、誠上下鎧之袖を片敷、一夜を明候也、

一十四日、武庫様夕漸麓まで御出候、然者御宿へ參候而、御祝言共迄也、内城へ昨日吾々早登申候間、其俣宿仕罷居候、我々ハ別所へ取直可申候、早々内城へ御宿可目出之由申候也、今日ハ惡日にて候間、追而御登可被成之由也、此日昨日之頸共少々被集候て、勝吐氣候、堅志田麓にて候、武庫様御下被成候ての儀也、伊集院三河守よろこひ被申候也、

一十五日、▽看經等如常、△忠棟・新武など拙宿へ來儀候て、物語最中、梅北宮内左衛門尉前より、三船之事捨候て退候由聞え候、早々各御續之由注進也、從夫各罷續候、三舟之事者敵捨候由聞得候間、不及是非候、隈庄いまた相支候条、彼方へ使僧なと被遣候て可然之由候て、忠長・拙者隈庄口へ指懸候、然ニ忠棟も追付被成、談合共候て、隈庄へ使僧指遣候也、趣、三舟其外諸城悉落居候、隈庄計にて迎も一防戰成ましく候、

是非質人指出、各命を助かり候へとの義也、此返答不聞内ニ、武庫様今霄ハ三船へ御座候する、御宿元等可見償之由候間、秘書御同心申、三船へ籠候、先宗運居所見申候へハ、彼子にて候紹員、此間隈本へ居候、彼等取入居候、吾々着候てより、彼衆追出、御宿たるへき由申定候、武庫様御役人衆へ已上申付、御宿之構共させ候也、武庫様夜入候て三船へ入御被成、忠棟など御供也、

一十六日、各御宿へ祇候候て御祝言共御申也、諸軍衆方とより參上也、此晚隈庄質人指出、被請取之由聞得候也、田代よりモ質人指出候也、

一十七日、小代殿御祝礼ニ被參候、此日忠棟隈庄へ越被成、様躰ハ於鹿兒嶋、隈庄御手ニ參候ハ、忠棟へ御給之由承被成候、一向不知案内之処にて候間、追而御返事ハ申なされ候する通、被申上置候、然者見償有度由、吉田作州にて麟臺・拙者へ承候、即武庫様へも申上也、就此之儀口能多々候也、

一十八日、出田助九郎殿、一要之名代ニ參上也、木山・津守などへ番衆被指籠候、皆打捨退也、

一十九日、矢部へ被遣使僧八城莊嚴寺、歸被成候、阿

蘇御神へ被對、阿蘇家之事御免許被成由、千秋万歳大慶之由也、阿蘇殿役人五人共ニ、御使僧宿へ罷出、殊之外馳走之由物語也、此便ニ質人甲斐美作入道指出候也、

一廿日、城一要參上候、御湯漬御寄合被成、御座躰主居武庫様・秘書・拙者、客居一要・新武也、御酒宴共也、御祝物太刀など進上也、一家衆・役人など彼は五六人召出候て御酒被下候也、城殿宿へ、大野治部太輔殿にて御礼被成、一要拙宿へも礼義候、在合候て面談不仕候、太刀・片色一預候也、△

一廿一日、▽隈部殿被參候、御湯漬御寄合候、主居御座候、忠棟・拙者、客居忠長・隈部方・新武也、御祝物太刀・織筋一・黄金一進上也、御座物語ニ、小國表へ近日中隈部一手にて一行可仕之由也、各肝要之儀被申候由申候也、△此日泰平之御祝義也、川田駿河守、如恆例御庭にて時被作候、支度さねつけ計ニ上より袍被着候、是ハ上より被給候也、結袈裟・守等如常被掛候、時三々九聲也、其後御三献御寄合被成候、川田方一人御相伴ニ被參候、諸侍者皆々祇候申候也、川田方へ御太刀被下候、又川田方も太刀進上被申候、▽從夫各次

第無之、太刀・目錄持參候、目錄者押並て百疋宛也、隈部・赤星など太刀持參被仕候、志岐・上津浦・天草など不及申候、萬目出御躰共也、隈部殿より私ニ太刀・織筋預候、

一廿二日、從合志殿、同名對馬守にて祝言申上候、祝物等有之、合志親重親父宣頓被參候、趣者、就親重進退、世上物沙汰共候、何共酒狂のミにて散く之者候、然者、宣頓与孫にて候者之事、向後頼奉之由共也、從合志殿私ニ太刀・織筋預候、宣頓拙宿へ礼義候、杉原拾帖預候也、

一廿三日、種々御談合共也、龍造寺政家へ被遣候御神文之案可仕之由、竹下方にて被仰出候間、本田刑部少輔へ談合申、校量申候、

一廿四日、夜中より地藏菩薩へ別而看經申候、肝付彈正忠殿、先日於堅志田約束候本尊預候、去廿一日泰平之祈念被成次ニ、川田殿へ頼存候て、開眼申候、拙者今日拜始候、中尊刀八毘沙門、上ニ勝軍地藏、四ノ角ニ四天、左ニ飯繩、右ニ十一面也、童子等如常御本尊也、繪処也、此日肝付彈正忠殿、雨寶童子之啓白相傳有度之由候間、不似合之通斟酌申て候へ共、頻ニ承候条、

大方申候也、此晚宣頓より、爰元我々取成故御意共能候とて、礼義ニ織筋一預候也、

一廿五日、當所天神ニ毎月祈念之連歌候間、其分ニ候ハテハと候て、百韻御興行也、御發句

吹敷やいく千里まで秋の風 とあそはされ候、連衆ハ御談合ニ隙有衆迄也、此日忠棟も隈庄より參被成、終日御談合也、宇土殿參上候、御湯漬御寄合也、御座次圖書頭殿・忠棟、客居顯孝・拙者也、御閑談にて御酒也、進物太刀・織筋一・銀子二也、私ニ太刀・織筋一預候也、

一廿六日、田代衆宗典父子を始五人、懸御目候、鎧・甲など進上申候也、

一廿七日、矢部質人五人指出候、何れも役人共之子弟なと也、此日忠棟も參上候て、終日御談合共也、種々之儀出合候、不及書載候、忠棟歸なされ候、拙宿へ立寄候へと申、其分に候、秘書も入御候也、△

一廿八日、▽荒神へ看經別而申候、種々御談合共也、△此日合志宣頓被歸候を又御用候、可被參之由書狀にて申候也、合志へ可被仰子細候之間、御用心ニ津守・木山へ諸所之衆御番とて、次第く々に被指遣候也、

一廿九日、御談合之子細多々候間、拙者隈庄へ罷越、忠棟へ打合、細談可申之由候間、罷越候、本田刑部少輔

・稻富新介御使候間、同心申候、又肝付彈正忠殿同道申候也、忠棟へ談合共事澄候て後、種々会尺被成候、

今春又次郎など太鞍仕候、同唄など云者同心候て乱舞也、漸薄暮ニ各罷歸候也、此日小代下總守殿より使者進上候、先日ハ親父伊勢守參上被申候、此度ハ爰元御祝礼とて、太刀・馬進上也、到私ニも太刀・段子一預候、中書三城表田代まで御座候、早々三ヶ所御手ニ參候て、直ニ矢部を通候て、御使被下候、三原宮内少輔殿也、高知尾ミたい殿ハ、近日質人指出、可申入之由候、未一着之由也、一段目出之由御返事申候、菟角高知尾之事ハ、御進退ニ罷成候様ニ、此度御才覚肝要之段申候也、△

76 『勝部兵右衛門聞書』

一爰に阿蘇家ニ美船の主甲斐入道宗運の息嫡ハ三河守、二男ハ相模守、三男林越前守、此に嫡子三河守と三男父存命の時蒙不孝、肥前のことく去退ける、仍て二男相模守親教父の家を連續す、彼親教父の山を可攻由度

と申されけれども、宗運入道是を不赦、花山ヲ攻ん事ハ尤輒ルへし、彼城落去之由薩厂へ相聞えなハ、定て大軍差上せらるへし、其時誰か是を防ん、阿蘇家の大事極るへし、阿蘇家をおもひあなとつて、境目ニケ様の厄弱なる小城を取る、事こそおそろしけれ、無勿体と云て、大に制らる、不及力シて送りける処ニ、父宗運入道同年の夏老死せられける、相模守父存命の時ハ御赦しなけれハ、命を依難背堪忍したり、於今ハ何まで可忍、いさ押寄可攻落とて、阿蘇家八千町を相催し、天正十三年八月十日ニ花山ニそ押寄らる、地頭職ニハ木脇刑部左衛門尉、薩摩入番に、鎌田出雲守の一男左京亮大將として各在番勉らる、其外求厂・八代の人々相籠てそ防ぎける、阿蘇家の軍兵數千騎押寄、混攻ニこそ責ニける、城中の兵死を不顧、骨を碎職ける、左京亮ハ西ノ口を堅めけるか、勇士トモニ下知をなし、二三度防ぎ返されけれども、敵猛勢なれハ、入替く攻ける間、左京亮も數ヶ所手を負、次第ニ身も弱りけれハ、木戸の柵に寄かゝり、手を合十念して、終ニ戦死を遂られける、木脇刑部左衛門ハ大手の口を堅けるか、諸軍兵を勇て、今を最後と思切、追つ捲つ戦て、

是等も敵ヲ追退といへ共、慈悉く打死し、其身も數ヶ所ノ手を負て、今ハ力なしとて、西の空を討詠、討人もうたる、人も戲の浮世の夢ハ今そさめける、と一首連て、眼近き敵ヲ追拂、終ニ打死せられける、薩厂・求麻・八代の流石の人々籠居たれハ、無比類おもひくゝに戦死とも諭ん方こそなかりけり、浮世にそかろき花の山、秋の霜露に紅葉して、散行浮世のならひとて、無常の風にさそハれ、皆散くと成ニける、名をハ故郷に留置、姿ハ花の山かけに草露と消ニけるを、敵も味方も押双て、哀成かなと申さん人そなかりけり、此由薩厂へ相聞えけれハ、三州の軍勢我先ニと續きのほる程ニ、三万餘キ早八代に着ニける、同閏八月十二日、法蓮寺か嶽に差登せ、陣所を見せ給ふ処ニ、若武者共足輕共を卒して、隈庄口に野武士を翔、敵五六十人打取、其競に幸佐城ニ押寄、混攻ニ攻ける程ニ、無時刻攻落し、勝吐氣動と作りける、同十三日、堅志田の城押寄、唯攻ニ攻にける、鹿兒島の住人始良新二郎、大手の城戸に於て、無比類振舞なるか、其比年ハ十六歳、即打死せられけり、平田左馬允連々志深くおもへる人なれハ、此由聞よりも、城戸の内におもふ敵を打

取、我身も疵を蒙り、始良へ取て被出ける、無比類次第也、奇手の軍兵下楯ひを攻破り本丸へ攻上る、敵も烈く戦といへとも皆悉く打死し、城もすなはち落去せり、城主妻子をハ福島の人と生虜ける、過し比花山打果されし人との、手向ひニせよとて引張て見せられければ、我身の上と心得て、隈之庄も美船も無爲方やおもひけん、同十五日の早朝に城を棄てそ逃退ける、其より津守・木山・友智・中山も皆城をあけ逃去ける、

阿蘇の惟行も幼少に御在せしか、はや降参して薩厂の下へそ参給ふ、又合子ノ藏人ハ吉松陣の折節、野心の志あり、吉松の陣ニも相火に鉄炮打せツ、敵方へ告知らせ、高瀬陣の慈遠く取陣、種々の成謀計也、美船の知行の折節、露顯して合子を下城させ、八代の内小野と云処ニ移し置れるか、又薩厂のこたく参り、菱刈羽月の山里ニ暫く住居せられける、和井府も隈部も吉松陣の折節御約束申けれども、いまた参さりける、此刻知行せられ、美船ニハ義弘打入給へハ、隈庄ニハ伊集院忠棟打入られける、即城の親政・伯耆顯隆・同舍弟の顯廣、其外隣國の大名郡司参陳シテ御祝言を申られければ、肥後國中ニ殘者ハなかりけり、去程ニ此度

御手裏に進ル城數、津守・木山・友智・中山・白石・田代・武宮・高佐・堅志田・隈庄・美船、此表ハ合子・和井府・鴻巢以上四ヶ所、一月ノ内ニ御分領と成ケレハ、薩厂の人々ハ目出度御世と喜ひ合ん者ハなし、同九月下旬ニ義弘ヲ始として諸軍兵皆歸陣をそ被成ける、右馬頭幸久美船の番大將として御坐せは、肥後國中之人と番替りニ美船の番をそ勤らる、

77 「日記」

一天正十三年ノ春、八代ノ北川海道ヲ山忍ノ爲也トテ、花ノ山ヲ根陣ニ取構、地頭トシテ木脇刑部左衛門尉ト申人置玉フ、同年夏頃御船宗運老躰故ニヤ勞死有、彼宗運カ嫡子三河守・三男林越前守兄弟ハ、父存命ノ時、不快有テ肥前ノ如退、後ニハ薩厂へ訖テ肥前ノ片原へヲハシケリ、然ニ依宗運カ跡二男相模守親則連續ス、阿蘇役ハ八千町催テ、八月十日ニ彼花ノ山ヲ賣落シ、木脇刑部左衛門ヲ始トシテ、數百人討捕故、薩厂ヨリ腹恐ニ思入テ、日隅薩肥ノ軍勢十万余騎引卒、八代ニ着陣、同閏八月十一日、隈ノ莊口へ發向、二百余人討捕、同十三日、高佐・堅田兩城ヲ結落有シカハ、同十

『長谷場越前日記』

五日ニハ、三母・木山・津森迄皆打捨テ退散ス、限ノ
 莊モ頓テ下城シテ薩^(殿)ノ渡ス、阿蘇幼少タリト云トモ
 降參也トモ云、中山モ被捨、亦合子^(殿)役吉松陣ノ時野心
 有夏カ、三船知行ニ預テ、合子モ下城シテ退也、飽府
 モ此限邊殿モ吉松陣ノ時約束ニテ、此砌知行也云ト、

一肥州八代ニ花か山と云へる新城を被取せ、右ニ申候こ
 とく、地頭ニハ木脇刑部左衛門尉ニ被仰付、入御番と
 云、^{天正十三年八月十日ニ花か山ニ押寄ラル}
 鎌田左京亮被指箆、此時に阿蘇家より勢替を、折

節弥生半の事成るに、遅櫻とハ名のミ聞く、春風共ニ
 無情、花か山を攻落して、右兩人を打果し、てきは我
 か地ニ引かへる、跡は哀ぞ増りける、花が山の城内衆、
 無類粉骨者、誠ニ一騎當千共、懸る事を可申と人と物
 沙汰いたす也、其中ニも今朝爰ニテ被遂忠勤鎌田左京
 亮、城と番所之間を一里隔て居たりしが、敵走箆めと
 見るよりも、駒一物ニ鞭打て花が山ニ懸け、とう林ニ
 ハ牛をつなぐ、花山ニハ馬を放ツ、是本文と乗り捨て
 西の山口を持堅め、寄手の勢を請留て、式三度四五度
 防歸すと見得けるか、味方は無人成りけるに、疵者數

か所ニ蒙りて、敵ハ猛勢入易へて、もみニもんで責戦
 へハ、痛手の數に勞れ宛、なにかは以てこらふへき、
 鉄炮構ニ取り付て、打物を杖ニツキ、西ニ向て十念し、
 立ちわうしやうをそ被遂ける、可惜く、遅櫻と諸共
 ニ無常の風ニさそわれ給ひ、同心の人とも弓手や妻手
 や枕として、骸はさらすといへ共、名を萬天にそあけ
 ニける、又爰に木脇刑部左衛門尉とて城地頭之有りけ
 るが、大手の城戸ニ指合て、今を再期と思ひ切り、大
 音上て名乗様、花か山の兵物か手柄之程を見せんとて、
 太刀を取て打合せ、追つまくつ戦て、續く其勢なかり
 せば、心は猛く思へ共、御方を打せ、我も又數か處の
 疵ニ無力、加下知うちよりも、西の空を詠めやり、一
 首ハ角ぞ侍りぬ、打敵と被討我も諸共に憂世の夢を見
 終てける哉と辞世して、柳は緑り花は紅と云捨て、
 多勢か中ニわつて入り、向ふ者のまつかう、逃る者を
 バほろかけ、當る処を幸に、手本ニ進む兵物を七八騎
 程切り伏て、手柄を致すといへ共、跡より大勢落合て
 最中ニ取箆て、太刀下に木脇をやミくと打果す、是
 を見る敵味方惜ぬ人はなかりけり、良等の兵物も手柄
 の合戦致し宛、枕を並て打死す、是を見て走せつ、き

たる軍兵者、念佛唱へて廻向する志こそ哀なれ、兵もの、交りハ自他一如と觀し宛、頼ミ多かる心也、

79 「義久公譜中」

一天正十三年七月三日、甲斐宗運死去云々、

80 「全」

一天正十三年、木脇刑部左衛門尉祐昌・鎌田左京亮虎肥後州花之山壘ニテ遂戰死、祐昌有辞世、

うつ敵とうたる、我ももろともに

憂世の夢を見はてけるかな

一同年八月廿九日、發軍衆於肥後州豊田口、屠殺強敵六十三人也、

81 「長谷場越前日記」

『閏八月也』

一薩摩大隅日州之軍兵を打登せ、天正十三年八月十二日、法蓮寺嶽ニ諸軍勢を上て、御陳所を被見せ処ニ、足輕衆ニ打添ひて、若武者衆ハ岩下町を破却シテ、河登りを放火させ、かうさの城を攻落す、打續き堅志田城を被詰、本口の板城戸ニ而、始良新次郎軍勢を致て戰死

也、平田新四郎傳等ニ合戰して、疵を蒙り引退く、懸

りける処ニ、寄手の兵物落合て、彼板城戸を攻破り、内城に詰上り、大場ニて合戰し、太刀下に敵余多打留

て、其儘城を乗り取て、勝吐氣を被作、此時も御大將

軍兵庫頭義弘様御發足ましますば、伊集院右衛門太夫

御供ヲ被致て、かたし田の城主なる北が妻子を福島衆

ニいけとらせ、花が山ニて過ぎ終てし人との手向とこ

そは見せられけれ、此由を聞かからに、我か身の上と心得

得て、限之庄と三舟(無脱カ)ハ方爲城を捨てそ逃ニける折節、

是を見合て、合子藏人氣を替へて、御味方ニそまいら

る、先く被任其儀、御大將軍兵庫頭義弘様者、御船

か館ニ御動坐を被成けり、伊集院右衛門太夫ハ限之庄

ニそ被討入、去程ニ城越前守父子三人者追付て、御祝

言を被申上、宇都顯高も早速ニ參陳を被致、近國之人

衆も不殘祇候仕り、大慶を言上す、然處ニ合子者、謀

略をのミニシテ、吉松表の御陳ニも相圖之鉄炮打せつ

、敵城江内略し、筑後高瀬の陳ニ而、慈遠き陳取て、

度々の緩怠被致、爰ニて下城させんとて、御手勢を被

指向、最も賢く操出し、即下城ニ事成りて、八代の内

ニ有る小野とやらんニ被差置、如此の住居しが、世上

84

『池田右近將監貞安覚書』

一豊後へ御出陳之時分、親六左衛門事、かたし田与申所

83

『日向記』

(本文ハ七七号記事ノ後半ト同文ニツキ省略ス)

82

『勝目覚書』

(本文ハ七六号記事ノ後半ト同文ニツキ省略ス)

の風聞有しかば、又彼里をも追立て、菱刈の山里の羽月とかやニ被召置、其後なにか隠るらん、然者阿蘇家も面々ニ御幕下ニ祇候して、御太將の御目ニ懸り開陳す、御手裏ニ參る城數ハ、津盛りと木山ニ友知・中山・白石と田代まどをき武宮とて、高佐・堅志田・隈之庄・御舟、合て拾壹なり、又北目ニハ合子・鴻の巢・わいふとて、以上の城數を三拾日ニとりひしき、同九月下旬ニハ、兵庫頭義弘様を奉始メ、諸軍兵も御供を仕りて開陣をこそ被成ける、其後ハ御舟の御番大將ニ右馬頭の御坐有りて、肥後の國衆を御加勢ニ被差置、一段之仕合也、

85

〔全〕

ニ而分捕申候処ニ、中將様御内衆上野半助殿と申人、首論被申候、勿論ながら親六左衛門之敵ニ罷成候、翌日かけ野ふし御坐候刻、右之半助殿分捕仕られ、敵のくびを 御兩殿様之被掛御目候処ニ、又親六左衛門も分捕仕被掛御目、御兩殿様御感不淺候事、

86

『紹劔日記』

一豊後方 惟新様御退被成候時分、あせ地越ニ而、御乗物之御先を川上四郎兵衛殿、御後ハ親や六左衛門まハし申候由、承申候事、

一天正十三年乙酉、武庫様八代江御發足有て、隈之庄にて防戦有、其後堅田之城責故、敵數勢亡早、久高敵武人打也、夫方三船・隈之庄を始、十ヶ所之城々御知行、夫方肥後一國無殘所、然ハ筑前之國の住人秋月方連と申通候、此刻也とて、豊前之國の住人高橋なんと言合せ乱かましく成行、龍造寺親類家張と申ハ、肥後北之関ニ有けるも、高信打死之時分より、肥前へ逃歸間、筑後之士衆、皆々嶋津殿へ申入之間、國家靜ニ可然之

由ニ而有けるに、ちくしと云る侍一人、悪け成事共申候間、圖書頭爲大將、ちくしか城へ押懸可責よしなれとも、さすか遠見にして、しほはくれけるに、若手の衆無思案差寄之處ニ城衆打て懸る、先衆中存之前ニ崩ける、見苦しかりし處ニ、久高こたへ合せ追歸す処ニ、敵もまた一足も不去逢合て、敵ハ鎧、久高ハ刀鎧をもさはかせず、たゞミかけて打処ニ、彼敵ひたと組て、久高を下にして添差をぬき首をとらんとす、久高も右之手ニ太刀を持たなから切れとも、敵の甲之しころに掛けて、刀ハ長し、無了簡、唯左之手にて、敵の刀を押のけくする間、はゞき本ニ而、手のくひ三四ヶ所切られ、菟角時刻有程ニ郎等つゞき合、それを刀ニはねおき、鎧而其敵を打早、如斯候而、其首を持せ、圖書殿前へ參、夫を見る若人共、各々押懸、城戸たれ・堀垣・岸溝ともいわす責寄、敵數刻雖防戰、城を責取早、如斯時分、ちくし一身ハ生取也、扱城をは捨候而、薩州衆筑後江引歸る、然處ニ秋月方申子細有由者、筑前之國ニ岩屋と云る城云々、

天正十三年九月朔日、居飯田山地輩之中、有興呂木新介者結黨徒企隱謀之聞、又甲斐宗運之有司藏岡讀岐者告田代宗傳曰、薩人吐欲戮宗傳之虛言、其罪甚以不輕、遣島津圖書頭忠長・上井伊勢守覺兼兩將之士、屠殺興呂木氏兄弟・藏岡氏父子也、
 同月二日、使新納右衛門佐・本田刑部少輔・稻富新介達合志入道宣頓曰、子息藏人親重匪翅有隱謀之名、有數通隱書貯宗運之舊宅、見之誦焉、不足爲疑、然而宣頓自參歎訴敢以不止、我不忍聞之、欲宥其罪、則肥筑前後州薩隅日三州賢將勇士共同其意曰、親重之隱謀既以露顯、若有不行斬罪而宥其科者、不得屈旗下云尔、我有一人之罪、得群衆之怒、則國家危急宛如風燈、當令宣頓及孫子居邊境、於合志城者速可退去、若不信此言者忽可及破滅之謀、宣頓仰天伏地、雖請宥免不叶、而後通件旨趣於合志、同日、遣新納右衛門佐・稻富新介往合志、爲下城下知、諸卒亦粗從兩輩矣、

天正十三年九月四日、阿蘇氏寄使書、進太刀・馬、其使者稱村山美濃守者也、其書無裏付、以故執事等不受也、

使者曰、先是所贈大友氏之書不爲裏付、類其書如此乎、
即遣矢部書裏付、再可獻之也、

天正十三年九月五日、新納右衛門佐・稻富新介差一价於
合志曰、合志藏人親重無異儀爲下城、寄中宿於小山村云
云、

同日、秋月氏・龍造寺氏・筑紫氏以使書據祝詞、進太刀
・織物等、又自覺島 太守賜兩使伊集院淡路守・平田豐
前守也、

天正十三年九月六日、爲犯三池封疆、伊集院肥前守・山
田越前守・猿渡越中守等、率宇土・隈本・大津山・和仁
・邊春・小代之軍衆、進入宇津・久我、放火山下里目之
邊、則江之浦・堀切之敵、難勘忍乎、然則逼秋月來豊後
敵軍亦難堪、而無程可退陣乎、

天正十三年九月七日、自肥後至豊後之通路、未知其難易、
由此今日遣新納武藏守赴其封疆、副以平田豊前守・柏原
周防介也、

同日、使野村兵部少輔・鮫島備後守持十有一箇之條目上
達覺島、是亦令伊集院淡路守・平田豊前守、所命之告返
答故也、

天正十三年九月八日、前日阿蘇氏寄無裏付之書、執事等

不受、是以今日爲裏付以持參也、仍受之誦焉、使者村山
美濃守請改名、不許、然而強請不止、故任丹後守、不堪
其悅持甲冑來、以爲謝禮也、

同日、內空閑下野守鎮房爲祝禮所參進、遂對面也、

天正十三年九月十日、使稻富新介達諸將曰、相良義陽於
堅志田之邊響之原遂戰死者異于他也、以故立其後於求麻
矣、今也稱懸命地、可充行豊田於相良氏、諸將共以善焉、
同日、出田助九郎有爲訟訴之事曰、小子稱號土地、當時
爲公領、請許之於吾、諸將聞此言曰、今也城入道一要抽
無貳之忠節、助九郎者一要之愛子、雖曰許之於渠、何妨
之有乎、所以充焉也、

同日、島津中務大輔家久使吉田右衛門佐・高崎越前守通
達曰、高知尾已以出所質屬旗下、不血刃實靜謐也、且復
伊集院下野守・比志島式部少輔・上原長門守・鎌田出雲
守・吉利下總守等共在高知尾、各評議有言曰、豊後發向
之佳期宜有此時云云、請其可廻籌於帷幄之中也、

同月十一日、使稻富新介報家久之使者曰、既高知尾所屬
手裏、家久謀計之所致也、有孰敢比之者乎、且復豊後發
向諸將衆心、無一人之有異違歟、如此則請可否於天神地
祇、而後宜定進發之期也、

同日、鍋島飛驒守寄捷書曰、針目之豊後陣敗北、夜中悉以退散、於細粹者、再令一价告報也、

天正十三年九月十三日、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守、自筑後注進曰、昨日十二、襲堀切城、忽以陷之、獲敵首三百餘員云云、

天正十三年九月十五日、有馬氏雖曰渡海來格、使兩輩糾遲參之故、而未遂對面也、

同日、裁數ヶ之條目、使平田豊前守・田代刑部少輔、上達覺島也、

天正十三年九月十六日、上蒲池某、憑新納武藏守有言曰、去歲以降、欲屬旗下之情、無少變違、然而無目付離散之間、所以不得一封之獻愚書也、又豊後州南郡之士五六輩、憑阿蘇氏、有請屬旗下者也、

同日、宥有馬氏遲參之罪、招旅宿進饗應、太刀・段子・酒肴持參也、

天正十三年九月十八日、使莊嚴寺詣阿蘇山、拜進龍蹄、以其次曰、成滿坊與福滿坊、有島津氏爭宿坊之風聞、吾能不知由緒、決定眞僞可有滿山衆口也、

同日、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守注進曰、江之浦城主得全身命、當去居城、其約既成之後、及領地

之多少、而變其約矣、自心有悔乎、依他人密通謀乎、未如其實也、

天正十三年九月廿日、出田助九郎來、而據前日稱號之地安堵禮詞、且復爲官途所望、仍任宮內大輔、謝兩事以太刀・刀・織筋矣、今夕招有馬氏、再進饗應也、

同月廿一日、甲斐大和守從矢部遂參向、先使一价憑稻富新介告官途所望矣、忠平報曰、應其求宜轉任焉、又有馬氏請不可有後來違變之得誓紙者素矣、然而渠者尊南蠻夷狄宗旨、亡日本神祇靈妙、何界誓紙於渠乎、裁盟約書以附與之、安德上野守亦對當家抽忠節、故畀感牘也、市來

大日寺爲國泰民安之修懇祈、從忠平抽精誠、今度得勝利者懇祈故乎、賞之以御船六町之內五町之寺矣、

天正十三年九月、肥筑前後州軍務既成矣、故廿二日、忠平從御船俟鷄鳴、所以爲歸陣也、

同日、島津圖書頭・上井伊勢守使日州財部之大平寺到矢部阿蘇氏居城也、曰、俾奈須氏黨族安堵本領、傳稱、矢部士卒、

爲違亂於其地、若爲事實者甚以不正也、再止關之、

天正十三年九月廿四日、奈須彈正忠以計策使家臣似商人、差豊後州郡之窺聽細大、其人來飯野曰、大友義統當時在小國堺、高壘深隍、堅弱地設城壁、封疆警衛不敢怠、且

復阿蘇氏大臣甲斐大和守親英從八代未歸宿、歸宿則爲評議、可致一行云尔、使大和守留八代、不許歸宅者可乎、副飯野之土、遣八代之地、謀之於臧者也、

天正十三年九月廿五日、忠長・覺兼等、使新納縫殿助・稻富新介・柏原周防介達甲斐大和守親英曰、阿蘇氏屬旗下、殆乎將迄靜謐矣、然而頃有彼此告來者、大友義統在小國邊地、廻計策於四方之最中也、阿蘇氏雖爲幼稚、（推）以親英之計略補公私云尔、丁此之時也、可在八代、而不歸焉、親英請歸者再三、然而不可背薩摩下知之旨、既有誓紙、何今變乎、伏其理赴八代矣、新納縫殿助・伊地知民部大輔及蒲生之士卒所以警衛也、甲斐長運・野尻某亦同赴八代矣、

同日、於隈莊戰場修大施餓鬼、福昌寺大和尚燒香也、新納武藏守・有馬筑前守沙汰之也、

天正十三年九月廿九日、新納右衛門佐、從堀切贈書簡於在肥後之執事曰、去廿六日、到着彼地、而達旨趣矣、筑紫氏陷寶滿・立花、由是高良・北野之豊後陣亦退散矣、即與返書於使、且復使大寺大炊助赴其地、達諸土軍勞、又山下守兵江之浦・堀切等謀之於臧云尔、

天正十三年九月晦日、阿蘇氏之有司等贈書於在御船之執

事等曰、甲斐大和守遂出頭、匪啻不許歸、且復所居渠於八代、由是弟右京亮逐電在野尻肥後内豊後境也、

天正十三年十月朔日、隈部但馬守注進在御船之諸將曰、山下已入手裏、而守兵未入來云云、秋月氏・龍造寺氏・筑紫氏依軍勞有勝利也、上井伊勢守等差使僧、據禮詞於三士以下云云、

89 「圖書頭忠長譜中」

在于飯田山之地輩之内、有與呂木新介者、抱數多之衆、欲起亂之幾既顯矣、又有倉岡讀岐守者、發於妄語、共有可誅戮之命、上井伊勢守與忠長使兩手之士、九月初日、討殺興呂木兄弟・藏岡父子也、

天正十三年九月廿四日、秋月・龍造寺・筑紫進使者、伸勝利之慶賀、又星野九郎・高良山本座主進使書、忠平主去廿二日、已功成名遂、而歸于本國矣、忠長代于忠平主見諸使也、同廿九日、忠長亦所歸陣也、

90 「上井日記」

▽九月

一朔日、虫氣出合候て、出仕不申候、然者本田刑部少輔

殿呼申候て、此由并昨日於隈庄談合落着候儀共、可被
申上之段申候也、秘書・拙者談合申候て、最前より飯
田山へ召置候地下衆之内、興呂木新介、人數など付候
て、曲者と聞得候、然者今分ニ召置候てハ、向後御爲
ニ難成候、生害させ申候て可然之由、一兩日前 武庫
様御内談ニ蒙仰候、并藏岡讃岐、是又田代宗傳へ腹を
切せられへき由註進申て候なる、其上宗運役人之由候
間、妄語の科与申、彼是生害可然之通候条、圖書頭殿
へ御内談申、兩手之衆にて、興呂木兄弟・藏岡父子生
害させ候、此由即申上候、何事なく科人成敗仕候、肝
要之由也、此晚忠棟當所移被成候とて、使預候、拙者
も使進之候也、

一二日、合志宣頓へ、新納右衛門佐・本田刑部少輔・稻
富新介、彼三人にて被仰出候趣、親重慮外之儀、世上
風聞候、雖然、宣頓老躰參上にて歎許候間、先く可被
聞召流御存分ニ候処、諸侍、ケ様之二心之仁同前ニ御
奉公難叶由被申候、此上、當國之諸侍も、如此野心歷
然之仁を御免許候てハ頼母敷からぬ由、一統ニ被申候、
宗運舊宅ニ數通之書狀拾置候中、親重文多々候、野心
之義ハ顯然候間、無理ニ御成敗雖有之候、御當家御

憐愍早晚之義候間、宣頓与孫之事、何方へも可被殘置
候、早く合志之城去渡可申候、於無其儀者、可被及破
滅之由也、宣頓被致迷惑、種く被申候へ共、證文等多
く候間、結句陳法共候ハ、一變させられへき段、委被
仰分候条、合志へ此由可申遣候、菟角頓与孫之事、向
後奉憑之外無別義由之返事也、此晚忠棟旅宿へ、小代
より初鷹到來候、去年頃初鷹見來候を、當州吉松御陳
所忠棟宿にて御賞翫共候て目出候、其御賀例ニ候間、
乍聊尔 武庫様御光儀可被成之由也、依夫御光義候、
御座躰、上座ニ御座候、客居秘書・拙者・本田刑部少
輔、主居新納武州・忠棟也、種く御会尺也、今春又次
郎太鞍仕候て、深行まで御慰共也、△

一三日、▽毘沙門へ別而看經仕候、此日△合志下城させ
られへき爲、新納右衛門佐・稻富新介、濫妨狼藉下知
之爲被指遣候、此外御番衆勢くと被指遣候、寄合中・
噉之衆中少く宛、是又下知のため遣候也、▽此日も各
祇候申候て、終日談合共也、

一四日、甲斐三河守父子被來候、其後無沙汰之由候、并
織筋一・片色一預候、拙者ハ不在合候て面談無之候、
阿蘇殿より使書進上候、村山美濃守と申者也、馬・太

刀進上候、書狀裏付無之候、然間、使者計御見參被成候、書狀者聊尔之躰候間、不審申、返候、使者申ハ、此前豊後などへも裏付無之候つる俣、如其被認候、けにも始而与申、又ハ身上御扶助候上ニ、如此躰相應不申候、尤之由申候て、即書狀矢部へ遣候て、可認直之旨被申候也、△

一 五日、合志方下城之由、新右・稻新前より被申候、下知等事成候て、無何事下城候由註進也、先々小山と云村ニ、親重中宿之由也、▽此日秋月・龍造寺・筑紫より使書を以御祝礼被申上、太刀・織物など進上候、使者御見參共也、此晚從鹿伊集院談州・平田豊前守御使也、△

一 六日、合志へ被行候下知衆など被歸、彼方之様子物語候、哀なる事共也、此日三池境へ軍衆少く被指登候、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守、此衆を始諸所之衆被指遣候、宇土・隈本・大津山・和仁・邊春・小代、右之衆也、御行ハ宇津・久我などへ、此方之衆取入、從夫山下里目邊放火させられ候て可然之談合也、左候ハ、とても江之浦・堀切之事ハ、難勘忍之由共也、しからハ秋月ニ取懸候豊後陳ハ、無程可引退かの

由共也、

一 七日、當國より豊州への通路等、一圓ニ不知案内候間、御談合等難成候、然者新納武藏守被見申へき由候て、被差遣候、又平田豊前守被指添候、柏原周防介、是も被遣候也、此日かこしまへ野村兵部少輔・鯨嶋備後守を以十一ヶ条御申之儀有、大概伊淡・平豊にて被仰候御返事共也、

▽一 八日、從阿蘇殿之書狀、裏付被仕候て來候、即上覽也、彼使村山方、名を被下度由申候、頻ニ懇望候間、丹後守ニ被任候、御祝言ニ鎧など進上申候、并甲斐大和守、忠棟まで神文進覽候、向後別義不可有由也、到私ニ、阿蘇殿より織物一預候、甲斐大和守より織筋一到來候也、此日内空閑殿御祝義のため參上候、御見參也、到私ニ、織筋ニ預候也、此晚加悅飛彈守より書狀、使を以音信候、并酒肴送來候也、

一 九日、早朝出仕申候、各御見參被成、御酒御寄合也、吾々宿所へ各礼儀共承候也、△

一 十日、▽出仕前ニ秘書・忠棟、拙宿へ御出之由申候、本刑・今春又次郎・石原治部右衛門尉・幸若与十郎、閑談にて御酒共也、從夫△出仕申候、種出合談合共也、

稻富新介にて被仰出候、相良義陽堅志口表響之原にて、無余義戰死候、然者相良殿へ、彼懸命地にて候条、豊田被指遣候て可然之由也、各尤忝奉存候、彼方より訴訟など候ハぬ前ニ、早々彼義被仰出候て肝要之由、申上候也、▽此日出田助九郎殿、名字之地明合候間可被下之由、此間御任被申候、如何に候へ共、當時ハ城殿何篇忠節深重候、然者一要思子にて候条、御辞退候て不可然候、先々被遣候て肝要之由候間、可宛行御返事被成、左様祝礼とて、使者前より織筋一持來候也、合志宣頓小宿へ徒然之躰にて被居候間、酒肴持せ候て、弓削甲斐介使ニ遣候、大慶之由共也、△此晚從中書公、吉田右衛門佐・高崎越前守兩使にて御申也、高知尾之事、質人指出申上候条、其分ニ先々靜謐候、少も可叶躰ハ無之見及被成之由也、付而ハ伊集院野州・比志嶋式部少輔殿・上原長州・鎌田雲州・吉利殿、右之衆高知尾口へ被續合候、然者彼衆も此節たるへく候、是非以豊州へ御弓箭可目出被申候間、御申之由也、別而拙者事、彼口存たる事候間、被仰候由也、

一十一日、▽中書御使兩人へ御酒寄合候、從夫彼衆同心申、出仕申候、種々御談合共也、△鍋嶋飛彈守より書

狀到來候、趣者、去五日、針目之豊州陳敗北候て、夜中ニ引退候由也、菟角急々使節にて可申之通也、▽此朝愚弟源左衛門尉身上訴訟之義共候、一ヶ条忠棟へ内義にて申候、伊集院淡州にて申候也、△此日中書御返事、稻富新介にて被仰候趣、さてハ高知尾之事、先々質人指出、屬御手ニ候歟、肝要候、就者、此節豊後入可目出之由、其元御談合にも出合候歟、此方御同然候、併御兩殿御神慮次第と被思召候間、諸談合も御下之由、勿論ながら被申候、然者御神慮次第可相定之由御返答也、此日爰元諸城地頭定候てこそ、四壁等荒まし候間、先々假ニ地頭定なされ候て可然之由、出合御談合共也、并檢地衆など被仰付候、

▽十二日、藥師如來へ別而看經申候、此朝秘書・忠棟・顯娃娃殿へ御酒參會申候、今春又次郎なども來候、会尺過候て出仕申候也、種々出合候て御談合共也、△

(二) 十三日、▽忠棟御宿へ可參之由候間、其分ニ候、秘書も御出也、△新納武州、從阿蘇夕歸宅候、然者彼塚目之躰共物語也、此日筑後表へ被指登候伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守前より註進候、昨日十二日堀切之城切崩、敵三百余被討捕之由也、各御宿へ祇候

申、目出之通申上候也、▽此晚豊州・北郷殿へ拙宿にて御酒參相候、新武・稻新・佐多宮内少輔殿・新納右衛門佐殿・田代刑部少輔・平野左近將監、彼衆也、種々酒宴共也、

(一)

十四日、出仕如常、種々之義共出合御談合也、此朝前

刻忠棟へ内義にて申候鎌源進退之事、伊淡にて返事也、条々尤ニ被思候、先々鹿兒嶋へ御侘申候て可然おほされ候、左候ハ、平田豊明日可被罷歸候間、其時御申

可有之由也、此日忠棟へ風呂焼せられ候、可參之由候間、秘書御同前ニ參し候て入候也、会尺共被成候也、△

一十五日、▽出仕如常、此晝樽一荷・食籠肴にて進上申候、拙者も御前ニ可參之由候間罷出候、御賞翫共也、

深水三河守など御前ニ有合候、良久御閑談共候也、△

次ニ當所など皆々一向宗と聞得候、然者此前より之事に候条、無届ニ御成敗はいかに候、先々彼宗旨を替

可申之由稠被仰、其後も一向宗ニ候する者ハ、是非以生害させ申候て可然之由、被仰出候也、此日有馬殿

參着候、先々遅參曲事之由、兩使にて被仰糺候、尤之

義、迷惑之由被伸候、併大村境出合事候て、此等ニ取

乱、遅參申たる由共也、此晚從頼娃殿可參之由候て、

振舞種々之義也、此日平田豊前守・田代刑部少輔を以、鹿兒嶋へ条々御申上被成、豊後入之御行、又ハ筑後表之様子、彼是御弓箭之御行共也、▽有馬殿礼義承候、太刀・片色一預候、

一十六日、出仕如常、從上蒲池此方へ可申入所存無別儀

候、去年已來申通旨無相違候、書狀にて此段可申入候へ共、目付指添候条、無了簡候、先々新武まで申入由

共也、豊州南郡よりも五六人、阿蘇傳ニ被申上衆有之、此日有馬殿へ御寄合被成、御祝物太刀・段子也、酒肴種々進上也、御座躰、御次忠棟・新武、客居有馬殿

・拙者・安德上野守也、終日御酒宴共也、今春又次郎大鞍仕候、松大夫父子參候て、舞共申候、幸若与十郎

も舞共申候、石原治部右衛門尉狂言など仕候也、有馬

殿舎弟兩人被參、御酌共被申候、其刻、有馬殿脇刀進上候也、安德殿拙宿へ礼也、太刀・百疋預候、

一十七日、奈良大仏本願阿弥陀院下向候、無沙汰候とて礼ニ御座候、二月堂牛王預候、拜領申候、即御酒參會

仕候、阿蘇山行者かたより、仁王經千座御祈禱被成候

とて、吾々へも卷數預候也、此日於御宿、松大夫舞

申候、みな鶴・裏野合戦二番舞候、勿論裝束にて舞候

也、此日當所へ居候者として、女樂來候、一曲御酒之時申候、然者織筋一くれ候て歸候、此夜野村大炊兵衛尉へ、平家讀せ候て承候、△

一十八日、▽阿蘇山守護之御宿坊之事、成滿坊与福滿坊被降之様ニ聞得候、然者御馬御拜進被成候次ニ、莊嚴寺を以、一向御不知案内に候、滿山談合被申、御宿坊定候て可然之由、被仰理候也、△筑後表へ被指登候衆より被申候、堀切柵之事、各粉骨以無吳儀被切崩候、信者江之浦之事、身上御助候ハ、城を可去渡由申候、其ごとく駈落着候処、一兩日前より領知沙汰ニ申強、相違候、何方よりか内通共有様ニ聞え候由也、將亦鍋嶋飛彈守へ先日書狀以、三池堺へ人數少く指登、到江之浦・堀切一行可被催由候、就夫伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守、其外餘多被指登候、相談被成、入魂肝要之由被仰候、▽其返書到來候、去十日之日付也、其趣、江之浦・堀切之儀ニ付、御成遲着候、然者前以可承事に候処如此候、如何く、殊ニ先城之事、俊長坊と申方、早く可打渡由候て被追拂候、依夫御届なと申理義無之候、右之番衆へ此等之義堅可被申候、今分に候ハ、案外之義出來可仕之由也、已上各得心難

仕返書にて候也、△

一十九日、▽廣徳寺、御使僧ニ夜前越着候、早く出仕申候へ、御急用之由忠棟承候間、罷出候、御意趣、先日平豊にて被仰候御返事、鮫嶋備後守・野村民部少輔にて御申、委被聞召候、大方事澄候条も候、△先御圖之事、御談合之上たるへき由、伊淡・平豊にて被仰候ニ、談合候ハす共御圖之由候、一圓ニ無御納得候、其故ハ、御家始候て已來、大友殿など程之衆へ御弓箭被召掛候事者、此度初たるへく候、其上肥後之事も、一向未靜候、此度御勝利候、然共、豊後衆一人も越度之儀ハ無之候、義統書狀所くニ候て、敵たるへき色ハ顯然候、併能く御談合候て、其上之御圖肝要ニ被思召候、先日如仰、菱刈近隣ニ御出合被成、御談合可有候、左候ハ、武庫様之御事ハ不及申、金吾・典厩・中書・老中衆も、一人も不殘、又ハ新武藏守・伊集院肥前守・山田越前守・伊集院下野守・上原長門守・鎌田出雲守・吉利下總介など祇候可被申由、此方より寄く之衆へハ可申渡由也、▽御談合ハ來月八日亥日にて候、是ハ無余儀節日に候間、從夫内ニ事行候様ニ可然候、さ候ハす八日過候てたるへき之由也、各爰元へ罷居候衆打

合、御返事之談合共也、忠棟宿所へ深行まで我々罷居候て、番盛等分別申候、又鍋嶋へ書狀遣候趣、先札之返書到來候、披見候、然者堀切・江之浦行之事、心元なき由承候、曾以無納得候、其故ハ、江之浦・堀切兩家之間ニ隔候て、通路不自由候通、連々承候、然者兩家之爲計ニ各粉骨仕、江之浦・堀切一行申候を無心元由、分別不申候、殊ニ案内出來候するなど、候事、如何様之儀候哉、難承知候、兼又堀切番衆此方より指籠候事納得候ハすハ、是者用捨可仕之通也、從肥前番衆被召置候事ハ、爰元ニハ曾不知由也、

一廿日、出仕如常、廣德寺ニ御返事被成候、条書、御前にて拙者認候、御談合之事、尤之義候、先日彼義にも口能共候つれ共、兩使不申分候哉、來月二日・三日、帖佐にて御出合被成、御談合可然之由御申也、此外巨細之義、難及書載候、此日出田助九郎殿被參候、先日名字之地之事訴訟候処、被下由候御礼也、刀進上候、并官途被申候、宮内太輔ニ被任候、其御祝言、太刀・織筋進上也、到私茂、太刀・織筋預候也、此日忠棟小川迄歸也、此晚有馬殿へ御寄合也、御座中座也、客居有馬殿・拙者・有馬新八郎、主居秘書・有馬殿次男

・有川雅樂助、種々御会尺也、松大夫祇候申候て一曲共申候、有馬殿御酒進上候、御酌新八郎被參候也、一廿一日、有馬殿宿へ御礼之由候間、内義申而候へハ、天氣惡候て道散々候条、御出者可被指置之由候て、御宿へ參上也、御見被成、御酒御寄合也、長刀進上也、

此日從矢部、甲斐大和守參上申由申候て、先使來候、官途懇望之儀也、即稻富新介にて披露候、何と様にも望次第之由 上意也、此晚有馬殿拙宿にて寄合候、久賢兄弟三人・安富越中守、相伴奈良原安藝守・有馬筑前守也、種々酒宴共にて候、此中新武御座候て、從夫又、有馬新八郎殿酌など頼候て酒宴也、此日有馬殿向後御違義有間敷御神文被下置度由、連々訴訟候、左様之義、南蠻宗にて候間、難成被思食、只御書にて被仰候て可然之由候而、拙者案文仕、新武ニ書せ申候て被遣候、當家一致ニ被申已來、連綿之御懇志候之条、向後無變易可被仰談候、万一世上申妨事於有之者、互不殘胸意可被仰述之由共也、并安德上野守、是又忠節人にて候間、御感狀被遣候、是も案文ハ拙者仕候て、新武へ書せ申候而遣候也、秘書・拙者前より安德方へ、知行之訴訟共候、此節者、諸口繁多故難成候、後日可

申調之由、證文差遣候也、嶋原之法然寺、爰元へ寺家被賜候祝礼として被來候、織筋一被持來候、市來大日寺爲御祈念、武庫様御側ニ御供被成候、此度御勝利目出被思食候、就左様之儀、御船六丁之内ニ、五町之寺被進候也、

一廿二日、武庫様御歸陳被成、一番鳥之御打立也、秘書御同前ニ御門送ニ參上申候、雨降候て路次散々也、

然者廳而しかと可罷居之由候条、其俣かりやくへ歸候也、此朝矢部へ使僧遣候、日州財部太平寺也、趣者、奈須黨ニ本領等被安堵候、然ニ矢部衆違乱候欤、曲事之由申遣候也、此日甲斐大和守礼ニ被來候、鎧一領預候、自是前ニ、先く使者にて織物一端預候也、

一廿三日、甲斐大和守拙宿にて寄合候、客居甲和・稻富新介・野尻名字ノ者、是ハ甲和内之者也、主居新武・拙者・有馬筑前守、彼衆也、愛酒にて候間、良久酒宴共也、此日終日拙宿にて談合也、秘書も御出被成候、此晚各へ振舞候也、秋月・龍造寺・筑紫より使者越着候由案内也、從阿蘇殿使者被來候、仁田水方也、織物一ニ書狀相添候、即使者へ見參仕、御酒寄合候、仁田水方より銀子五文目くれられ候、

一廿四日、地藏菩薩へ別而祈念仕候、明日於隈庄戰場、

大施餓如御佳例可被成ため、福昌寺東堂御越也、使者にて御着目出由申候也、其御伴被成候所之衆、礼義也、日新寺・總禪寺・直林寺・法花嶽寺・妙谷寺、此外爰彼之衆僧達也、御茶・酒着など被持來候也、銘ニ御酒參会申候、福昌寺東堂様も、拙宿へ御礼として來儀被成候、御茶など被下候也、御会尺如常、此日秘書御宿にて談合也、福昌寺御宿へ秘書御同前ニ參候、御酒進上申候也、良久御閑談にて御酒也、此歸さ、秘書御宿へ可參由候て參候、御振舞也、秋月・龍・筑使者、秘書へ御礼ニ被參候、先武庫様へ進上物渡候、秋月より馬・太刀、龍より太刀・織物、筑紫より太刀・百疋、兼又星野九郎・高良山本之座主より使書進上也、秘書即見參被成候、拙宿へも礼義之由承候、明日被來候へ、其次を以御酒寄合候する由、稻新にて申候也、何と様にも分別次第之返事也、此日奈須彈正忠、計策を以賣人のことくやつれさせ、内之者を豊後へ指通候、彼者歸來候とて、飯野之衆被相烈被來候、趣者、義統當時ハ小園堺へ駈被居、城誘其外此堺行、用心之躰之由也、阿蘇家へも被仰組之由聞得候、然者甲斐大和守

此方へ罷越候、此歸を待居候て、一行之由申様に候、是非以彼者之事、爰元へ御留被成候ハ、何事有まじき由共也、

一廿五日、天神へ別而看經申候、此朝秋月・龍造寺・筑紫之使者へ、御酒寄合候也、稻新取成也、秋月殿より書狀并片色一預候、龍より書狀并織物一預候、筑より書狀計也、使者前よりも銘と少祝物預候也、甲斐大和守へ新納縫殿助・稻富新介・柏原周防介にて被仰出候、今度熟談被成、阿蘇家御幕下被參、靜謐之躰候、雖然、頃諸方より申來候者、義統小國堺へ被居、諸方計策最中候、然者、阿蘇殿ハ幼雅之仁と聞得候、悉皆親英下知まで之阿蘇家と聞得候間、此節者八城へ駈親英堪忍被成候て可然候、殊更神文などにて御下知之外有間敷通承候上ハ、御辞退候ましき由申候、種々辞退候つれ共、稠申取、如八城指遣候也、新納縫殿助・伊地知民部太輔・蒲生衆相添誓固させ候て、甲斐大和守八城のことく指越候也、甲斐長運・野尻名字之者、彼等も同前ニ可被召烈之由申候也、此朝内空閑殿より使僧・使者兩人也、織筋ニ預候、趣者、前年已來山本郡格護候、殊更去年吉利總州・伊集院野州取成故、各吉松ニ御在

陣之刻罷出申上候、然ニ頃山本郡之内、城家來之者共少く押領共申候、吳儀を可申候へ共、當時御弓箭繁多之最中に候俣、菟角用捨候、御判形被下置度由也、返事、吾々若輩計罷居候、追而寄合中談合を以、委可申渡通申候也、此日隈庄戰場にて大施餓鬼也、福昌寺御來儀にて執行被成、新納武州・有馬筑前守、諸篇被取成候、然間、彼兩人指遣候て成就也、此晚仁田水左衛門大夫拙宿にて寄合候、稻富新・川上宮内少輔など相伴ニ頼候、種々酒宴共也、此座中、新武より、城一要まで邊春方書信候、それを一要、新武迄持せ也、爲被見被持せ候、高良山北野之豊陳ニ當候て、火色顯然候、定而敗北候哉之由也、即秋月・龍造寺・筑紫之使宿へ、此狀持せ見せ候也、此晚新武へ秘書・我々寄合也、△一廿六日、▽早朝秋・龍・筑之返事、稻新・有馬筑にて申候、秋より一途密談之儀共候、委承置由、彼方使惠利内藏助へ一通遣候、龍へ、武庫様・忠棟より神文被遣候、其文言、所好ニ相吳之由被申候、拙者右之案文共談合申たる事に候間、一々何々之儀候由申披候也、我々返狀等、稻新・有筑にて渡候也、高良山本座主麟主より、祈念之卷數并書狀預候、是も相應之返事申候

也、△此日內空閑殿・城殿・伯耆殿へ、筑後表御勝利之儀并軍衆尙々加勢之由書狀にて申候也、各御意次第人數可指登之由也、

▽廿七日、筑後表へ又々被指登來へ觸申渡候、此日飯田山へ參候、福永備後守同心申候、種々会尺共被成候、拙者も御酒進之候間、彼是酒宴共也、尊圓親王之御眞筆之月席之二字預候、并臺・天目預候也、此晚秘書御宿へ直ニ被召寄候間參候、御酒宴共也、

一廿八日、荒神へ看經別而仕候、此朝圖書頭殿拙宿へ申請候、酒宴共也、飯田座主昨日之礼ニ被來候、又御酒にて御閑談共也、此日新武へ談合申候て、秘書ハ先々明日御歸宅肝要候、拙者ハ筑州目、今一到來承合、可罷歸之由申候也、此夜秘書御宿にて談合共也、△

一廿九日、▽早朝秘書御打立被成、拙宿へ暇乞ニ入御也、然処、△堀切より新納右衛門佐書狀到來候、去廿六日

彼方へ越着候て、爰元御存分共申候、先々寶滿・橘、筑紫殿被切取、就夫高良北野豐陳敗北候由也、▽即返書拙者認候、巨細大寺大炊助各へ辛勞之御礼ニ指進之候間、用口上由也、大寺大炊助にて申候趣、各軍勞被成事、山下へ御番衆被召置候て可然之事、江之浦・堀

切之事共也、此日北郷殿・喜入殿など歸宅也、

一卅日、從根占殿可參之由候間其分候、種々会尺共也、此日稻富新介殿酒肴持來候、女樂など來候て、一曲共申候、阿蘇役人中より書狀到來候、甲斐大和守出頭申候処ニ、八城のことく被遣候、就其、如何分別候哉、彼弟右京亮退出候、野尻と申豊後境へ逐電申由也、此日龍造寺より八城へ、此間罷居候質人替到來とて使者遣候、織筋一預候也、此晚新武・根占殿・稻富新介、拙宿にて寄合申候、酒宴にて閑談共也、各深行ニ歸被成候、尊圓親王之御眞筆、從宇土求出候、左様之物各被見候て褒美共也、△

91

「義久公御譜中」「正文在卷本トアリ」

(折封上書)
嶋津修理大夫殿

就 勅説染筆候、仍關東不殘奥州果迄被任 倫命、天下靜謐處、九州事于今鉾楯儀、不可然候条、國郡境目相論互存分之儀被聞召届、追而可被 仰出候、先敵味方共双方可相止弓箭旨 叡慮候、可被得其意儀尤候、自然不被專此旨候者、急度可被成御成敗候之間、此返答、各爲ニ

94 未申馴候而、令啓入候之事、雖楚忽之至候、風便難過故

「上書」
伊集院右衛門太夫殿

久賢

有馬左衛門太夫

95 「北郷一雲譜中」

天正十三年乙酉十月七日、太守義久公召中務太輔家久
・圖書頭忠長・平田美濃守光宗・伊集院右衛門太夫忠棟
・町田出羽守久倍・本田下野守親貞・伊集院下野守久治

者一大事之儀候、有分別可有言上候也、

「天正十四年也」
「天正十三年也」
拾月二日

（秀吉）
（花押）

（義久）
嶋津修理太夫殿

92 「忠元譜中拔書」

（本文ハ六九号記事ノ後半ト同文ニツキ省略ス）

93 「御文庫ニ番箱義久公一軸中」義久公御譜中正文有之トアリ

謹而言上仕候、抑今度到肥後表被成御發足、諸口被得御
大利御歸陳、尤千勝万勢ニ候、此等之御祝言爲可申上、

如此候、仍段子一端 白地、紋牡丹、 令進上候、隨而連々申上訴

訟之儀、御老中迄申入候、此度悉皆落着之儀、被仰出候

様ニ、宜預御披露候、恐惶謹言、

「天正十三年秋ト御譜ニ朱カキ」
拾月五日

久賢（花押）

（忠棟）
伊集院右衛門太夫殿

候、仍薩豐之間、自京都之以御媒介、一和被成候処、去
年以來筑後表江長陣、剩御舟爲始、義統御廻文在と所と
滿候、然時者不單是非儀候条、早竟可爲鈍楯候、就夫
御進退之儀、承及候、御本意事、此時節候欵、以御納得、
御返事者御懇望之所可示給候、以其證跡令披露、何様一
稜可致馳走候、後と以可御心安候、乍不申能と蜜と之御
才覺肝要候、猶巨細自中途可被申達候之間、先令省略候、
心事、恐と謹言、

「天正十三乙酉」
十月五日

忠元判

（義美）
入田殿

まいる御宿所

「ウラニ」

新納武藏守

忠元

「上封」
入田殿

參御宿所

「右ノ正文、在上町人西村某ト云」